

いろはす色な愛心

ぶーちゃん☆

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

総武高校一年生にして生徒会長の一色いろはは現在絶賛片想い中。そんな想いを大好きな彼に伝えるべく、一色いろは、一生懸命奮闘します！

完結しました。第16話からの番外編はいろはすSSでは無く女オリ主モノとなりますのでご注意下さいませ！

# 目次

一色いろは編

一色いろはは恋してるっ | 1

一色いろはは企てるっ | 13

一色いろはは攻めまくるっ | 26

一色いろはは後悔なんてしたくないっ | 45

一色いろはは相談されるっ | 58

一色いろはは葛藤する…… | 72

一色いろはは紹介するっ | 88

一色いろはは久しぶりに夫婦漫才を楽 | 103

しむっ | 103

一色いろははついに空気と同化するっ | 103

……

一色いろははフラグを回収する…… | 115

129

一色いろはは決意をするも間が悪いっ | 143

一色いろははついに決戦の朝を迎え | 156

るっ | 156

一色いろはと愛川愛 | 167

一色いろはは想いを告げた | 187

いろはす色はあなた色 | 200

愛川愛編 | 200

愛川愛編

愛川愛は初恋と出会う | 214

愛川愛は過去の記憶に今を見る | 214

227

愛川愛は一人感謝の頭を下げる

一歩

251

愛川愛は思いがけない遭遇を果たす

愛心

264

愛川愛の記憶は、ついにあの日を迎え

る

———  
281

愛川愛はライバルに決意を宣言する

293

愛川愛は想いを解き放つ

———  
306

愛川愛の初恋は終わりを告げる。そし

て……

———  
320

愛川愛が今日踏み出すのは明日への第

一色いろは編

一色いろはは恋してるっ

「葉山せんぱーい！お疲れさまですー」

「ありがとういろは」

わたしはサッカー部主将である葉山先輩にタオルを手渡すと、ついでに他の先輩方もタオルを配る。

「お疲れさまですー」

「お！一色さんきゅ」「あんがといろはちゃん」「サンキュー！生徒会長サマ！」「ちよ!? いろはす俺の分は!?!」

わたし一色いろはは、ここ県内有数の進学校・総武高校一年生にして生徒会長をも勤めあげる、この学校でもかなりの有名人なのである！

そんな生徒会長のわたしが、今日は久しぶりにサッカー部の朝練に付き合っている。なぜかといえば、今日はある計画を実行する為に朝からちよつと興奮気味で、早く起きてしまったから！

いやサッカー部に所属してるマネージャーのハズなのに朝練参加の理由がヒドいもんなのは百も承知ですよ？

でも正直もうマネージャー業には何一つ必要性を見いだせなくなっちゃってるから部活出てくんのダルいんですよねっ、テヘツ☆

「ねえいろはす俺のは〜？」

だったらマネージャー辞めれば？って話なんだけど、それはそれで問題点が2つほど。

まず第一に、わたしがマネージャーを辞めてしまうと、ある人に迷惑が掛かってしまうから。

だって……あの人はわたしが未だにマネージャーを好きでやってると思ってるし、それなのに自分が押し付けた生徒会長という役職を理由にわたしが部活を辞めてしまつたら、たぶんあの人は自分を責めてしまう……

「つべー！いろはすシカトとかマジないわー」

第二に、あの人への密かな想いを誤魔化す為。

あの人はわたしが未だに葉山先輩を好きだと思ってる。てかわたし自身がそう仕向けてるんだけどね。

それはあの人に対し……あの人達に対してあくまでも伏兵で居るために。

真正面からぶつかっても敵いつこない強力過ぎるライバル達に少しでも対抗する為には、こんな状態・こんな立場をも有効に利用しなければいけないのであるっ！

だからわたしはサッカー部を辞めるわけにはいかないのですよ！

「いろはす……」

「あーもう、うっさいです戸部先輩！タオルならそこら辺にいくらでも転がってますよっ」

そんなこんなで、わたしの久しぶりのマネージャー業は今日も順調に流れていく。

× × ×

「いろはちゃんお疲れさま〜」

「あ、愛《まな》ちゃんお疲れっ」

「いやー、やつぱりいろはちゃんが練習来てくれると助かるよ〜！」

「うう……ごめんね愛ちゃん……あんまマネージャーに入れなくって……」

「んーん？全然いいよっ！むしろ生徒会のお仕事が大変なのに、部活辞めないでたまにこうやって手伝いに来てくれるだけでも助かつちゃうよっ」

うう……愛ちゃんホントにすみません……マジで心が痛い……

最近部活サボってるのは奉仕部に入り浸ってるからだなんて絶対に言えない……

しかも辞めない理由も我ながら我欲まみれでヒドイ……

うちのサッカー部には女子マネが4人も居るんだけど、わたし含めて入部理由がアレなもので、真面目にマネージャーやってるのは愛ちゃんとわたしくらいなもんなだよ  
ね。

わたしって意外とキツチリしてるから、いくら入部理由がアレとはいえ仕事をする以上はちゃんと真面目にこなすんですよ！

だったら毎日サボんなよっってお話なんだけども。

と言うわけでわたしが部活に来ないと、実質的に女子マネ一人状態なワケだから本当に申し訳ないです……

「ゴメンネー！もうちよつとくらいは入れるようにするねっ」

わたしは目をバツテンにして愛ちゃんに手を合わせた。



「じゃあ期待しないで待ってるね〜」

するとこやかに笑顔で答えてくれる愛ちゃん。

ホントいい子っ！

さてと！今日の部活もそろそろ終了かなっ。

あとは苦痛な授業を4時間受ければあの計画の発動だ！

ふふっ！待っててくださいねっ！せーんぱいっ♪

× × ×

四時限目のチャイムが鳴り響いたと同時に、わたしはお弁当の入ったバッグを肩に掛けて、ささっと職員室へと向かう。

生徒会室の鍵を借りに行かなくてはならないのだ！

「ありゃ？いろはお昼は〜!?!」

「ごめんっ！今日の昼休みはちよつと用事あるんだっ！」

友達に簡単に謝罪して、ダッシュで教室を飛び出した。今日は昨日から注視してた天

気予報通り、タイミング良くちようどお昼に雨が降ってくれた！

ま、雨が降らなくても先輩がお昼に1人でどこに居るのかなんてのはもちろんリサーチ済みなんだけど、雨が降って先輩が教室に居てくれた方がこの計画には都合がいいのだ。

だつてアイツ絶対逃げるもん！

その点居場所のない衆人監視のもとでの教室であれば、逃げられないから言うこと聞いてくれそうだしねー。

ふふふっ……わたしのせんぱい取り扱い説明書は完璧なんですよ？

わたしはばちこーん☆とウィンクしながら、これからのヤツとの対決に想いを馳せた。

鍵を受け取り問題の二年生の教室へと辿り着くと、ちよつとだけ震える指先なんか無視して迷いなく扉を開け放つっ！

そりや確かに緊張でドキドキしっぱなしなんだけど、もう時間が惜しくて惜しくて仕方ない。

早く会いたいっ！早く約束取り付けたいのっ！

だから真っ赤になってそうな顔が、室内から流れてくる温風で誤魔化せるのはとても

ありがたかった。

「失礼しまーす」

わたしが扉を開き中を覗き込むと、教室内がザワリとする。

まあそりや二年生の先輩方の教室に、いきなり一年生生徒会長がやってきたらビックリしますよねー。

でもそんな事は今はどうでもいい。えつとお……………!!居た居た!

「あー居た!せんばーい!」

せんばい検定準一級(自称)のわたしには、先輩がどこに居ようとすぐ見つけれられるんですよ。

「やあいろは、どうしたんだ?」

「あんれー?いろはすどしたん?」

ありや、違う先輩が反応しちやっただみたいですね。

「あー葉山先輩こんにちはです」

まあみんなの可愛い後輩ですし、一応挨拶はしとかないとねっ!

でも葉山先輩ごめんなさい。葉山先輩に用はないのです。

なんかもう1人の声が聞こえた気がしたけど、そっちはまあいつか。

わたしはきやびるんつと葉山先輩に頭を下げると、すぐに視線をやツへと向けて声をかける。

てか最初の一声目で反応して下さいよ……

「あれ？先輩？おーい、先輩」

むう……予想はしてたけど無視ですか。

どうせ音楽なんか聴いてないくせに。

「ちよつとー、せんばーい？」

いやいや絶対分かってるでしょ!?なんか肩がビクツとしてるし！

まったくー……どこまで強情なんだか……

わたしは仕方ないなあ……と軽く溜め息を吐きつつ、愛しの先輩、比企谷八幡の耳にはまっているイヤホンを思いっきり引つ込抜いて耳元で呼んでやった。

「……………せんばいつー！」

「うひゃあー！」

するとビククリしたのか先輩はととてもキモい声をあげた。なにこのキモ可愛いき生き物！

耳に息吹き掛けたりチュツてしなかったただけでも有り難く思ってくださいよねっ♪

「うわ……………ちよつと先輩……………さすがにそれは気持ち悪くて無理ですごめんない」

まあこれはお約束ですからねー。け、決して照れ隠しとかじゃないんですよ!?

でも取り敢えず断つとかないと、なんか勢いでギユウツつてしちゃいそうで……  
すると先輩はまたかよ……とでも言いたげな顔で溜め息をつく。

「……おい、葉山ならあつちだぞ」

なんですかその目はホントはわたしが先輩に用があつて来たのなんか分かり切つて  
るくせにっ!

……こつちは抱き付いてギユウツとしたい気持ちを抑えに抑えてるっていうのに!  
ホントにムカつく先輩ですよ、まったくう!

「なに言つてんですか。わたし先輩に用があつてわざわざ来てあげたんですよ?」

「いや別に頼んでねえし……つか目立つちやうからやめて欲しいんですけど」

「目立つちやう? まあ先輩なんかにこんなにか可愛い後輩が訪ねてきたら、そりや目立つ  
ちやいますよねー」

でも先輩はちよつとくらい目立つた方がいいんですよ。先輩の魅力や能力に対して  
反比例し過ぎなんだよね、先輩の人気や認知度つて。

まあ目立つちやつてモテたら困るから結果オーライなんだけどもつ。

「まあそんなことより先輩つてガチでぼつちなんですよねー! ヤバいウケるー」

「いやウケねえから」

あれ?なんかこのやりとりはモヤモヤすんなあ。

クリスマスイベントで先輩と折本先輩の楽しげな?やりとりを思い出してしまった  
……

おな中の時なんかあったとか言いながら、なんも教えてくれないんだもんなあ……  
むーっ!

「まったくう、なんか見てて痛々しいから、明日からはわたしがお昼くらいなら一緒に過  
ごしてあげてもいいんですよお?」

ふふふ。どうですかね?この魅惑的なお誘いは!?

「いやいらぬから。あとあざとい。それとあざとい」

ですよー。

まあ分かってたことだけど失礼しちゃうなー。

わたしはぶくうっつと頬を膨らます。

「なんでですかー……せつかくこんな可愛い後輩が誘ってあげてるのに〜」

「てか用ってなんだよ。超目立っっちゃってるから早くお引き取り願いたいんですけど」

普通の男ならランチのお誘いとぶくつと頬っぺの可愛さアピールコンボでイチコロ  
なんだけどなあ……

ま、だからいいんだけどねー。

「あ、そうそう！……もう！先輩がおかしな事ばつか言うからすつかり忘れてましたよー」

え？俺の過失なの？とかなんとか言っちゃってるけど、ここは押せ押せで誤魔化しちゃおう！

だつて目的への第一歩はここからがスタートだからね。

「うーん……ちよつとここではなんなんでも、一緒に生徒会室来て下さい！」

わたしはうーん……と悩んだフリをした後、用意しといた鍵を先輩の眼前にプランと垂らすと、とびっきりの小悪魔笑顔を見せ付けてやった。

そう、すべてはこの瞬間の為。

わざわざ先輩の教室に押し掛けたのも、わざわざ目立つように仕向けたのも、全ては先輩が教室に居づらくなってわたしに着いて来ざるをえなくする為なのです。

どうだ先輩！もう逃げられないからねっ！

「わあつたよ……んじゃ早く行くぞ……」

わたしの素敵スマイルを見て観念したのか、やれやれと頭を掻きながら提案を承諾した。

「はい！それではレッツゴーですよっ、先輩！」

わたしは先輩の腕に絡み付いて生徒会室へと向かいたい衝動に駆られながらも、必死で我慢して先輩の隣にピッタリと陣取った。

……いつかはこうやってただ隣に立っただけじゃなくって、先輩のその手をわたしの手に重ね合わせて指を絡み合わせて、2人でおんなじトコロに向かつて行きたいな

……

今日はそんな恋する乙女の、ほんのささやかな夢への第一歩。

わたし、あなたに振り向いてもらえるまで、ここからはもう一歩だつて止まりませんよ？ せーんぱいっ！

続く



# 一色いろはは企てるっ

2人で生徒会室へと向かう道すがら、わたしと先輩はチラチラと視線を受けていた。そんな視線を感じる度に先輩は気まずそうに顔を歪めている。

知ってますよ？先輩。先輩は自分と一緒に居る事で、生徒会長のわたしに変な噂が立ってしまったわいか心配してるって事……

先輩は文化祭以来、校内では中々の有名人になっちゃったみたいだから、わたしに迷惑が掛かるのを気にしてくれてるんだよね。

でも、だからこそわたしは平気な顔して先輩と一緒に歩いてるんですよ？たぶん先輩は迷惑でしょうけど。

そんなくだらない噂なんかわたしは気にしないよ？って姿勢を貫く為に。

そして生徒会長であるわたしが一緒に歩いてる事によって、少しでも先輩への悪意が減りますようになって。

その願いが叶うんなら、なんだったら校内中を手を繋いで歩きたいくらいにね！

……あ、それは単なるわたしの願望でしたっ。

「どうぞー」

生徒会室の鍵を開けて、先輩を招き入れる。誰も居ない教室は、その瞬間2人っきりの空間へと変貌する……

字面だけ見るとなんだか意味深っ！今日はまだそういうのじゃないからっ！

「お茶淹れますんで、お先にお昼どうぞー」

「おう、サンキュー」

わたしが備え付けのケトルでお茶を淹れている間に、先輩は食べ掛けのパンをテーブルに広げて食べた。

こういう時、淹れるお茶が雪ノ下先輩レベルだったらポイント高いんだろなあ……  
緑茶ってあたりが渋すぎてポイント低いですねー。

「どぞどぞー」

2人分のお茶を用意すると、わたしは数ある席の中からもちろん先輩のすぐ隣の席に腰掛ける。

ふふっ、なんか近くて迷惑そうな顔してますけど、赤くなってるのが誤魔化せてませんよっ？

迷惑そうに恥ずかしがってる可愛い先輩をニマニマと横目で見ながら、わたしもお弁

当の準備をば!

へへ〜!先輩と一緒にランチタイム、結構憧れだったんだあ!

「なに?お前もまだ食ってなかったの?」

「そーなんですよ。職員室に鍵取りに行つてたんでまだなんですよー。面倒くさいから、今度合鍵作つちやおつかない」

先輩は愕然とした表情でわたしを見てるけど、割と切実に合鍵作りたい。いや犯罪ですけどね?

だつてこの先、もし毎日先輩とお昼を一緒に過ごす関係になれたとしたら、誰も居ない生徒会室は2人のイチヤイチャパラダイスになるわけじゃないですかー?

そんな幸せ時間を、わざわざ職員室に行く時間なんかに潰されたくないじゃないですかー?

ふへへへ……先輩に毎日あーんしたり膝枕したり〜!

そ、それどころか……っ!

「で?何の用だよ……」

おつと!先輩とのイチヤイチャ妄想に水を差されてしまった上に、夢も希望も色気もない相談催促の一言……まったく!ちよつとはこの状況楽しんでくださいよ先輩っ!

「まあまあ、とりあえずはお昼にしましょうよー！あ、なんか食べたいのありますー？」

でもつれない先輩はほっといて、わたしは楽しんじゃうよー？

だってせっかくの初めての2人きりのごはんなんでもんっ。

でも先輩はわたしの提案をあっさり断りやがった！

「むー……せっかく可愛い後輩の手作り弁当が食べられるチャンスだっていうのにー……」

ホントに先輩のばーかっ！

頬つぺた膨らんじやってるけど、これは素なんだからねっ!?

「なに？これお前が作ったの？……一色って料理出来るんだな」

「なんですか失礼な。わたしお菓子作りとかも超得意で、なにげに女子力超高いんです

よー？はいあーんっ♪」

わたしは自信作の甘めな玉子焼きをあーんしてみた。

どうせ恥ずかしかがって食べてくんないだろうけどね。

「いらんっつうの……なに？俺を恥ずかしがらせて悶え苦しませたいの？」

「……先輩、なに言ってるんですか……マジでキモいです……」

てかホント可愛いすぎです先輩……その真っ赤な顔も泳ぎまくってる目も……

なんなんですか先輩こそわたしを萌え死にさせる気ですかわたしが先輩を残して死

ねるわけ無いじゃないですかわたしは先輩とずっと一緒に居たいんですごめんなさい。

× × ×

せつかくの間接キスつ……!のチャンスは阻まれたものの、先輩の可愛さに悶えているといつの間にか食事が終わっていた……

あざと八幡恐るべし!

「んで?結局なんなんだよ……わざわざウチのクラスまで来たって事は、なんかそれなりに急ぎの用なんじゃねえの?」

食べ終わったかと思つた途端に早速の質問ですか。

ま、今日の目的はソコだし、とつとと言質とつちやうぞー!

でもその前に……

「別に急ぎつてわけじゃないんですけど……てか先輩わたしの依頼の件でちゃんと覚えてますかあ!?!」

……やっぱり……なんでそんなに不思議そうな顔してんですかねーこの人は。

「もーっ!やっぱりですよこの人!……デートの件ですデートの件!ストレスの溜まつた葉山先輩が気軽に遊べるリラックステートプランを考えて下さいってお願いした

じゃないですかー!」

「あ、あー、そういうやそんな話あったな」

「ちゃんと真剣に考えてくださいよー!わたしずっと楽しみに待ってたんですよ!」

まあホントはそこそこは折り込み済みなんだけどっ!

雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩が居る前でこの話題だされちゃっても困るしねー。

「だから聞く相手間違ってるつての……デートなんかした事ないのに、そんなプラン考え付く訳ねえじゃねーか……」

いーえ、聞く相手なんて……先輩しか居ないですから。てか先輩以外から聞いたつてなんの意味もない。

だからこそわたしは声を大にして言つてやった。

「だ・か・ら!だからこそ先輩に聞いてるんじゃないですかー!先輩ならどんな風にすれば気軽に楽しめますか……?どんな風にすればリラックス出来ますか……?ありきたりなデートプランじゃなくて、先輩だったらどうなのか、それが聞きたいんです!」

わたしが知りたいのはそれだけ!それを聞きたい為だけの作戦なの!

すると先輩は面倒くさそうに、でも真剣に考えてくれる。

ふふっ、まったく……そういうトコ、本当にあざといですっ!

「あー、学校帰りに……適当にゲーセンでも寄つて……腹が減つたらラーメン屋の開拓

……とか？」

「学校帰りにゲームセンター寄ってお腹空いたらラーメン屋さんですか……まあ確かに制服デートって所はポイント高いかも知れませんが……」

ホントにムードとかは一切無いですよ。

初めてのデートで女の子をラーメン屋さんに連れてくとか……でも……

「確かにデートとは呼べないくらいにムードもへつたくれもないプランですね。さすがは先輩と言うべきか……」

でも……放課後デートってところは……うまく利用出来るかも！

「いやだからさ……」

「まあ先輩ですしね……分かりました！それじゃあ仕方ないので、早速今日にでもそれを試してみましよう！」

「そ、そうか……まあ頑張れよ」

「は？なに言ってるんですか。そんなの先輩と一緒にに行くに決まってるじゃないですか」

そうなのだ！放課後デートって事は、ヤツに逃げ道なし！

「……………はっ！」

やっぱりその顔ですか先輩。でも今日は逃がしませんよー？

「だって、そんなムードの無いデートコースなんて、わたしに分かるわけ無いじゃないですかー。だったら練習しなきゃダメですよねー？」

「なんでだよ……俺関係なくない？」

うふふ、だから逃がさないって言ってるじゃないですかあ？

だからわたしは先輩取り扱い説明書の1ページ目に書いてあるあの言葉を放つ。

「……だってー、先輩依頼受けるって約束しましたよねえ？はつきりと口にしましたよねえ？それともその約束は本物じゃないんですかあ？」

たぶんわたしはすごい悪い笑顔で先輩を見てるんだろいな。

でもね、わたしがこんな顔を見せるのは先輩だけなんだよ？

あなたは、こんなわたしもあざといわたしも、全部受け止めてくれるから……どつちの一色いろはも、分け隔てなく接してくれるから……

「て、てめえ……！」

「とーいうわけで今日の放課後よろしくですー♪」

そしてわたしは思いっきりあざとく思いっきり小悪魔的に、先輩に必殺の敬礼ポーズを贈るのだった。

先輩には全然効かないんだけどねー！



× × ×

「どうしたの？ いろはちゃん。そんなに嬉しそうな顔しちゃって」

「へ？ そ、そんなことないよ愛ちゃんっ」

うつわ〜……あぶないあぶない！ わたしそんなに緩んでたのか〜！

せっかく真面目に午後の部活出てんのに！

「ふふっ、ホントに〜？ ……それにしても今日はいろはちゃんが朝練も午後練も出てきてくれたからホント助かっちゃったあ〜！ 生徒会の方は大丈夫なの？」

「うん。今日は休みにしたんだー」

ホントはここんどこ、ほぼ開店休業状態なんですけどもね……

いつもだったたら奉仕部に行くんだけど、この後デートが待つてると思うとちよつと行き辛いんだよね。

だつてわたしと先輩で2人して意識しあつてたら、絶対あの人たちにバレちゃうし！  
バレてついて来られたら最悪だもん！

「でも結局は今日も早めに上がっちゃうからゴメンね！」

デートだから部活早退するとか、あまりにもヒドイ。

「いいよいいよ。なにか大切な用事があるから葉山先輩に早退のお願いしてたんでしょ

？あとは任せといてっ」

そう言うのと愛ちやんはエヘンと胸をポンと叩く。

愛川愛《あいかわまな》ちゃん。この子はホントにいい子なんだよね。

わたしを含めた1年女子マネ3人が葉山先輩目的で入部したのに対して、この子だけは真剣にマネージャーをしたくて入部してきたみたい。

どうやら大学生のお兄さんが子供の頃からサッカーをやってるみたいで、サッカーをしている男の子を応援してお手伝いするのが好きみたいなんだよね。

しかも見た目もすごい可愛いくて、サッカー部男子の間では愛派といろは派に分かれてるらしい。

え？あと2人の女子マネ？

うん。興味ないです。

よし！そろそろ時間かな？サッカー部はまだまだ終わらないけど、奉仕部ならそろそろ終わりにする時間のはず。

うっわ！超ドキドキニヤニヤしてきちゃった！

練習名目とはいえ、初めての先輩とのデートだっ……

「それじゃあゴメン、今日はお先に上がるねっ」

「は〜い！お疲れさま〜」

じやあ葉山先輩にも挨拶してから帰りますかね？とその場をあとにしようとした時、愛ちゃんが遠慮がちに話し掛けてきた。

「……………あつ、いろはちゃん……………あの……………」

「どしたの？」

「ちよつとだけ前から聞いてみたいなく……………つて事があつただけ……………」

どうしたんだろ……………？愛ちゃんがこんなにもジモジと話し辛そうだなんて、初めて見るかも……………」

「あの……………いろはちゃんつて……………その……………は、はやません……………ぱい……………の、こと……………」

……………へ？は、葉山先輩!?

「……………う、ううん!？な、なんでもないつ……………あ、そうだ！タオル洗濯しなきゃつ……………バイバイいろはちゃんつ」

……………へー、意つ外!

愛ちゃんはそういうミーハー的な興味つて無いかと思つてた……………

でも、間近でサツカー頑張るあんなイケメン見てたら、そりや惚れちゃうものかもねー。

もしかしたら今後は愛ちゃんとの恋愛相談なんかにも乗る事になんのかな？

応援してあげたいけど葉山先輩の難易度は先輩クラスだもんなあ。

うーん……なんか面倒なことにならなきやいいけど……

でもそれはそれこれはこれ！

今は人の心配よりも自分の心配しなきゃだよねっ。

わたしは葉山先輩に断りを入れてから帰宅の準備をし、ウキウキわくわくドキドキで校門へと辿り着いた。

あーっ……やっばいやっばい！超嬉しい！

鏡を覗きこんだわたしは、前髪を弄ったり緩みきつてる目もとと口もとを手でグニグニしてなんとか整えようと超必死！！

朱く染まった頬つぺたは、もうすぐ暗くなるから誤魔化せるよね。

えへへ……早く来い来い比企谷八幡！

せーんぱい！あなたの可愛い可愛い後輩が首を長くしてお待ちかねですよっ♪

続く

## 一色いろはは攻めまくるっ

『は？待ち合わせ校門前なの？いや……友達に見られちゃったら恥ずかしいし』

わたしは先輩を待ちながら、約束を取り付けた直後の会話を思い出していた。

「まったくあんにやろう！友達なんか居ないクセに、なーにが恥ずかしいだ！」

こんなに可愛い後輩と校門で待ち合わせなんて、すごいステータスじゃないですかっ！

しかもせっかくの放課後デートなのに現地集合希望とか意味分かんない。一緒に下校しながらデートに行くのが放課後デートの醍醐味でしょ!?

もちろんバツサリ切り捨ててやったけどね。

お仕置きとして、駅まで堂々と手を繋いで歩いてやろうかなっ。

あ、また単なるわたしの願望が出てしまいましたね。

でもそんなイライラともムカムカとも分からないような気持ちなんて、こっちに真っ直ぐ向かってくる先輩が視界に入った瞬間、どっかに消し飛んじやった。

あ、目が合った！だからおーいっ！って手を振ってみた。

ふふっ、真つ赤になって顔を逸らしましたよあの人！

可愛い過ぎてわたしまで顔が熱くなっちゃうからやめてくださいっ！

「せんぱーい、遅いですよー」

顔を逸らしながら歩いてきた先輩に可愛らしくてけてけ駆け寄って袖をちよこんと摘む。

余計に真つ赤になった先輩を極力気にしないようにして、「ほらほらとつと行きますよー」と引つ張つて駅へと向かう。だつて気にしちやったら、わたしヤバイ顔になっちゃうもん……

あーあ、袖を引つ張るだけじゃなくて、このまま手を繋げたらいいのになあ。

× × ×

千葉に到着したわたし達は、適当なゲームセンターへと入っていった。

わたし、あんまりこういうトコ入ったこと無いからちよつとドキドキ！

でも先輩？ちよつぱり不安な気持ちも隣に先輩が居てくれるからへーキなんですよ

?

特になにをするワケでもなく、ゲームセンター内をぐるぐる徘徊していると、お約束的なあのコーナーに差し掛かる。

昼間に先輩が提案した時点で、ゲームセンター内でのわたしの目標はズバリここだけになっていたのですよ！

大好きな先輩とプリクラですっ♪

もちろん先輩は嫌そうな顔で拒否ってきたけどそんなの無視無視！

「記念ですよ記念ー約束しましたよねー、今日は練習に付き合ってください……それともあの約束はやっぱり本も……」

「よしーいくらでも撮っちゃうぜー！」

ふっふっふっ……もうせんばい検定免許皆伝でもよくないですかね？

プリクラ機に入ると先輩はやり方が分からないからって、わたしに全部任せてきた。

「了解ですっ」

手の角度と腰の曲げ方による上目遣いがポイントの、あまりにも可愛い敬礼をしてあ



げたのに、もちろん無視しやりましたよコイツ。

なんなんですかねこの攻略難易度！

でもわたしはそんな事よりも次の作戦を実行するべきか否か、乙女の悩みを抱えていた……

これマジでやつちやつて大丈夫かな……？

プリクラの設定をしながらも頭はその事でいっぱい。なんか超ドキドキして来ちゃった……

でも今日は練習っていう名のマジカルワードがあるんだもん！

それに……そんなプリクラ持ったら嬉しすぎて超幸せなハズ！うん欲しい！

よしっ……ここは頑張れいろはっ！

「……ほ、ほら先輩！……ここに立ってください！……ぜ、絶対動いちゃダメですからねっ！」  
「お、おう」

なんにも知らない先輩をうまい事誘導して動かないように命令をする。

はあく……ど、どうしよう……心臓が爆発しちやいそう……！

わたしは覚悟を決める。ふうく……と深く深呼吸するとつ……先輩に向かって猛ダクツシュっつ！

「えいっ！」

「なっ！ちよっ！おま……」

「う、動いちやダメだつて言つたじゃないですか！……このままですよー！」

そしてそのまま、わたしは撮影が終わるまでの間プリクラ機の中で先輩にギユウツつと抱き付いていた……

やつてしまった！夢にまで見た先輩とのハグをこんなカタチで……

先輩に控えめな胸を精一杯押し付けて、出来る限りギユウツつと！ギユウツつと！

もう嬉しくつて恥ずかしくつてクラクラしちやつて、撮影が終わつた途端にラクガキしなきゃっ！つて逃げ出しました。

だつて……こんな顔、先輩に見せられないでしょ……っ！

× × ×

先輩、恥ずかしくて言葉も出ないんだろうな。ホントにお子さまなんだからっ。

かく言うわたしも声を出せませんっ……だつてたぶん今声出したら、格好悪いくらいに超震えてそうなんだもんっ！！

一方的に抱き付いただけで、この一色いろは様がこんなになつちやうなんて！

………こ、これで先輩からもギユウツつてされたら、一体わたしどうなつちやうんだ

ろ……？

うううっ……今は想像しただけでヤバいから、さっきの先輩の匂いと感触を頭から追  
いださなくっちゃ！

……先輩、細いのに結構ガツシリしてたなあ……

……先輩、なんかよく分かんないけど、すっごく落ち着く匂いしてたなあ……フェロ  
モンって言うのかな？

はっ！……落ち着けええ！落ち着くのよいろは！

頭から追い出せつつってんでしょ!?このまま無言のままなんかじゃ終われないんだ  
から！

無言のままゲームセンターを出て冷たい空気の中歩いてたらようやく落ち着いてき  
た。

先輩もちよつとは落ち着いたかな？話し掛けてみようかな？

「いやー、いいプリラ撮れましたねー♪」

よしっ。普通に喋れたぞ？声も震えてないよね！

「いや、いいもなにも俺見せてもらってねえんだけど……てかお前いきなりなんてこと

すんだよ……」

ぐふっ……せつかかく上手く喋れたのに、すぐその話題を持ち出すの禁止！

「やだなー！先輩ウブですか？小学生じゃないんですからー。練習ですよ練習！気持ち悪いんで勘違いとかホント勘弁してくださいねごめんなさい」

「俺今日は何回振られるんですかね……てかだからなんで見せてくれねえんだよ……」

「だ、だつてわたしちよつと変な顔しちやつてたから見せられないとか……そ！それに先輩も超気持ち悪い顔しちやつてるから見ない方がいいですつて！シヨックで死にたくなつちやいますよ！……はっ！まさか可愛い後輩とのハグツーシヨットのプリクラ見て変なこと考えて喜びに浸るつもりですかそしてそのまま彼氏ツラでもしちやうつもりですかいきなりそこまでは心の準備が間に合つてませんごめんなさい」

はあはあ……我ながら長いっ……！

で、でも必死にもなるつての！あ、あんなの先輩に見せられるワケ無いじゃないですかあつ！

「すげえな……連続で振られちまつたぜ……もうプリクラはいいです……」

今だけは何度だつて何回だつて振りますよ！

いや、ホントに告白してくれたら瞬殺でオッケーですけどね？

でもアレだけは先輩には絶対に見せられないのです！想いが届くその日まで……

「初めからそう言えばいいんですけどよー!」

わたしは照れ隠しとパニック隠しの為に、ぷくつと怒ったフリをしてこの話を打ち切った。

でも先輩がいけないんだからねー!

× × ×

ようやく落ち着いて笑い合えるようになったわたし達は、先輩のオススメのラーメン屋さんに寄ったり商業施設でウインドーショッピングを楽しんだ。

ラーメン屋さんで食べたラーメンは予想外に美味しくて、ハフハフと勢い良く食べちゃつてる所を先輩に見られちゃったりした。

ラーメンを美味しく食べてるわたしを見てる顔がすっごく嬉しそうで、なんだかわたしも嬉しくなっちゃって思わず通報しかけちゃいました。

だ、だつてニヤけちゃう顔を見られたら恥ずかしいんだもん!

食べ終わったら当然のように帰宅を提案してきた先輩を引きずってウインドーショッピングに行つたんだよねー。

でも……お買い物してる間中、わたしは気が気じゃなかったのだ。だって……今日の先輩は約束と練習って2つのマジカルワードで、なにをしたって許してくれるから。

ハグプリクラを撮っても照れただけで許してくれた先輩を見ていたら、もつと欲が出てきてしまった……だって、こんなチャンス、次はいつ巡ってくるか分からないから。

先輩に……あげたい……先輩に……貰って欲しい……わたしの……

そんな事ばつか考えてたら、いつの間にかもうお別れの時間とお別れの場所。

わたしのバカ!……せつかくの貴重な時間なのに勿体なさすぎるでしょ……

うう〜!色んな想いが頭の中をぐるぐるしてるよお!

とにかく、わたしらしく元気に今日のお礼しなくちやね!

「先輩っ!今日はありがとうございしました!」

「おうお疲れさん。こんなんでも少しは参考になったか?」

「まあ正直あんま参考にはなんなかつたですかねー。さすがに葉山先輩とアレは無いですっ!」

「だから言ったじゃねえかよ……まあなんだ」

!!

……まあなんだ……わたしはこのあとに続くセリフがなんとなく分かってしまった。やめて、その先は言わないで……

「役に立てなくて悪かつ……」

「でも！」

言わせない！役に立たないとか悪かつたなんてこと、全つ然ないんだから！

ごめんね先輩。照れ隠しとはいえちよつとからかいすぎました……

ホントはメチャクチャ参考になりましたよ？

「……………まあまあ結構楽しめましたよ？ふふつ、こんなムードの無いのは先輩限定つてことであつ」

どんなにムードがあつたつて先輩限定なだけだね。

「そうか……………まあ俺も思つたよりは楽しめたわ……………」

ああ……………やめてよ先輩……………先輩のその恥ずかしがる顔は、ホントにホントにあざといんですよ……………？

わたし……………もう我慢出来なくなっちゃいますよ……………？

わたしは奥底から溢れだしてくる想いを押しさえ付けるように、スカートをぎゅつと握る。

「ホントですかっ!?!それは良かったです!……………ふふつ、先輩が素直に楽しいと認めるな

んて珍しいですね」

溢れ出してしまいそうな想いを誤魔化すために、わたしはまた先輩に軽口を叩く。  
さすがにこれ以上はもうマズいです先輩……

「ばっつか、思ったよりは……だかなな」

むーっ……だからその顔がマズいんですってば！

「はいはい！そーゆーことにしといてあげますよー♪……それではまた来週です！」  
「おう」

わたしは自分で自分を褒めてあげたいっ！

我慢しきれなそうな想いをなんとか押さえ込み、先輩に別れの挨拶をして背を向けられたんだから。

でも………たぶんこんなチャンスは二度と無い……

今日なら、今ならあのワードでわたしも先輩も逃げられるから……！



わたしは足を止めた。

色んな想い、色んな感情でグチャグチャなわたしに自分自身どうするべきか問いただす。

深く目を瞑り、深く深く深呼吸をひとつ。

息を吐き切った時には、わたしはもう振り返っていた。

「あーそうだせんばーいー！」

「ど、どうした？」

ちよつと固まってたわたしに動揺したのかな？

先輩は少しだけ警戒気味。

「ちよつとちよつと！」

手を胸の辺りまで挙げて、チヨイチヨイと先輩を手招きする。

「あ？なんだよ」

先輩がこつちに來てくれた。

ふふつ、なんかあるな？と警戒しながらも、ちゃんとわたしの言うこと聞いてくれるんですよね、先輩は。

すぐそばまで來てくれた先輩に、さらにチヨイチヨイと手招きして、そつと耳打ちす

るような態勢を取る。

もちろん先輩は意味分からん、と耳を近付けようとしなないけど、わたしは構わずに呼び続ける。

「いいからいいから!」

ようやく観念した先輩は、やれやれ……と腰を屈めてわたしの背丈に耳の位置を合わせしてくれた。

でも……ごめんね?先輩……わたしが用があるのは耳じゃないのっ……

わたしは先輩の耳に顔を近付けるフリをしながら、そつと前に回り込む。

そしてたっぷりと溢れ出しそうな想いを唇に乗せて……わたしは先輩の唇にその想いを優しく押しあてた……

× × ×

夢にまで見たこの光景……ま、実際には目を瞑っちゃってるから光景は見えないんだけどね。

でも先輩はたぶん目を開けたまま固まっちゃってるから、この光景をしつかりと見て

るんだろうな。

わたしの真っ赤に染まりきった顔を0距離で。

てか先輩がホントに固まっちゃったから、たつぷり10秒はそのままだったのかな？  
なんだこれ？なんでわたしたつてば、こんな状態なのにこんなに冷静な思考回路なんだ？

もつとこう……頭が真っ白になってワケ分かんなくなると思ってたのに、なんか意外にも超冷静！

だって……わたしの唇を押しあてている先輩の唇の形とか柔らかさとかまで、ふむふむ……こんな感じなのかー、とかってじっくりと考えちゃってるし。

なんか幸せすぎてずくつとこのままでもいいかなあ？なんて考えが頭を過つたんだけど、先輩が固まっちゃったせいで結構長い時間しちやつてたから、さすがに周りの目が気になりだしてしまつた！

いやいやいや！ちよつと冷静に考えて!?!いろは！

これ唇離したら、先輩と顔合わせなくちゃなんないんだよね!?

いや無理無理無理。離せないでしょ。顔なんて見れるワケ無いじゃん。

う……でもずつとこのままって、なんかだかシユール……

それに先輩が我に返って先に離されたらそれこそ気まずい……!

うん、よし。離そう。

わたしは意を決して、名残惜しそうなわたしの唇をそつと離し、ててつと2歩3歩バックステップして先輩から距離をとつた。

恥ずかしくて先輩の顔なんて見れないけど!今すぐダツシユで逃げ出したいけど!

それをしちゃうと今後の先輩との生活に支障が出ちゃうから(手遅れ?)、わたしは頑張つて先輩に精一杯の小悪魔微笑を向けた。

「な………!な………!お、お前!なんてことしやる………!?!」

うわっ……先輩が今まで見たことない顔してる………!

「へへ〜……今日わがままを聞いてデートの練習に付き合ってくれたお礼ですっ」

うきやあー!なにこんな小悪魔的な台詞を余裕ある感じで喋ってるクセに、こんなに声プルプルしてんの!?!超カッコ悪っ!

「お、おま………!いくらなんでもお礼でっ………キ………キスって………」

せせせ先輩も落ち着いてくださいっ!

わたしもいっぱいいっぱいなんですよお！

「だーかーらー！練習ですよ練習！……付き合ってくれたお礼のキスをする練習ですっ！今日は練習に付き合ってくれるっていう約束でしたよねっ？」

とっ、とにかく落ち着けいろは！

いつものわたしらしいペースに持っていくんだっ！

「だったら余計ダメだろ！練習でキスとか意味分からん……」

よし！これならなんとかわたしのペースに持っていくけそうだっ。

「だあってえ、しようがないじゃないですかー。わたしキスとかしたこと無いから、どんなタイミングでお礼のキスしたらいいか分からなかったんですからー」

あ……全然ダメだったねわたし。

思いつきりファーストキスってカミングアウトしちゃったよ……

「……は？お前バカなの？は、初めてなの？……アホか！初めてが練習とかなに考えてんの!？」

むーっ！先輩はわたしが初めてじゃないと思ってたんですねっ？

わたしこう見えて身持ち超固いんですよっ!?!ピッチとかじゃないんですからねっ！

でも、うん……だったらまあ初めてカミングアウトも正解だったかな……？

「もー、先輩ってばお子さまですかー？初めても二回目も別になんにも変わらなくなる

ですかあ？」

なんてまたまた余裕っぽい発言かましちやってるわたしの今の姿は……はつきり言つて余裕ゼロです……

声も手も足も超震えてるし、なんかここにきて感極まっちゃったのか涙とか溢れだしちやいそうだし……もう顔から足の指先まで、超々火照りまくってるし！

ヤバイ……先輩わたしの震えてる身体とか涙が零れちやいそうな目もとか超見て心配そうな顔してるっ……

とっ、とにかく泣いちゃう前にダツシユで退散せねば！

「さ、さして！それじゃわたしもう帰りますねー！今日は一日ありがとうございましたー」  
ササツと先輩に背を向けると、それはもう猛ダツシユでモノレール乗り場へと逃げ出した。

「おいこらーちよつと待て！逃げんじやねえつての！」

……たぶんこのまま逃げちゃったら、明日から顔を合わせられなくなっちゃうよね。  
だから先輩との距離が安全圏である事を確認したわたしはクルリと先輩へと振り返る。

そして、わたしお得意のあざとさと小悪魔さを全力で振りまいて、先輩へと思いつきり可愛く敬礼するのだった！

「ではでは先輩さよならです！……わたしの初めて奪ったからって、勘違いしないでくださいねー」

てへっ、奪っちゃったのはわたしでしたっ☆

× × ×

約束と練習のマジカルワード。

だからって何をしてても許されるだなんて思ってないよ。

でも……人からの好意を疑って、好意から逃げちゃうあの人の心の逃げ道にはなれるから。

気持ちを信じられずに疑っても、一色は別に俺の事が好きなのじゃない。練習の約束だから仕方ない……って、あの人は自分の心を誤魔化せるもんね。

今は、これでいいんだ。

わたしはこうやってちよつとずつちよつとずつ、あの人の心の中に入り込んで浸透してやるんだ。わたしの想いを、わたしの心の色をあなたに気取られないように……

そう。例えるならわたしの恋心は、いざ口にするまで何味か分からない無色透明ないろはす色。

先輩？あなたがわたしの心を口にするまでは、わたしの色はあなたには見せてあげませんよ？

そして気付いた頃にはあなたの心の奥深くまで水のように浸透して、一色いろは抜きでは生きていられなくしてやるんだからっ♪

続く



一色いろはは後悔なんてしたくないっ

「ああ……やってしまったぁ……」

うちに帰って来ると、ごはんはく？と呼び止めるお母さんにお断りを入れながらドタバタと階段をのぼり、部屋のドアを開けるなりベッドにダイブっ!!

わたしは今、ベッドの上でジタバタとバタ足の練習をしている……

ひとしきり暴れて泳ぎ疲れるとバグからプリクラを取り出して、ごろんと仰向けになつた。

真つ赤になつて固まつてる先輩と、そんな先輩にギュツと抱き付いて信じらんないくらいに真つ赤なきこちない笑顔のわたしが写っているそのプリクラには……

『せんばいだい好きっ！Chu!!』

『ラブラブ〜《ハート》』

『いつか責任取ってね♪はちまんっ』

とかつてバカ丸出しのラクガキが所狭しと躍っている。

「こんなの……見せられるワケ無いじゃないですかあ……」

にへらへらっつとプリクラを眺める視線は、自然と先輩の唇へと流れる。

「~~~~~っつっつ！」

さつき仰向けになったばかりなのに、またごろんとうつ伏せになって枕に顔を埋めざるをえない程、わたしは軽く興奮している。

そうなのだっ！わたし、ついさつき先輩にキスしちゃったのだ！

もうハグプリクラどころではないんですよっ！

「どうしよう……月曜日からどんな顔して先輩に会えばいいんだろ……？」

わたしはぼしよりと眩くと、もう一度プリクラに写る愛しい人を見つめ、そつと人差し指を唇にあててみた……

「~~~~~っつっつ！」

わたしの唇に優しく触れていた先輩の唇の感触と形を思い出してしまい、またもジタバタと悶えるのだった……

「わたし、今夜は眠れそうにないですよ、せんぱい……せんぱいは今頃どうしてますか

「……?」

そしてプリクラを眺めたり唇を触ったり悶えたりのエンドレスな長い夜は終わることなく続き、更に夜はふけて行つた。

× × ×

週が開けた月曜日の朝。

わたしは洗面台の鏡に映つた自分の顔を見て、ふうと一息ついた。

「良かった、休み挟めて」

あの日、嬉しい感動からなのか押し潰されそうな不安からなのか、感極まって帰りのモノレールの中で泣きに泣きまくってしまい、帰ってきてからはのたうち回って一睡も出来なかつたわたしの目は、翌朝には真っ赤に腫れあがってしまったのだ。

やばい！治さなきゃ！とその日は大人しくしてたけど、やつぱり一日中悶々としてしまい、あの行為を思い出しては感激して涙が出ちやつたり興奮して二ヘツとなつたりと忙しくて、翌日の日曜もまだちよつとだけ目が赤かつたんだよね……

だから昨日はプリクラを眺めるのを我慢してたんですよ？せんばい。

10回くらいは見ちゃったケド……

とりあえず一難は去ったけど、本当にヤバいのはこつからなんだよね……

だってわたし、今日から先輩に顔合わせられるの!?

× × ×

うう……結局その日は先輩に顔を合わせられませんでした……

もちろん奉仕部までは行ったんだけど、わたしにはそこまでが限界だったのです……

もう心臓が破裂しそうなくらいバクバクいっちゃって顔も超熱くなっちゃって、とてもじゃないけどあの部室の扉に手を掛けることは出来ませんでしたよ……先輩だけならともかくあの二人が怖い……

普段のわたしなら可愛い後輩を演じて上手くやりすごせるんだろうけど、今の精神状態で氷の追及を振り切れるワケ無いじゃないですかあ？

てか先輩はどうなんだろう!? 普段よりも態度がキョドってキモくなっちゃって、「比企谷くん? なにか隠しているのかしら……?」なんて冷水を浴びせられるような雪ノ下先輩からの恐ろしい追及に、なんか吐かされちゃったりしてないよねっ!?

アイツってホント思いつき顔に出るからなあ……本人はポーカーフェイスが出来てるつもりになってるのが笑えるけど。

まあそれはもう先輩を信じるしか無いにしても、とにかくこのままは本当にマズい！  
これが原因で疎遠になるとか、ひとつも笑えない！

いくら無理矢理で強引だったとはいえ、せつかくの先輩とのファーストキスで後悔な  
んかしてたまるもんですか！

だからわたしは決意を胸に秘めて帰り道を一人ゆく。

明日こそ絶対会ってやるって！

！  
奉仕部に行くのが気まずいんならあの場所に行こう。リサーチしといたあの場所に

あそこなら、絶対に二人つきりでお話出来るから。

翌朝、普段よりも早く起きたわたしは二人分のお弁当を用意していた。

とにかく何事があるうとも、停滞した会話を潤滑に進める為には、まずは美味しい食  
事が必要なのですよ！

会議なんかにしても険悪なまま会議室で進めるよりも、美味しいお店で和気あいあい  
と進行する方が会議が潤滑に進むじゃないですかー？

先日と違って、今日はバッチリお昼も晴れると教えてくれた天気予報のお姉さんに

グツツと親指を向けると、わたしはよしっ！つと戦いの場へと旅立つのだった。

× × ×

四時限目終了のチャイムが鳴り響くと、わたしは二人分のお弁当が詰まったバッグを抱えて颯爽と立ち上がる。

「ありゃ？いろはお昼はー？」

「ごめん！今日もちよつと用事がっ」

「いろはちゃんまたあ!?!」「行ってらっしゃーい」「今日は午後の授業遅れんなよー」

友達に軽く謝罪して、わたしはあの場所へと向かう。

自販で甘ったるいコーヒーを買うのも忘れずにね！

先輩曰くベストプレイス。

教室に居場所の無い先輩が、お昼を一人で過ごす為に見付けたベストなプレイスらしい。

晴れて暖かい日ならこういうランチも気持ち良いかも知れないけど、今は二月だよ？そんな二月の寒空の下だつてのに、やっぱりあの人はそこに居た。

あのとき以来の先輩の姿に、こんなに寒空の下だつてのに身体中が熱くなつて変な汗が出てきちゃつた……

あれだけ覚悟を決めてたのに……こんなに色々用意してきたのに……ここに来て足が竦むなんて。

もしも避けられたらどうしよう……

もしも拒絶されたらどうしよう……

この三日間その事を考えないワケが無かつた。

いや、考えないように敢えて現実逃避してたまである。

たぶん普通の男ならあれで完全に落ちて、その後は彼氏気取りで自分から超近付いてくるんだろうね。

でも先輩は違う。だからこそ好きなんだけど、でもまたそこが大変なトコでもあるんだよね。

どうしよう……ファーストキス捧げた次の再会で拒否られたら立ち直れないかも……

また明日にしよつか？いろは！

そんなに焦つて無理に会わないでも、そのうち何でもないような顔して仕事押し付けにいけばいいんだもんねっ！

………つてそんなわけ無いじゃないですかーっ!!

そんな弱気でどうすんの!?! あんたこのまま逃げ出したら、たぶんホントに疎遠になるよ? それでいいの? ……良いわけあるかあ!

わたしは震える足を震える手で思いつきりつねる。珠のお肌がキズモノになっちゃったって気にしない! キズモノになってもどうせ責任取ってもらうんだもん!

そしてわたしは死角からそーつとそーつとヤツに近付き、逃げられないように背後を取った。

燃えるように熱い顔と身体、震える声と手足、火照ってポーつとする思考回路を力づくでねじ伏せて、愛しのこの人にあの日あのととき以来の声を掛けるのだった。もちろん第一声なんかとつくに決まっていますよ?

「せーんぱいっ!」



× × ×

震える声を目一杯の猫なでな甘さでコーティングしてなんとか声を掛けてみたんだけど、先輩は超ビクツツとして食べ掛けのパンを落としてしまった。

ギギツと音がしそうなくらいぎこちなくゆっくりと首を回して振り返り、わたしの姿を確認した先輩は……

「おおお、おう、いいいっしゆきかつ……」

わたしがド緊張していた事など鼻で笑うくらいのもので、い噛み噛みな緊張っぷりに、思わず吹き出し掛けた！

ぷっ！先輩があまりにもキモくキョドってくれたおかげで、逆にわたしの緊張がほぐれましたよ？

てか昨日奉仕部に行かなくて良かったよコレ……

「うっわー……先輩キモっ」

そう言いながら、わたしはニコニコと先輩の隣に腰掛ける。

噛み噛みで恥かいた上に急にピツタリと隣に座ってきたもんだから、先輩はさらにビクウツと体が跳ね上がり、視線は思いつきり明後日の方向に。

「……お前な……急に後ろから声掛けられたら誰だつてビックリすんだろが……いきなりキモいって酷くない？」

「だーつてえ、それにしたつて先輩のビックツとと噛みつぷりは凄すぎて超キモいですよー」

「まったく、ただ後ろから声掛けられたからビックリしただけじゃないくせにー。」

「その超真つ赤な耳が雄弁に語ってますよ？せーんぱい！」

「うっせ、ほつとけ」

「でも良かった……」

「先輩超照れてるけど、拒否られたりはしてないやつ。」

「わたしもなんとか普通に話せそう！」

「先輩よくこんな寒いのに、こんな所でごはん食べられますよねー」

「まあな。ここでの昼飯も二年目にもなれば、この程度の寒さはそよ風みたいなもんだ」

「ふふつ、全つ然こつちは見てくれないのに、口調はいつも通りですね。」

「まだまだ声震えてて緊張が隠しきれないですけどね。」

「んな事よりもお前がビックリさせつから、焼そば。パンさんが犠牲になつちまつたじゃねえかよ」

「むう、それは焼そばパンさんには可哀相な事をしましたね。あとで先輩が責任をもつて砂ごと食べてあげてください」

「なにそれ虐め？……つたく……購買行ってくるわ。じゃあな」

そういつて先輩は立ち上がるうとする。

それは購買に行きたいからなのかな……

わたしと居るのが気まずいからなのかな……

わたしは知らず知らずのうちに先輩の袖をギュッと握っていた。

「……行っちゃうんですか……？」

「あ、や……」

先輩はわたしの顔を困惑の眼差しで見ている。

……たぶんわたしの表情は泣きそうになっているんだろう。

「……………たく、しゃあねえな……たまには昼飯抜きでもいいか」

そのまま黙って腰を下ろしてくれた先輩は、照れくさそうに頭をガシガシ掻いている。

先輩はわたしが不安な気持ちでここに来たのが分かっているんだろうな。

わたしの気持ち、さすがにもう気付いているんだろうな。

だって、普段なら居るはずの無いわたしがなんでここに居るのかを一切訊ねてこない

から。

行かないでいてくれるトコとかそういうトコとか、ホントあざといよ、先輩……

でもわたしはまだまだ先輩にわたしの色を見せてあげないんだから。

わたしが何色なのかをあなたに見せるのは、もうちよつとだけあと。

「大丈夫ですよー！ほらっ！今日は先輩分のお弁当も、つ・い・でに作ってきてあげましたよー」

だからまだわたしが先輩に見せてあげる色は、いざ口にするまで何味なのか分からな  
い無色透明ないろはす色♪

わたしらしく、さつきまで泣きそうになつてた顔に思いつきり小悪魔笑顔を張り付け  
てあげますよっ？

「へ？マジで？」

「マジですよー。じゃーん！ほらほらあ、この玉子焼きなんて超絶品ですよー！」

「そ、そうか、サンキューな……じゃあ有り難くいただくわ……っておい！」

「だつてえ、しようがないじゃないですかー！寒くて仕方ないんですからー」

「だからっっておま……近い近い近い！」

えへへ、良かったあ！

あんなにも不安で押し潰されそうだったあの時以来の再会も、なんとか無事に済ませられたようですね！

もうわたしと先輩はいつも通りっ。

用意しといたブランケットをバッグから取り出して二人の足に掛け、さらにピットリと寄り添ったわたしに真っ赤にキョドリながらも、わたしが愛情込めて作ったお弁当を美味しそうに食べる先輩をニマニマ眺めてご満悦なわたし♪

こうして本日の幸せなお昼休みを過ぎす一色いろはなのでした！

続く

## 一色いろはは相談されるっ

二月に入り約一週間。

あと一週間もすれば、恋する乙女が勇気を出せるきつかけを貰える日がやってくる。

わたしはその日が待ち遠しくもあり、また、このまま来なければいいのにといい思い、そんな相反する気持ちを抱えながら、あの一緒に過ごしたお昼休みから数日間をもやもやと過ごしていた。

告白したい……けど、どうせまだ勇気が足りないんだろな。

そんな情けない自分を真正面から見つめるのが嫌で嫌で仕方ない。

「失礼しまーす」

「いろはちゃんやつはろー!」

「こんにちは、一色さん」

「結衣先輩やつはろーです。雪ノ下先輩こんにちは」

今日も当たり前のように奉仕部の扉をくぐり、いつも通り挨拶を済ませながらちらりと先輩に視線を送る。

目が合うとようやく声を掛けてくれた。

「おう」

まったく！この人は目が合わないわたしに挨拶してくれないんだもんなあ。

しかもあからさまに「またきやがった」って顔しちゃってますよコイツ……

「ちよつと先輩！可愛い可愛い後輩が失礼しまーす！って入ってきた時点で、『いらつしやい！良く来たな。ずつと待ってたよ！』って爽やかな笑顔でウエルカムするくらいが常識じゃないですかあ？」

「誰だよそのキモい爽やかキャラ……そういうのは葉山に頼めよ。俺が笑顔でそんな風にお前を迎え入れたらキモすぎて通報されちゃうから」

確かに先輩がそんな風に歓迎してくれたら、たぶんこの場の女子三人組は自然と携帯に手が伸びるかも知れせんね。

「まあ確かにキモいんで通報はしちゃうかも知れませんが……。……だからって普通に挨拶くらいしてくれただっていいじゃないですかー……」

ぶくつと頬を膨らまして、わたし怒ってますよアピールをぶちかます。

なんならぶんぶんっ！って口で言っただけでもいいくらいのレベル。

「……だってどうせ毎日来んだもん」

「こんなに可愛い後輩が毎日来てくれてるのにどうせって失礼な……ホントどうしようもない先輩ですねー」

そう言いながらいつものように自分の席を用意すると、いつものように先輩の隣に座り鏡を用意する。

なんかこの動作があまりにも自然過ぎて、まるで生活の一部になっちゃってるみたい。

「一色さん？ 時期的に生徒会が忙しくないのは分かるのだけど、あなたサッカー部のマネージャーの方は大丈夫なのかしら」

雪ノ下先輩はごもつともな事を言いながらも、わたしの分の紅茶を用意してくれる。

もう「紅茶要るかしら？」と聞いてこない辺りが、なんだかこの場所に受け入れて貰えるみたいで心地の良いくすぐったさなんだよね。

「だって外寒くないですかー？」

「はあ……まったく。……どうぞで」

呆れるようにこめかみを押さえながらも、優しい笑顔で紅茶を出してくれた。

「ありがとうございますー！」



紅茶の香りと奉仕部の温かさを胸いっぱいを感じながらふと思う。

わたしは、あと一週間もしたらこの場所を壊してしまうのだろうか？

それとも単にわたしだけが壊れてしまうのだろうか？

なーんてね。どうせわたしはまたチョコを渡すのにも練習っていう名のマジカルワードに逃げちゃうんだろう。

あんなに大胆な事したのに。あんなにとんでもない事したのに。

それでもわたしはああいう逃げ道がなければ告白ひとつ出来ない臆病者。

繋がりを失いたくないから、失うのが怖いから、完全に失ってしまわないように少しでも逃げ道を用意しておくような、情けない恋愛初心者。

わたしはまだ本物の恋をしたことが無かったから、失敗してこの本物の恋を、先輩を失うのがどうしようもなく怖いんだ。

偽物の恋を失うのはなんてこと無かったのにな。

なーんがもう一步だって止まりませんからね、よ。

逃げ道がなきや一步たりとも進んでないじゃん。

……違うか。無理やり一步を踏み出そうとして自らが起こしたあの行為が、逆に自らの首を絞めてるんだ……

あの時、初めて先輩に避けられるかも……拒否られるかもって恐怖を味わってしまった

たから、逆に次の一步が恐くて踏み出せなくなってしまうんだ……

「お前、寒いからとか社会舐めすぎだろ……」

うつわ……危うくネガティブ思考に支配されるトコだったあ……

せつかく先輩との楽しいやりとりなんだから、それは一先ず置いとこう。

「いやいや先輩にだけは言われたくないですー」

「お前も大概だぞ？俺は自覚している分まだマシだ」

「自覚しててそれの方がよっほどたち悪いですからっ」

二人で笑いながら罵りあっていると、怪訝な表情をしながら結衣先輩が一言釘を刺してきた。

「……なーんかヒツキーというはちゃん、ここんどこ妙に仲良いよねー……」

その突然の言葉に抑えていた感情が急に熱を帯びはじめ、一気に顔が熱くなる。

先輩もあからさまに動揺してるからなんとか誤魔化さねば！

「そんなワケ無いじゃないですかあ？先輩とわたしはいつも通りのキモい先輩と可愛すぎる後輩の間柄ですよー！ねーせんばい？」

「お、おう。別になんも変わらんっての。………っておい。それどんな間柄だよ」

「なーんか怪しく〜てかヒツキーなんかキヨドっちゃっててキモい！」  
「いやなんでだよ……」

ヤバいな……なんか怪しまれてるぞ？ 無言の雪ノ下先輩がたまらなく恐いし……

でもホントの所、わたしと先輩の関係はなんにも変わってはいないのだ。

まるであのデートは……あのキスは無かったか事かの如く、お互い一切あの日の出来事に触れないようにしている。

二人で寄り添ってお弁当を食べたのもあの一度きり。

あの日、お互いがデートの事に一切触れなかった事で、暗黙の了解的に今までと変わらずに過ごそうって決まったんだろうね、わたし達のあいだでは。

だから分かつているんだ。わたしも先輩も。

もしも次にあのデートに、あのキスに触れる時……それが「その時」なのだ……それに触れる「その時」が、手遅れになってからでなきやいいけど。

とは言え、現状ちよつとマズい気がするな。毎日毎日来すぎたかなあ……？

それとも、意識なんてしないで先輩と関わっているつもりになってたけど、やっぱりこの二人には不自然に見えちゃうのかな……？

だってほら！ 黙って本を読んでいる先輩と、その隣で鏡片手に女磨きに勤しんでいる

わたしを、交互にチラチラ見てくるんだもん、この二人！

仕方ないっ……明日は奉仕部参加を控えてサッカー部に顔出そうかな？

べ、別に逃げるワケじゃないんだよ？ええ、戦略的撤退ってヤツですよ。

× × ×

さつむい！

いやいや真冬にマネージャー業務とかちよつと頭おかしいでしょ！

これだったら実際に動き回る選手の方がよっぽどマシそうだよ……

今日は数日ぶりにサッカー部の練習に付き合っている。うん。だからマネージャーなのに練習に付き合っているっておかしな話ですよね。

それにしても先輩、口を割らされてなきやいんだけど……

でもまさか後輩にデートの練習に付き合わされて、別れ際にキスの練習台にされた……だなんていくらなんでも言えるワケ無いですよねー！

ガチで耐えてくださいせんばい！

口を割らされてもせいぜいデートの練習台くらいまでで耐えてくださいねっ!?

アレがバレたらわたし告白する前に消されちゃいますよ！

「いろはちゃん！こっちは終わりそ？」

そんな事を考えながら胃を痛くしていた時、不意に声を掛けられてビクンっとなつてしまった……

「……ま、愛ちゃんかあ……あー、びっくりしたあ！うん、こっちはもう片付くよー」

「さつすがいろはちゃん！……ていうかそんなにびっくりしてどうしちやったの？」

「へ？あ、ちよつと命の危機を感じて人生を振り返つてたと言うか」

「もう……なに言ってるの、いろはちゃんたらあ！」

いや割とマジなんです。

そんな命の危機に瀕しているわたしの真剣な表情を見て愛ちゃんはくすくすと笑う。

ほんつとこの子なんでこんなに可愛いんでしょつ……なんていうか純真無垢？

言つてしまえば戸塚先輩が女の子だったら、まさにこんな感じなのかな？

わたしも愛ちゃんみたいだったら、先輩にあざといとか言われなくてもつとたくさんわたしを見て貰えたのかなあ……？

「じゃああつちの陽なたに行つて、一緒にボール磨きでもやるっか？」

「ボール磨きか……まあ陽なたで暖かいからいつか」

そしてわたし達は部員が練習で使う程度のボールを残して二人でボール入りのカゴ

を運び、並んで座ってボールを拭き始めるのだった。

× × ×

「まったく。美少女二人が汚れたボール磨くとか、なんたる宝の持ちぐされか……でもこういう地味々な作業は、絶対にアイツラやらないんだよねー。」

「やつぱりたまにはボール拭かないと真つ黒になっちゃうてるねっ……もつとマメに拭かなきゃダメだよね〜」

「でもボール多いもんね。タオル出しも洗濯もしなきゃだし、愛ちゃん一人じゃなかなか手が回らないもんね。……あの子たちは絶対やんないし〜」

「そう。あとの二人の女子マネは、こういった地味な仕事はなかなかやろうとはしないのだ。」

葉山先輩に直接指示されて見られてる前でだけ一生懸命やって、あとは適当に投げ出すからむしろ手間が増える。

「ほんつとにウザい。何の為にマネージャーやってんのよアイツラって、わたしは部活自体サボりまくってますけどもっ！」

「あはは……まあ地味な裏方だから仕方ないよね。あの子たちは葉山先輩の近くに居た

くてマネやつてるだけだもんね」

そう言う愛ちゃんはたははと苦笑い。

わたしもちよつと前まではアイツラと目的が同じだっただけに耳が痛いです！

あ……葉山先輩か……

そう言えば、こないだ愛ちゃんが珍しく葉山先輩がどうのつて言ってきたっけ。もしかしてこの流れって……

そう思った時、やはりというかなんと言うか、愛ちゃんが急にモジモジとわたしに話し掛けてきた。

「……葉山先輩と言えば、あ、あのね？いろはちゃん……そつ……その、こないだ言い掛けた質問なんだけど……その……拭きながらでもいいから聞いてもらえる、かな……？」

「へ？あ、うん……いいけど……」

最近色々ありすぎて、すっかり愛ちゃんが相談事ありそうだったってこと忘れてた。もしかしたらずつと話したかったのかも。

「いろはちゃんは、その……葉山先輩の事、す、好き……なんだよ、ね……？」  
おつといきなり来ました。

……えつと、どうしよう……なんて答えたらいいのか……

こんな質問してくるって事は、つまりそういう事なワケでしょ……？  
だったら、もう他に好きな人が居るって答えた方が、いいよね？

「う、うん。そうだよ……？」

いやだからなんでわたし肯定してるんですかね。

わたしは悪くない……葉山先輩〓好きって言わなきゃいけない世間の風潮が悪い。  
てか実際は、先輩の事が好きっていざ人に話すのが堪らなく恥ずかしいんだよね……  
偽物の恋はペラペラと人に話せたつてのに、本物の恋は口にするのが恥ずかしいと  
か、とんだ乙女思考さんですね、わたし。

「だ、だよね……」

ヤバイ！愛ちゃんいい子だから勝算が低くても応援してあげたいと思つてたのに、  
持ちが萎んじゃう！

ここはやっぱり正直に否定しとかなきゃ！

「あ、や、実は……」

「だ、だったらさ！なんでいろはちゃんは……他の先輩と……仲良くしてるの……？」

「はへ……？」

びつくりすぎて変な声が出てしまいました。



きゅ、急にそっち!?

「二年生の……比企谷先輩と……その……すつごく仲良いよね……? いろはちゃん……」

ひ! ひき!?

まさかここで先輩の名前が出てくるなんて……!?

なんで愛ちゃんが先輩の事なんて知ってるんだろ……? ?

大多数の人は存在さえ認識してないハズなのに。

意味が分からなくて愛ちゃんの顔を見ると、物凄く不安そうな顔をしていた。

あ……そうか……先輩って言ったら文化祭の噂か……

もしかしたら愛ちゃんはわたしの事を心配してくれてるのかな……? ?

友達として、生徒会長として、悪い噂の先輩と仲良くしてる事でわたしに変な噂が立たないようにって。

その気持ちはとつても嬉しいんだけど、ちよつと胸が苦しくなる……まさかこんなにいい子にまで、先輩が悪く思われてるだなんて……

よし! せつかくの機会だし先輩の誤解を解いておいてあげますかね!

愛ちゃんにまで誤解されてるなんて、いくらしようもない先輩とは言え、ちよつとだ

け可哀想だしねっ。

感謝してくださいね？せーんぱいっ！

おっと、でもその前にと……

「ち、違う違うっ！先輩とは……うん。まあ仲は良いんだけど……そそそそういうんじやなくって！生徒会長の選挙の時にちよっとお世話になって、それ以来よく利用……手伝って貰ってるってだけで……」

つたく……わたしの恥ずかしがり屋さんめ！

先輩の誤解を解くんならいつそ実は好きって言っちゃえばいいのに、ここにきて守りに入っちゃうなんてね。

うう……でもやっぱり恥ずかしいんだもん……

「そう……なの？」

「う、うん！そうだよー？」

でもね？って、先輩の誤解を解こうと声を出しかけたわたしは、その言葉を愛ちゃんのみあまりにもホツとした嬉しげな笑顔と、そしてこの言葉に遮られてしまった……

「……そっか……良かった……いろはちゃんと比企谷先輩って、なんでもないんだ……」

あ、あれ……？

なんか様子がおかしくない……？

すると愛ちゃんは今まで見た事もないような真つ赤な顔と今にも泣き出しそうな眼差しで、わたしを真つ直ぐに見据えてきた。

「……あつ、あの……いろはちゃんっ……！も、もし良かったらなんだけどっ……そのっ……」

……え？嘘でしょ……？そんなワケ無くない!?

でも愛ちゃんは、そんなわたしのあり得ない想像通りの言葉を、朱色に染まった恋する乙女の表情そのままに、わたしへと投げ掛けて来たのだった……

「……わ、私につ……ひ、比企谷先輩を……紹介して、もらえない……か、な……？」

続く

# 一色いろはは葛藤する……

寒風吹きすさぶ2月の夕方。

手も足もかじかむ程に凍えるような寒さのはずなのに、わたしの目の前に佇むとても可憐な少女は、まるで夕焼けに染まったかのように、熱を帯びた顔をわたしに真っ直ぐ向けてくる。

「……わ、私につ……ひ、比企谷先輩を……紹介して、もらえない……か、な……？」  
その一言だけを必死に告げると、その少女は羞恥に耐えられずに、その赤く染まった可憐な顔を両手で覆い隠した。

「ま、愛ちゃん……？」  
まさかの先輩への紹介をお願いしてきた愛ちゃんは、あまりにも恥ずかしかったのか顔を隠してイヤイヤをしていた。

その、手で隠した顔を左右にブンブンと振る愛ちゃんは……なんていうか超可愛い。た、確かに可愛いんだけど……

「ちよちよちよつ!?ま、愛ちゃん!?手っ!手っ!」

「…………ふえ…………?」

わたしにイヤイヤを止められた愛ちゃんの顔は、今さっきまでボールを拭いていた汚れた手で覆っていたため真つ黒になってたのだ。

「わあっ!わ、忘れてたあ…………いろはちゃん…………!私、か、顔汚れちやつてる…………!?!」

「もう真つ黒だよ…………」

そう言いながらわたしは愛ちゃんにハンカチを渡してあげた。

「ありがとー!」と、なんにも考えずにそのハンカチを受け取って手と顔をゴシゴシと拭いた後に、その汚れてしまったハンカチを見た愛ちゃんは、一瞬で顔を青くさせる。

「ふええ…………ごめんいろはちゃん!ハンカチこんなに汚しちやつたよお…………」

「う、うんっ!…………大丈夫大丈夫!」

「てか自分のハンカチ使えば良かったのに、私なにやつてんだろっ…………ちゃんと洗濯してから返すからねっ!?!」

心底申し訳なさそうに涙目でシユンとなってる愛ちゃん。

やばいよ可愛いよ…………

わたしって城廻先輩がちよつと苦手なんだけど、実はその原因は愛ちゃんにあるんだ

よね……

だって、こんな振る舞いを素でやってのけるんだよ!?この子!

サッカー部で愛ちゃんと知り合ってから、天然モノのこんなのを毎日見せ付けられて、でも愛ちゃんは友達だから可愛いな、いい子だなんて思えるんだけど、このぼわぼわよりもさらに一段階上の反則的な空気を友達以外、しかも先輩に出されたらたまったもんじゃないんですよ!養殖モノのわたしとしては死活問題なんです!

と、とりあえずそんな事よりも、どういう事なのか聞かなくちゃだよね……こんな様子の愛ちゃん目の当たりにしたら、なんかもうあんま聞きたくないけど。

「……えっと、愛ちゃん?どういう事か、聞かせて貰える?」

すると愛ちゃんは申し訳なさそうに言う。

「へ……?あ、や、だから……私のドジでいろはちゃんのハンカチ汚しちゃったからちゃんと洗って返さなきゃなって……」

「いやそつちじゃなくてっ!……せ、先輩の事っ!なんで愛ちゃんは先輩なんかを知ってるの!?!」

もうやだこの子!これが素だなんてズルすぎる!

「……あ、そ、そっかつ……」

自分の勘違いに対してなのか先輩に対する想いを述べるからなのか、愛ちゃんは一瞬ハツとしたかと思うと、再度頬を真っ赤に染め上げて俯いた。

「あ、あのね？」

そうして愛ちゃんの先輩語りが始まった……

× × ×

「私ね？いろはちゃんとクラス違うから知らないかもだけど、文実だったんだ」

文実。文化祭実行委員。

各クラスから2人の参加者を募って、来たる文化祭の下準備を担当する委員。

わたしは詳しい内容までは知らないけど、先輩は去年の文化祭実行委員で、その活動中に色々やらかして学校一の嫌われものになったらしい。

愛ちゃんは文実中に先輩を知ったのか。

でも……なんで？

「文実って、先輩が学校一の嫌われ者になった原因だよね？なんか色々やらかして………だったら文実の間では、先輩って特に嫌われ者なんじゃないの？それなのに紹介って……？」

愛ちゃんに限っては、それでまた先輩を責めたり嫌がらせして楽しむ為に紹介を求め  
る事なんて絶対ない。

てかこの表情見れば、それが何を意味しているかって事くらい誰にだって分かる……

「うん……そうだね。比企谷先輩、すっごく嫌われてた……」

「だつたらなんで？」

「……比企谷先輩ね？文実スタートしてから、面倒くさそうにしながらもいつつも真面目にお仕事してたの。1人で黙々と……。その時点でなんか良い先輩だなあ、頑張ってるなあ、って思ってたんだ。私もがんばんなきゃっ！ってねっ」

たつた3〜4ヶ月程度前の事だけど、愛ちゃんはとつても優しそうな笑顔で懐かしんでいる。

わたしも自然と生徒会役員選挙の時やクリスマススイベントの時の面倒くさそうに一生懸命仕事する先輩の姿が脳裏に浮かんでほわってなっちゃった。

「でもね……その……あんまりこんな事は言いたくないんだけど……相模先輩、あ、実行委員長だった人なんだけど……その人のあんまり良くない対応でね、文実はボロボロになつてつちやつたの……」

あんまり良くない対応って言うけど、愛ちゃんがそういうくらいだからそれはもう酷いもんだつたんだろう。



「真面目に参加してる人たちに仕事押し付けてみんな文実サボりまくって、計画もなんにも決まらなくて作業が遅れてく一方で、私も一年生ながらに、ああ……この文化祭は失敗しちゃうんだらうな……って感じて諦めてたの……そしたらさ！そんな時に比企谷先輩がスローガン決めの場でとんでもないこと言いだしたのっ！なんて言ったと思う!？」

超キラキラした目でわたしを見てくる愛ちゃん。

よっぽど楽しかったんだらうねっ……

『人　　よく見たら片方楽しってる文化祭　　とか』だって!」

ぶっ! やっぱりあの人バカだっ!先輩らしすぎるっ!

「ずっと寡黙で真面目な先輩だと思ってたからさ、私もうビックリしちゃって!なんなのこの人! って! ……そしたらさらに『人という字は人と人が支え合って、とか言ってますけど、片方寄りかかってんじゃないっすか。誰か犠牲になることを容認してるのが人って概念だと思わんですよね』って!」

心底可笑しそうに破顔する愛ちゃん。

うう……わたしもその場に居たかったなあ……

「そしたらトドメにこれだよ! 『俺とか超犠牲でしょ。アホみたいの仕事させられてるし、ていうか人の仕事押し付けられてるし。これが『ともに助け合う』ってことなんで

すかね。助け合ったことがないんで俺はよく知らないんですけど』ってね」

クスクスと本当に楽しそうに笑う愛ちゃんを見て、ちよつとだけ不思議に思った。

そんなふざけたバカな台詞、わたしなら先輩らしいと笑えるけど真面目な愛ちゃんには容認出来なくない? って。

「その先輩丸出しのアホな妄言聞いて、愛ちゃんは先輩に嫌悪感なかったの?」

「うーん。どうだろ? とりあえずはすつごくビックリしたけど、それまでの真面目な姿を見てきたから、そこまですは無かったかな? ……でも確かにワケ分かんかった。なんで一生懸命頑張ってた先輩が急にこんなこと言うんだらう? って」

すると愛ちゃんは表情をガラリと変えた。

さっきまでの楽しそうな笑顔から、とてもとても慈愛に満ちたような優しい表情に。

「でもね、次の日にはすぐに分かっちゃった! ……だって、次の日から文実の空気が一変したから。比企谷先輩は1人で悪者に……敵になることで文実メンバーを発奮させて、バラバラだった文実を纏め上げたんだよ……」

……すごい……なにがすごいって、先輩の先輩らしい捻くれた、でも皆の為に自分を捨てるやり方を、この子はちゃんと見てたんだ。

普通なら表面上しか見ないで悪く言うだけなのに、この子はちゃんと本物を見てる

……

だからこそ……わたしは今この子が初めて恐いと思った……敵、なんだと。

「その後も一人で悪者になっちゃって文実に居づらいハズなのに、今までと変わらず毎日文実に来て、今までよりもっと押し付けられたお仕事を面倒くさそうな顔して黙々と頑張ってる姿を見てたら……その……すごく……格好良く思えてきちゃってっ……！」

そこまで話すと、愛ちゃんは思い出したかのように真っ赤に俯いた。

「……だから、文化祭の最後に相模先輩に酷い暴言吐いて泣かせたって聞いた時もすぐに分かったの……ああ、比企谷先輩は、また一人で悪者になって誰かさんを救ったんだなあ……って」

愛ちゃんはもう隠しようもないくらいの恋する乙女な顔で遠くを見る。

愛ちゃんの目には、なにもない空間に先輩が見えてるんだろう。

わたしはそんな愛ちゃんを見ながら、とても複雑な思いが葛藤していた……

× × ×

でもとりあえず聞かなくちゃならない事がある。

だからわたしは素直な気持ちで訊ねてみた。

「でも文化祭なんて随分前なのに、なんで今……なの？」

「!!……そ、それは……」

ビクツとしてわたしを一瞥すると、ボンッと音が出そうなくらいにさらに真っ赤になつてから俯いて、人差し指同士をくるくるしながら、ぽしよぽしよと教えてくれたその答えは、聴き取り辛かつたけど、でもはつきりところ答えた……

「……もうすぐ、バレンタインだから……」

……わたしはくらくと目眩がしそうだった。

ちよつとだけ予想はしてたけども……

「……ホントはね？もつと早く声掛けて知り合いくらいにはなつときたかつたの……でも緊張しちやつてどうしても無理で……それでずつと悶々としてただけど、ある日ね、比企谷先輩がサッカー部に来た事があつたの……!!」

するとわたしをジツと見つめる。

「いろはちゃんが生徒会長になつた後くらいに、いろはちゃんを探しに来たつて……」

……そう言えば、クリスマスイベントの時わたし集合に遅れちやつて、その時先輩が『待つたどころか普通に探しに行った』とか言つてた……!その時か。

「私もうビククリしちやつて……!なんで比企谷先輩がサッカー部に!?!つて。……私

ちやうど葉山先輩にタオル出ししてたから葉山先輩とお話してた比企谷先輩の近くに居れたんだけど、その時いろはちゃんと比企谷先輩が知り合いなんだって初めて知って……」

そして複雑そうな顔を見ると、あはは……と指で頬をポリポリ搔いた。

「……だからそれからずっといろはちゃんに比企谷先輩の事を聞いてみたかったんだけど、いろはちゃんあの辺りを境に忙しくてあんま部活に顔出せなくなっちゃったし……」

確かにクリスマススの時はもう色々ありすぎて部活どころじゃ無かったっけなく……先輩を意識しだしたのもちやうどその頃だし。あの言葉を聞いたのも……

「で、年が明けてからもいろはちゃん忙しかったみたいだし……その……たまに校内で見掛けた時とか……その……比企谷先輩と、すっごく楽しそうに廊下を歩いてたりしたから……そういう関係……なのかな？って……」

わ、わたしって意外と周りから先輩と恋人同士に見られてたりするのかなっ!?

てかやつぱわたしって、先輩と一緒に居る時は客観的に見てそんなに楽しそうなんだ……ちよつと恥ずかしいです……

「……だから中々聞けなくって……私、こういうの初めてだから……は、恥ずかしかったし……」

ん? こういうの初めて……?

「……………へ!? もしかして、は、初恋とかなの!」

すると愛ちゃんは、はうつ……つと悲鳴をあげるとまた顔を両手で覆ってイヤイヤを始めてしまった……もうなんなのこの可愛い生き物……

でも顔を隠しながらも必死で話を続ける健気な愛ちゃん。

「うう……いろはちゃん……そんなにはつきり言わないでよお……」  
どうしようお持ち帰りしたくなってきた。

「その……私ずつとサツカーを一生懸命やつてる格好良いお兄ちゃんをそばで応援してきたお兄ちゃんっ子だったから、他の男の子にあんまり興味もてなくて……その……初めてこんな風にドキドキしたのが比企谷先輩というか何というか……」

……先輩が初恋、かあ……それってわたしと一緒にのかな……?

わたしも本当の意味で人を好きになったのは先輩が初めてだから。

「だから……絶対につ……その、バ、バレンタインにチョコ渡したたってずつと思つてたんだけど……たぶん比企谷先輩って、知らない女の子とお話するのって苦手だよね……」

女の子に限らず、人と話すの自体が苦手なんですけどねあの人。

「文実の時も二言三言くらいで、私あんまり比企谷先輩とお喋り出来なかったから私の事なんて覚えてないだろうし……だから、見ず知らずの女の子から急にチョコ渡されるなんて迷惑掛けちゃうかな？つて……だからバレンティン前に、どうしても知り合いくらいにはなっておきたかったの……」

「そ、そっか……じゃあチョコ渡すのはもう確定してるの……？」

「……………うんっ」

まだ迷いはあるんだろうな。返事をするまでにはすぐく間があったけど、それでもか細い声で力強く返事をしてくれた。

そして覆っていた手をどけて、隠しっぱなしだった可憐な顔をようやく見せてくれた。

その顔はまるで林檎のように赤く、その瞳は今にも雫が零れ落ちそうなほど潤み、その唇は僅かに震える程に儂なげで。

「……………やっぱり無理かな……いきなり紹介して欲しいだなんて……無理だよね……」

わたし……どうしたらいいんだろう……

×  
×  
×

比企谷八幡先輩は、他人からの好意や優しきにとても弱く、そして逃げてしまう。わたしには分からないけど、それは幼少時代から培ってきた経験や後悔なんかからくる自衛策なのだろう。

どれだけ辛い思いをしてきたのか、苦しい経験をしてきたのか、わたしには理解なんかしてあげられないと思うと悲しくて仕方ない。

だからせめてわたしが先輩に寄り添うことで、その傷の痛みが少しでも和らいだらいいな、なんて思ってた。

だから先輩がわたしからの好意に気付かないように、気付かないフリが出来るように誤魔化して頑張ってきた。

いつかそんな先輩がわたしという存在を疑わなくなるように。心から信頼してくれるように。

結局はそれを理由に自分も逃げていただけなんだけどね。

でもたぶんこの子は違う。



この子は、愛ちゃんはそんな障害は一発で乗り越えてしまう。そんな気がする。

他人からの好意や優しさから逃げてしまう先輩の唯一の心の隙間に入り込めるのは、戸塚先輩や城廻先輩が持ち合わせているような裏表の無い純真さ。

どうしても優しさの裏を読んでしまう先輩が、その裏を感じる事が出来ないくらいの純粋さ。

愛ちゃんは城廻先輩や戸塚先輩と同じような空気を纏った素敵な女の子。

先輩からしてみれば、大好きな戸塚先輩が、大好きな年下の女の子になって現れたように見えちゃうのかもね。

だからたぶん愛ちゃんからの純真な好意は、先輩は疑わないんじゃないかな。

疑わない事と受け入れる事はまた別の問題だけど、少なくともわたしが今まで稼いできたアドバンテージなんかは一瞬でひっくり返りそう……

わたしの心の中は相反する気持ちで戦っている。

本当に愛ちゃんを先輩に紹介してしまっただけだろうか？って気持ち。

今まではわたしのライバルは奉仕部だけだったけど、愛ちゃんは下手したら最大のライバルになってしまうかも知れない。

雪ノ下先輩と結衣先輩だけでもとても敵わないくらいの強敵なのに、その上こんな子

を紹介しちやったら、わたしはどうなつちやうんだらう……

3番手以下？伏兵どころじゃ無くなつちやうんじゃないの？……つて。

……だから会わせたくない。

でも、それに相反する気持ち。

それは、あの捻くれてて最悪なあんなどうしようもない先輩の本当の優しさを、こんなにも真つ直ぐで純真な目で見ていてくれるこんなにもいい子を、自分の私利私欲の為にだけに嘘ついて誤魔化して会わせないようにするような、そんな偽物のわたしが、先輩に好意を届けられるのだろうか？先輩に本物をもらえるのだろうか、あげられるのだろうか？つて気持ち。

……だから会わせなきや。

わたしは、こんな相反する気持ちを抱えながら、不安そうに見つめてくる愛ちゃんをジツと見つめていた……

続く

## 一色いろはは紹介するっ

清らかに潤んだ瞳で真つ直ぐ見つめてくる愛ちゃんから、わたしは目を逸らす事が出来ない。

頭の中をぐるぐると駆け回る葛藤だったけど、でもわたしの思考の中に本物というワードが浮かんでしまった時点で、答えはもう出ていたんだろう。

だって、本物が欲しいから今までの自分らしさをかなぐり捨てて頑張ってるのに、この真つ直ぐな瞳から目を逸らす行為は間違ひなく偽物だから。

自分の中の偽物を肯定してしまえば、もう二度と本物なんて言葉を口に出来なくなっちゃう気がするから。

「うん！いいよ。先輩に紹介してあげるっ」

「……ほん、と……？」

見開いたその目は心からの驚きと喜びに満ち溢れていた。

……いいな……羨ましい。

偽物なんて何一つない愛ちゃんのその表情に、わたしはついそんなことを思ってしまった。

× × ×

「でも……」

わたしは本物に対する気持ちを裏切りたくない。だから本物の気持ちを惜しみなく溢れださせている愛ちゃんを裏切りたくないから紹介するんだ。

でも、それでもこれだけはやっぱりちゃんと言っておかなきゃ。

「でもね……？ 紹介はするけど……わたしは愛ちゃんのその恋を応援することは出来ないよ」

「……え？」

喜びに満ちていたその瞳には大量の疑問符が浮かんでいた。不安そうにキョトンと首をかしげる愛ちゃん。

だから可愛すぎるからやめてっ！

「だって……」

わたしだつて先輩が大好きだから!

「あ、あんなどうしようもないアホでぼつちな先輩如きには、愛ちゃんなんて勿体なさ過ぎるもーん! てか豚に真珠すぎでしょー!」

うわーっ! ホントわたしてっパカなのお!?

なんでこの期に及んで素直に好きって言えないのよお……!

……………で、でもマジでダメだ……こんなに恥ずかしいもんなの……? 本物の恋を認めるのつて。

だからさつきまでの愛ちゃんの死ぬほどの恥ずかしさも良く分かるし、それなのに、あんなにパニツクになつていてさえ自分の気持ちを全部吐き出せた愛ちゃんが凄いて尊敬しちゃうよ。

「そつーそんな……私が比企谷先輩に勿体ないだなんて……そんなことないよお……」

真つ赤な顔と手をブンブンさせながら慌ててわたしの妄言を否定してる愛ちゃんを見てたら、どうしようもないくらいに劣等感を感じてしまった。

「……でも……えへっ、ありがとつ! いろはちゃん。私は紹介して貰えるだけでホントに幸せつ……だから応援とかは、大丈夫ですつ……」

はあ……今日は愛ちゃんを羨ましいって思つてばっかりだなあ……

つてダメだよいろは! ただでさえ愛ちゃんを紹介することでメツチャ不利な状況に

なるんだから、こんなネガティブな事ばつか考えてたら、大切なモノがこの手からずり逃げてつちやうよ!?

わたしはわたしらしく、どこまでも前向きに突き進まなくちや元々勝ち目なんてないんだから!

× × ×

さて、紹介するならするで、愛ちゃんにもきちんと現実を説明しておかなきゃいけないよね。

もしかしたらこれで諦めてくれるかも知れないし。

いや、このキラッキラした目の愛ちゃんには余計な心配なのかもね……

「でもまずね?先輩について話しておかなきゃならない事があるけどいい?……先輩を取り巻く状況について。結構……キツイこと言うかもよ……?たぶん……愛ちゃんの恋はうまくいかないよ……?」

わたしからの予想外の投げ掛けに愛ちゃんの表情が引き締まる。

そしてコクリと一言。

「……うん。大丈夫」

もしかしたら、愛ちゃんもなんとなく分かつてるのかもしれない。

そりや文化祭で先輩をずっと見てたんだもんね。

先輩の傍にはあの人も居たんだもん。先輩を真っ直ぐに見てた愛ちゃんならなんとなく分かるだろう。

「先輩にはね……」

そしてわたしは先輩の話をした。

雪ノ下先輩のこと、結衣先輩のこと、わたしとの出会いのこと、奉仕部の崩壊危機とそれによる更なる繋がり。

もちろんあの大切な言葉は教えなかったけどね。

あれはあの人たちのモノだから。

あれはわたしのモノだから。

話し終わって愛ちゃんを見ると、両手をグツツと握りしめて、なぜかすっごい真っ赤な顔をしていた！そして……

「ぶはーっ！けほっ！こほっ！……はあはあっ！……はあ〜」

「ちよっ？愛ちゃんどうしたの!？」

「はあはあっ……はっ！ご、ごめんいろはちゃん……なんかすっごいお話だったから、集



中しすぎて途中から呼吸するの忘れてたっ……」

……ホントもうヤダこの子……

ああ、ガチで会わせたくなくなってきたよ……アイツ絶対デレデレすんだろいなあ……その上バレンタインにはこの子からチョコ貰って告白されちゃうんだよ……？

いくらなんでも知り合って1週間やそこらで告白を承けるような人では無いだろう事が唯一の救いではあるけども。

そしてようやく息が整ってきた愛ちゃんが語りだした。

「……そっか。私、文化祭の時比企谷先輩のことよく見てたから、雪ノ下先輩とはなんかあるのかな？って思ってたけど……そういう関係なんだね……そして、由比ヶ浜先輩……か」

やつぱりちよつとシヨックが大きかったかな。

雪ノ下先輩とはなにかあると思ってたみたいではあるけど、たぶん想像以上の絆の深さを感じ取ったんだろうね。

その上そこに結衣先輩まで加わっちゃうんじや厳しすぎるもんね……

うう……てかわたし自身だつて分かり切つてた事のハズなのに、改めて人に話すとなんか絶望的にしか思えなくなつてきたよ……

でも愛ちゃんはわたしとはちよつとその関係の受け取り方が違つたみたいだ。

すつごい予想外の返しが来たよっ！

「……………やつぱり比企谷先輩つて素敵なんだなあつ……あんなに凄い人たちも比企谷先輩に惹かれてるだなんて……やつぱり分かる人たちには分かるんだねっ！……私、文化祭の時も文化祭のあとにも比企谷先輩の悪口を周りから聞かされてすごく辛くて悲しかったから、あんなに凄い人たちが比企谷先輩のホントの良さを理解してくれてるつて知れただけでも本当に嬉しいっ……」

……………信つじらんない……

どう考えたつて不利な状況でしかないのに、なんであんな人たちが先輩の傍に居んのよつて嘆いたつておかしくないのに、そんな事よりもこの子は、先輩の周りに集まる暖かい光を純粋に喜んでるんだ……自分の恋よりも先輩の幸せを喜んでるんだ。

目の端に光るものを携えてまで先輩の幸せを心から喜んでる愛ちゃんを見ていたら、なぜかわたしにもなんだか幸せな気分になつてきちやつたよつ。

ふふつ、良かったですね先輩っ！こんなにも素敵な子が、先輩なんかの事をちゃんと

見てくれてますよ？っつて！

ちよつとでもこんな風に思えたわたしは、ちよつとでも愛ちゃんみたいな本物に近付けたのかな？

愛ちゃんみたいに真っ直ぐな気持ちを先輩に抱けたのかな？

分からない。分からないけど、でもこんな風に思えたっつてだけでも愛ちゃんの想いが聞けてよかった……！

「愛ちゃんは凄いな。あんなに強力すぎるライバルが居るっつて知ったのに、そんなに真っ直ぐに先輩のことだけを見てられるなんて」

「へ？……そ、そんなことないよっ……やっぱり凹んでる気持ちも正直あるし……」

あ、やっぱり一応凹んではいるんだ。

「……でもさ、その……どんな状況だったとしても、気持ち伝えられなくちゃ始まらないしっ！伝えられるチャンスを貰えそうっつてだけでも有り難いし、ちゃんと伝えられたらなにか変わるかも知れないしねっ」

こんなに真っ赤な真っ赤な癪して、ニコツと笑顔になれる愛ちゃんはやっぱり素敵だな。

伝えられなくちゃ始まらない……かあ。

思えばわたしは始まるのが恐くて、先輩が逃げちやうからなんて事を言い訳にして気持ちを伝えるっていう一番大事な事をすつとぼして、無理矢理デートに連れ出したりキスしたり……大胆な事やつてるように見せ掛けて逃げてばっかりだったもんな……

なんかわたし今日は愛ちゃんに教えられてばっかだなあ。ホント感謝感謝だよ。

だから感謝の気持ちも込めて、快く紹介してあげるね、愛ちゃん。

だけど、だからこそ絶対に負けられないっ……負けたくないっ……

本当の気持ちを愛ちゃんにまだ打ち明けられてない時点で、今ントコ一歩リードされちやつてるのかもだけど……

× × ×

さて、ようやくわたしの気持ちも固まった事だし、肝心の予定を決めようかな。

わたし的には遅ければ遅いほど助かるけど、愛ちゃん的には早ければ早い程いに決まってるよね……つてわたし全然気持ち固まって無いじゃんっ!?

「ふうっ……んで愛ちゃん?じゃあいつにする?」

「ふえ?なにを?」

「なにを……セーんばーいっ！先輩にいつ紹介したげよつか？つて話！……今日  
はわたしたちも部活中だし、明日くらいにしとく？」

「……………っ！」

あれ？わたしのセリフを聞き終えた愛ちゃんが急にビクツとしたかと思うと、そのま  
ま固まっちゃった。

「……………お、おーい、愛ちゃん？」

すると首がギギツと音がしそうな程にぎこちなくゆつくりとこちらへ回すと、そこ  
には先程までの真っ赤で恥ずかしげで暖かな笑顔の女の子と同一人物とは思えないくら  
いに、サーツと血の気が引いた涙目の女の子がプルプルと震えていた……

へ？な、なに？

「……………どどどーしよお、いろはちゃんっ！どうせ会えると思わなかったから  
必死にペラペラと相談してみたけど、い、いぎホントに紹介されちゃうんだ……つて  
思ったら……もう緊張と恥ずかしさで、ししし死んじやいそうだよおっ……！」

と、なんだかわちやわちやしだしてしまった……

さつきまでの愛ちゃんに対する感動と尊敬返してっ！？

うう……でもやっぱり可愛いなあ！くっそうっ！！

結局わちゃわちゃとプチパニックを起こしてしまった愛ちゃんをなんとか宥め、明日の昼休みに紹介する事に決まったのだが、仕事もせずにガールズトークを繰り広げていたトコロをバツチリと目撃されていたようで、部活終わりに戸部先輩に『ないわーないわー』と何度も何度も薄気味悪く鳴かれてしまったのでしたっ。戸部許すまじ。

× × ×

翌日。

四時限目終了のチャイムが鳴り響くと、わたしはバツグを抱えて重い腰をあげる。

「ありゃ？いろはお昼はー？」

「ごめん！今日もちよつと用事がっ……」

「いろはちゃん最近冷たい」「まあまあ、いろはにも色々あるんだよねー」「行ってらー」  
 なんかすでにデジャヴを感じてしまいそうなこのやりとりを終えて、わたしは教室を出た。

先輩の待つベストプレイスへっ!!と行く前に、わたしはE組の教室へと向かわなくて  
 はならない……

はあ……やっぱ気が重いなあ……

「E組の前扉から中を覗くと………愛ちゃんがまるで卒業式でも受けているかのような綺麗な姿勢で、真っ直ぐに前だけを向いてピシッと固まっていた………だけど目の焦点は合っていない………なんかぐるぐるしてる。」

「おーい愛ちやくん………周りの友達もみんな動揺してるよ………」

「……失礼しまーす………あ、愛ちゃん呼んでもらえますか？」

近場に居た名も知らぬ男子に話し掛けたら、凄く動揺してなんか必死に話し掛けて来たんだけど、今そういうのいいから。

「ごめんね急いでるから」と抑揚の無い声で冷たく急かすと、ようやくとぼとぼと迎えに行った。

普段だったらもう少し愛想良く接してあげるんだけど、今はもうそんな気分じゃないのよ。ごめんね？

その男子にわたしの呼び出しを告げられると、ビクウウツツとしてまたもわちやわちやし始める愛ちゃん。

あ、立ち上がろうとして机に思いっきり足ぶつけて悶えてる。

あ、カバン落として中身ぶちまけてわちやわちやと拾ってる。

あ、右足と右手が同時に出てる。

あ、つまずいた。

……え？愛ちゃん？マジで大丈夫……？死んじやわない……？

「いいいろはちゃんっ！……おまおまお待ちしえっ！」

いや無理でしょコレ……

「ちよっ……ま、愛ちゃん、大丈夫……？今日はやめとく？」

「ふえっ……？い、行くよ？ぜ、全然大丈夫だよっ？」

いや、そんな目をぐるぐるされて言われても……

でもまあ本人が行くって言うてる以上はしようがないか。

そしてわたしは緊張して死んじやいそうな愛ちゃんを引きつれてあの場所へと向かった。

ホントはわたしだって、死んじやいそうなくらいに緊張してるんだけどね……

「……どうしようっ……いろはちゃん……私、なにをお話すればいいのかな……」

わたしの制服の裾を両手でギュウツと握り込みながらテケテケと付いてくる愛ちゃん。その手も足も超震えてる。

制服がシワになっっちゃうからやめてっ！とも思ったけど、おかげでわたしの震えが誤魔化せるからちようどいいのかもね……

「大丈夫だよっ。まずはわたしの友達ですよっって紹介して、あとは先輩とわたしで適



当に喋ってるから、余裕が出てきたら会話に交ぎってくればいいし、無理そうなら今日はまだ顔だけでも覚えてもらえばいいんでしょ？」

「う、うんっ！……いろはちゃんありがとうっ」

……ダメだ……昨日からずっと、愛ちゃんにありがとうって言われる度に、やっぱり罪悪感が半端ない。

上手く行きっこないし、上手く行って欲しくないと思いながら紹介するのって、思ってたよりもずつとズギズキするんだな……

今日……紹介が済んだらホントのこと言おう！本当はわたしも先輩が大好きなの！って。

愛ちゃんに対する牽制とかじゃなくて、ちゃんと誠実な気持ちで！

……あ、あれ？なんかこういうのって……フラグとか言うんだっけ……？

そしてそんな不毛な思考を巡らせている内にあの場所が見えてきた。

そしてそこには、いつもの見慣れた腐った目の、だらしのない猫背の、ぼつちでキモくてわたしの大好きな先輩が座ってた。

ふう〜〜〜と深く深く息を吐いて、わたしはいつものように甘くあざとく小悪

魔的に、いつもの言葉を投げ掛けるのだった。

「せーんぱいっ！」

続く

一色いろはは久しぶりに夫婦漫才を楽しむつ

「せーんぱいっ」

今まさに惣菜パンにかじり付こうとした所に声を掛けた為、とてもめんどくさそうに視線を寄越してくる先輩。

あ、この先輩はいつ如何なる時であろうともめんどくさそうな視線を寄越してきますけどねー。

「……お、おう」

むむつ、めんどくさいと言うよりは若干キョドってたんですね。可愛い可愛いわたしが声を掛けたから……と冗談はさておき、あの日以来、なんだかんだいつてわたしを意識してくれてるような気もするんだよね。

それがわたしにとってプラスに働くのか、はたまたマイナスなのかはまだ分からないけど。

それはそうとちよつと頬を赤らめたキモ可愛い先輩と目が合った途端に、やつぱりわ

たしも頬が熱くなってしまふ。

イカンイカン！なんか初々しいカップルみたい♪とか思っちゃって、ついニヤケちゃうじゃないですかっ。

しかしわたしと合った目は、すぐにわたしの後方へと流れていった。ん？

……わ、忘れてたあっ!!てか今さっきまで気持ちはその一点に集中してたのに、先輩の顔を見た途端に脳内が先輩一色になるってどんだけなの!?

ん？先輩が一色になる？ちよつとそれいいかもっ……お嫁さんに行くんじゃなくてお婿さんに来て貰うつてのも、それはそれでなかなか……

「……え〜つと……なんかお前の後ろに誰かいんだけど……」

はっ！妄想を邪魔された！てかお嫁さんお婿さん言う前にまずはプロポーズからでお願いします一生涯添い遂げる覚悟は出来てますごめんなさい。

いやいやそんな場合じゃないから！愛ちゃんわたしの背中に隠れずつとプルプルしてるから！

なんかもうアイロンじゃ間に合わないくらいに制服がシワになってそうだよ……

「……あ、えつと、この子はわたしの友達です」

「え？一色って同性の友達居たの？」

「いやいや先輩だけには言われたくないですから。そりや同性の友達は少ないですけどちやんと居ますう！量より質ですよ質」

「友達を量とか質とか言つちやう時点でアレだけどな……で、なんでその友達と昼休みにこんなところに来るんだ？」

そ、そういうば愛ちゃんを紹介しなきゃ！つて事で頭が一杯で、どう紹介しようかとか考えて無かつた〜！

「あー……えつと、あ、そうそう！前からアホでどうしようも無い先輩と知り合いなんだ〜つて話してたら、ちよつと見てみたいつて事になつたんで見せにきましたっ」

小悪魔微笑でピシツと敬礼！

「見せにきたつて……なに？俺は珍獣かなんかなの？」

「先輩なんて珍獣みたいなモノじゃないですかー？」

わたしがいつものように先輩を溢れ出る愛情でからかっていると、制服が弱々しくクイックイツと引かれた。

はてな？と振り返つて愛ちゃんを見ると、それはもう慌てたような表情でウルウルと涙目になって顔をぶんぶんしてた。

「ん？どうしたの？」

わたしが先輩に聞こえないように小声で訊ねると、愛ちゃんに蚊の鳴くような声で超

怒られた。

「いいいいろはちやあんっ！そつ、それじゃまるで私が比企谷先輩を珍獣扱いで見物してきた失礼な後輩みたいになっちやううっ……！」

しまった！つい癖で！……ごめんね愛ちゃんっ……

小声でコソコソ話してゐるわたし達を訝しげに見てる先輩に視線を戻す。

「とー冗談はさておきましてー」

「は、はあ……」

勢いで誤魔化してみましたよ？誤魔化せましたかね。

「友達の愛ちゃんですー。ホラホラ愛ちゃんっ」

わたしはいつまでも背中に隠れっぱなしの愛ちゃんを引っぱりだした。

へっぴり腰でわちやわちやと押し出された愛ちゃんがようやく覚悟を決めたようだ。

「あ、愛川と申ひまひゅっ……！ひや、ひやひやがいやしえんぴやいきよんにちやっ

……」

……な、なんですと？

わたし17年生きてきて、こんなに嘸んだ人はじめて見ましたよ……どうやら比企谷先輩こんにちはと言ったらしい事だけは分かりましたけどもっ。

ってヤバイヤバイ！愛ちゃんがあまりの壮絶な嘸みっぷりに、恥ずかしさのあまりに

沸騰しちやいそうだよ！

ああ、もう泣いちやいそう！

「せ、先輩！愛ちゃんちよつと人見知りなトコあるんですよつ！」

人見知りだとしたらちよつとつてレベルじやない。

「そ、そうか……その、まあなんだ。よろしくな」

……なんとも予想外に、愛ちゃんのあまりのヒドさが逆に功を奏しちやつたみたい  
……

普通ならこんなに可愛い女の子が急にやってきたら、超警戒して超キヨドるハズの先輩が、愛ちゃんのあまりのダメっぷりに逆に冷静になつちやつたみたい！

それどころか、なんとあの先輩が初対面の可愛い女の子に対して、なんかまるで優しいお兄ちゃんみたいな眼差しを向けてるなんて……わたしにだつてたまにしか向けてくれない眼差しなのに……

正直かなり複雑……胸がギユツてなる。

やつぱり愛ちゃんつて先輩のドストライクなんじやないだろうか？

年下の城廻先輩みたいな、女の子になつた戸塚先輩みたいな、そんな素敵な女の子。純粋でドジツ子で恥ずかしがり屋さんの年下の女の子。

超シスコンの先輩が気に入らないワケがないんだよね。

ちよっと胸は苦しいけど、どうやら掴みはOKみたいだよ……？愛ちゃん。

良かったねっ……

「ひ、ひゃあい！よよよろしくおにがしましゅっ……」

……………良かったのか？

× × ×

顔合わせを済ませたわたし達は、並んでお昼をとっている。

先輩に横にズレてもらって、先輩、わたし、愛ちゃんの順番でいつもの場所に座ってるんだけど、愛ちゃんの溢れ出る天使オーラにいくら先輩がいつもよりもキョドって無いにしても、それでも初対面の美少女がすぐ近くで一緒にランチをしている以上、かなり緊張してるみたい。

そして愛ちゃんは言わずもがな。真っ赤になって目をぐるぐるさせてあわあわしっぱなし。

さっきなんてお弁当の仕切りに使われてるアルミのカップごときんぴらごぼうを口



に入れてずっとむぐむぐしてたし、もう危なくって目が離せないっ！

うん……どうしよう？

一応愛ちゃんから目は離さないようにするけど、わたしはせっかくの先輩とのランチを楽しもうかな？

愛ちゃんには悪いけど応援は出来ないってちゃんと宣言したから、わたしが愛ちゃんのためにあげられるのはここまでなんだからね？

……ああつ……それは醤油の入れ物だからあつ……！

「せんばい？今日も焼きそばパンですか？炭水化物IN炭水化物とか意味が分かりませんよねー」

なんとか愛ちゃんの隙を付いていつものようにくだらなくも幸せ一杯のお喋りしちゃいましょう！

「あ？お前焼きそばパンさんをバカにすんなよ？炭水化物に炭水化物合わせるとか、腹ペコな男子高校生には一石二鳥の素晴らしい食い物だろうが。一個食えば二個分の炭水化物が取れるんだぞ？」

「だったらその分二個食べればいいじゃないですか……」

「ばっか、その分昼飯代が浮くだろうが」

「セコっ！そんなんだから女の子にモテないんですよー？」

と、絶賛モテモテ真つ最中の先輩に言ってみる。

「俺がモテないのは他に山ほど問題があるからなワケだから、今更セコいかセコくないか程度で揺らぐような信頼性じゃねえんだよ」

「……どんな信頼性ですか……」

てか今現在、その山ほどある問題を乗り越えて先輩にぞっこんLOVE中の美少女が二人も隣に座ってんですけどね……ホント分かってないな。

はあ……とため息をついて呆れながらも卵焼きをパクリと一口。

「お前、卵焼き好きだな。今日も入ってんのかそれ」

「だから前にも言ったじゃないですかー？自信作なんですよー？つて」

「……ああ、まあ確かになかなか旨かったもんな……」

……な！なんですとー！？先輩が照れながらわたしの料理を思い出して褒めてくれた……！

だ、だめですよせんぱいっ！きゅ、急にそんな風に言われちゃったわたしっ……

「も、もしかしてわたしのこと口説いてます！？はっ！まさかそうやってわたしの料理を褒めちぎって毎日お弁当作らせてやっぱりお前の料理は最高だな俺の為に毎朝味噌汁

作ってくれよとかってありきたりなプロポーズへの流れを作ろうとしてますかいくらなんでも狙いすぎでちよつとというかかなり嬉しいですけどまずはそこへ行くまでの順番を守ってくださいいごめんなさい！」

「…………お、おう」

うう……………またやってしまった……………

もう！先輩ズルいです！反則です！急にそんなこと言われたら、照れ隠しに振っちゃうに決まってるじゃないですかっ！

まったく。人の事あざといあざとい言いながら、ホント自分が一番あざといんだから！

もうっ……………先輩のこのあざとさ、誰かに見せてやりたいって……………って先輩とのやりとりが幸せ過ぎて、その誰かが居たの忘れてたあ！

恐る恐る隣に視線を向けると、愛ちゃんがすっごいびっくりした顔をしてました。

こんなおバカなやりとりを、愛ちゃんは どう見てたんだろう……………は、恥ずかしい……………

× × ×

そんなこんなで無事に（愛ちゃんの）食事が終わり、食後のまったりタイムを楽しんでいる時だった。

……なんかさつきから先輩が超チラチラ愛ちゃんを見てんだけど……

そりや食事中もずっと一言も喋らずに奇行に走ってた美少女の存在が気になるのは分かりますけど、あなたの隣に鎮座する美少女に些か失礼じゃないですかねっ!?

でもやつぱりこのまま全く触れられずにいるのは愛ちゃんも可哀想だし、ちよつと愛ちゃんの為に話を振ってみようかな？

「ちよつと先輩わたしの友達をチラチラといやらしい目で見ないでもらえませんかねキモいです」

どうやらちよつぱりだけイラっとしてたみたいですよわたし。

見られてると知った愛ちゃんが「ひやうううっ」と真っ赤に俯いてしまいました。やばい過呼吸気味！

「なんでちよつと見てただけで変態扱いされなきゃなんねえんだよ……」

やつぱり見てんじやん……バカはちまん！

「そういうんじや無くってだな……愛川、だっけ？なんかどつかで会ったことある気がするんだよな」

「ひえっ!?……………っ!!……………あうう……………」

先輩の急な問い掛けにびっくりして今日先輩に初めて視線を向けた愛ちゃんだが、目が合つちやつた途端にぶううんっ!と音が出そうなくらい慌てて視線を逸らしてまた俯いちゃつた。

もう頭から湯気が出っぱなし!

「ちよつと先輩わたしの友達にマニユアル通りのナンパをするのやめてください変態」  
「……………ナンパじゃねえし。そしてそのセリフの最後に変態つてつける必要あつたの?」  
だつてしょうがないじゃないですか。なんかムカツとしちやつたんですから。

でもまあ先輩如きがナンパなんて出来るワケないもんね。だからホントに会つた記憶があるんだろう。

「あーアレじゃ無いですかー?愛ちゃんはわたしと同じサッカー部のマネージャーなんですよー。前にわたしを探しに来たつて時にでも見たんじゃないんですかねー」

「サッカー部……………あ、そうかあんとき葉山にタオル渡してた女子マネの子か……………」  
ふむ。やつぱそうなんだ。

愛ちゃん可愛くて目立つもんなー。

そして愛ちゃんはなんかちよつと泣きそうな顔して嬉しそう……………そりや片想いの人に覚えてもらえてればねー。やはりあざといな比企谷八幡っ!

でも先輩はまだ納得がいかないみたいだ。「いや……でもな……」と顎に手を充てている。

そして先輩はようやく得心がいったようにハッと顔をあげた。

「なあ、愛川って……文実やってたよな……？」

先輩が古い記憶から手繰り寄せたその解が、まだろくに会話らしい会話も出来てなかった先輩と愛ちゃんの関係性を一気に変える事になるだなんて……わたしはこの瞬間までは全然気付いていなかった。

続く

一色いろははついに空気と同化するっ……

「なあ、愛川って……文実やってたよな……う？」

「……………ひえっ？」

先輩の予想だにしなかった問いに、愛ちゃんがすっごくビックリしてる。

ていうかわたしもちよつと……てかかなりビックリした。

確かに先輩は記憶力がいい。だから一度記憶に残った印象の強い人の事は忘れないだろう。

い、いや、まあたまに忘れるかも知んないけど。クリスマスの際に保育園で出会った怖そうな人のこと、ずっと川……川……川……川……川……とか言ってたし……

だからなんかわたしたしも川なんとかさんって覚えちゃってるんですけど。

まあそれはさておき、基本は記憶力のいい先輩ではあるけど、こと人間関係に関して  
はなんか意識的に覚えられないようにしてんじゃないの？ってフシさえあるんだよねこの  
人。

わたしの事だつて、たぶん奉仕部に来た依頼人だから意識から外さなかつたつてだけの話で、そうじゃない出会いをしたとしたらそこら辺のただの一生徒としか思つてなかつたらうな。

いや、ただの超可愛い一生徒ねっ！

つまり先輩は興味の無い人間、関わりの無い人間の事は敢えて記憶から除外するはずであつて、愛ちゃんの言うように文実の仕事の中でほんの数回会話をした程度の生徒の事なんて覚えてるわけがない。

「ひゃーひゃい……」

愛ちゃんは真つ赤な顔でコクリと肯定をした。

でもこれ以上愛ちゃんから追求なんて出来るはずも無いだろうから、わたしが引き継ごうかな？

てか超気になる！

「人に興味の無い先輩が大勢居た文実の中で、愛ちゃんを覚えてるなんて超珍しくないですかー？もしかして愛ちゃんが可愛いから狙つたりしてましたー？」

おっと、尋問の声が思いのほか素の低さプラス棒読みになつちやつたじゃないですかー。

あれー、おつかしいなあ。別にイラつともカチンともななんとも来てないんですけど



ねー。

「かかか可愛っ！ねねね狙っ……！！あうう……っ」

つとわちやわちやしだしちやつた愛ちゃんは取り敢えずほつときましよーかねー。

まだ尋問が終わってないですからねー、せんぱーい……

「違いえわ……そういうんじゃ無くてだな……」

そして先輩が答えた理由は、本当になってこない理由だった。

ただしなんてことない理由なのはあくまでも表向きなだけで、それを聞いた愛ちゃん本人にとっては、とてつもない程にあざとい答え。

そしてこの場合部外者となってしまうわたしにとっては、とてつもなく歯軋りするよ  
うな答え。

「んな大した理由じゃねえよ。ただ文実がかなりヤバい状態だった時に、他の連中みたいに逃げ出したり投げ出したりしないで、すげえ一生懸命やってくれてる一年生だったからたまたま覚えてたっただけだ」

× × ×

先輩は今の自分のセリフ、『一生懸命やってくれてたから覚えてただけ』の一言がどれ

だけの破壊力を秘めてるのかなんて想像もしてないんだろなあ。

わたしは知ってる。想い人からのその関連の一言がどれほど嬉しいのかを。

ソースはわたし。ふとつい先日 of 進路相談会に先輩が手伝いにきてくれた時の事を思い出した。

『はあ、誰かさんが会長になれて言わなければなあ……』

『鬱陶しい……けど、そう言ってる割りにちゃんとやつてるじゃねえか』

『……ま、まあ、仕事ですから』

……あんな些細な出来事なのに、ちよつとあの時の事を思い出ただけでも胸の奥がコチヨコチヨとくすぐられるみたいにしよばゆい……！

でも……くすぐったいのにとつても気持ちのいい不思議な気分。

えへへ……あの時もくすぐったくて嬉しくつて、もじもじと身を振つてたっけなわわたし。

顔が超熱くなつちやつて、プイツと顔を背けちやつたもんね。

大好きな人に頑張りをしてもらえてること、自分を認めてもらえることつて、どうしようもないくらいに嬉しいんだよね。

隣をチラリと見ると、愛ちゃんは予想通り……どころじやないくらいに幸せそうに二

コニコしてる。

いやもうニコニコというかニヤニヤというか、なんかもう頬が緩み過ぎてとろけちゃいそう……

愛ちゃんは、一人悪者になってまで文実の空気を変えて、周囲から冷たい目で見られて尚、一生懸命頑張る先輩の姿に心奪われたつてのに、実はその先輩に自分の頑張りを見てもらえて認められていただなんて、一体今どれ程の幸福感で満たされてるんだろう。

ま、愛ちゃんの緩み切った顔見たら一目瞭然なんですけどね。

………はあ、マジで羨ましい……

でもこの時……そんな愛ちゃんの緩み切った顔とは対称的に、先輩の顔が苦虫を噛み潰したかのような表情になっていた事に、わたしも愛ちゃんも気付いてはいなかった。

× × ×

「……じゃあな。俺はそろそろ行くわ」

「はっ」

「え……………」

お昼休みはまだ30分以上は残っている。

わたしは…………たぶん愛ちゃんもだと思うけど、今の話の流れからそのまま文実の話で盛り上がるものだと思つてたのに…………あ、や、愛ちゃんの状态的に盛り上がるのは無理かもしないけど、急にその場を立ち去ろうとする先輩にビックリしてしまった。

「ちよつ!?先輩!?なんで急に行つちやうんですかあ!まだお昼休み全然残つてるじゃないですかー!」

そもそも先輩はこの場所から離れたら昼休みに居場所なんてないのだ。

ここで一緒に過ごしたのは一回だけだけど、その時だつてギリギリまでここに居たくせにっ。

「いや、だつて…………なあ?」

「いやいやいや、なに言つてんですか?なあ?つて言われたつて全然分らないですから!……………はっ!なんですすかもしかして長年連れ添つた夫婦のつもりですかツーカーの仲にでもなつたつもりですかまだそこまでの関係性は築けてないのでこれからゆっくりと築いて行きましようごめんなさいっ」

ペコリと頭を下げて両手をビシッと前方に向けてお断わりさせて頂きます!

いや全然断つてませんけどね?

「いやなんでだよ……だって俺が居ちや気まずいだろ」

「は？」

「いやだから愛川が居るんなら、俺は居ない方が良くね？」

「は？」

急になに言ってるのこの人！

やばいつ！ワケが分からず急に拒否されたみたいになつちやつて、愛ちゃんが今にも泣いちゃいそうじゃないですかあ！

アレたぶん泣かないでゝつて慰めた瞬間に大泣きしちやう顔だよつ……

「先輩が存在する事で場が気まずい空気になるなんて今更じゃないですかつ。日常茶飯事じゃないですかつ。なんで今更!？」

「いや酷すぎだろ……さすがの俺でも泣いちゃうよ?……いやだって、文実に居た愛川にとつて、俺つて最悪な嫌われ者じゃねえか。そんな俺が居たら愛川に悪いだろ」

……あ、そういうことか……

そつか……先輩の中では『一色が自分の悪口で盛り上がつて、友達が興味を持ったから連れてきてみた↓いぎ連れて来たら文実だった↓文実な以上、自分の事を知らないワケが無い↓自分の事を知っている以上、嫌われているはずだ↓だったら自分がこの場に

居るのは愛川に悪い』っていう大勘違いな公式になっちゃってるんだ。

なによ……その悲しい公式……なんでもいつも自分が嫌われてるの前提なのよ……

さつきまで泣きそうになってた愛ちゃんは「愛川に悪い」の一言でワケが分からずポカンとしてる。

先輩は立ち上がりこの場をとつとと去ろうとしたのだが………こんなダメでしよ！

確かにわたし的にはこの紹介はこのまま失敗に終わってくれた方が正直ホツとする………

でもこんなのはダメだっ！こんな悲しい誤解のまままでいさせるワケになんていかないつ！愛ちゃんの為にも………なにより先輩の為にも………！

「ちよっ………」

わたしが声を掛けようとした瞬間、それに被せるように意外にも先輩が先に言葉を発した。

「………あー、愛川。今更かも知れんが、あの時はあんなに一生懸命頑張ってくれてたのに、事実をあんな風に最悪な空気にしちまって、その………悪かったな。じゃあまあ、そういう事で………」

………もう………やめてよ先輩………どこまで悲しいこと言うのよ………なんで先輩はいっ

もいつもっ……!!

わたしの中に悲しみとも怒りとも取れない感情が沸々と沸き上がってきて、背中を向けて立ち去ろうとする先輩にこの気持ちをぶつけてやろうとしたのだが、どうやらそれはわたしだけでは無かったみたいだ。

意味が分からずポカンとしてた愛ちゃんが、その先輩の悲しいセリフに覚醒し、先輩の意図に気が付き……そしてなんと……マジギレした……

「………そんな事」

へ?今の愛ちゃんの声!?

それは、いつもぼわんとした優しい声の愛ちゃんとは思えないくらい低い低い声。そして……

「そんなことっ!無あああああいつ!」

ま、愛ちゃんが叫んだああ!?

「うわっ!ビックリした……!」

さっきまで蚊の鳴くような声でしか喋ってなかった愛ちゃんの怒気を孕んだその叫びに、先輩はビックリして振り向いた。

いやわたしも超ビックリしましたよ！

先輩とわたしが超ビックリした顔で愛ちゃんを見つめていたら、その視線に気付いた愛ちゃんが『はあっ……しまったあ……！』って顔して真っ赤になって俯いた。

そしてモジモジと身を振ると先ほどのセリフに小声で一言を付け加えるのだった。

「……………で、です……………」

いや先輩もわたしもビックリしたのは敬語じゃなかったからじゃないからね？

× × ×

俯いちゃった愛ちゃんが立ち直ることおよそ10分。いや長いよっ！

その間、どうしたらいいか分からないわたし達は、ただただ待っていた……

そしてようやく愛ちゃんが重い重い口を開いた。

「比企谷先輩。その……そんなこと無いです……そんな風に言わないでください……」



私、あの時の比企谷先輩の姿を見てすごく格好い……………ひやあああああつ！ちちち違って違ってつっつ！そそそそうじゃ無くって！……………しよっ、しよの……………す、凄いなって！……………思っただけでしゅからっ……………」

「ビ、ビツクリしたあ……………このまま告白しちゃうんじゃないかと思ったよ愛ちゃん!? 思わず格好良いと言い掛けてしまった愛ちゃんは、相変わらずのプチパニツクを起こしながらもなんとか軌道修正した。」

先輩を見ると、こっちはこっちで真っ赤になってるよ……………  
ちよつと!?わたしの存在感がっ！

「……………へ?あ、や、凄いつてなんだ……………?俺はただ空気を悪くしただけなんだが……………」  
「ちっ、違いますっ……………悪過ぎた空気を掻き混ぜて良い方向に持っていっただけでしゅす……………比企谷しえん先輩がたった一人で悪者になる事で……………わ、私ちゃんと見てましゅたからっ……………」

相変わらずカミカミの愛ちゃんだけど、真っ赤に染まりながら、俯きながらも、思いの丈を先輩に一生懸命語る。

「そんな大層なことなんてしてねえよ。ただ苛ついてた気持ちを吐き出して楽になりましたかったってだけの話だ」

「……………嘘です。だったらなんで、悪者になっちゃった後も、居づらいはずの文実に真面目

に毎日来て、それまでよりも押し付けられちゃうお仕事もきちんとかなしたんですか……？全然楽になんてなつてなかつたじゃないですか……」

ヤバい……

「……仕事だからな」

「ただお仕事だからつて、あんなこと出来ないですよ……普通」

ど、どうしよう……

「あんな方法……もし私が思いついたとしても……もしそれで文実が上手く回るつて理解出来たとしても……私には恐くて絶対に出来ないです……」

……わたし、空気が半端ないんですけど……

「あんなに居た文実の人達から冷たい視線を向けられるのなんて恐いです……想像しただけで、私なんか逃げ出しちゃいそうなくらいに怖い……だから、私は比企谷先輩の事が……本気で凄くなって思ったんです……あんなに怖い事を堂々と実行するのに、みんなの敵意が一身に向けられてるのに、それなのになんでもないような顔して、その後も毎日文実で一生懸命お仕事してた比企谷先輩が……本つ当に凄くなって思ったんです……」

あれー？わたし居ますよねー？おーい、みなさーん？

「……だからっ……もうそんな風に言わないでください……比企谷先輩が自分の事をそ

んな風に卑下するのは……その……あの……こんな風に本気で凄くなって、本気で格好い……つっつ！……ちちち違ってつ……とつ、とにかくそんな風に凄いと感じた私に失礼です……ヒドいです……だからもう……そんな風に自分の事を悪く言わないでくださいっ……」

……愛ちゃんの言ってる事は嘘だろう。

「私に対して失礼です」だなんて、これっぽつちも思っていないだろうな。

ただ先輩が自分を傷付けるのをもうこれ以上見たくないから、敢えてその言葉を選んだんだろう。そう言われてしまえば、優しい先輩は愛ちゃんの為に、もうそんなこと言わなくなるから。自分を傷付けるのをやめるから。

愛ちゃんにとってはすごいリスクがあるよね、そんな言い方。

ほぼ初対面に近い先輩に、いきなり「私に対して失礼だからやめてください」なんて言葉を吐くだなんて、それこそとっても失礼な事だし、なんだコイツって思われたって仕方の無い行為だもん。

普段の優しくして真面目な愛ちゃんなら、絶対に選ばない言葉のチョイス。

なんだコイツ失礼なヤツだなんて思われるかもしれないリスクを犯してまで、愛ちゃんには先輩の為に敢えてそう言った。それはまるで、いつも自分を犠牲にしても他人を

助けようとする誰かさんに良く似てる。

ホントに先輩に憧れてるんだなあ……

わたしの偽りだらけだったあざとい笑顔を初対面で一発で見抜いた先輩は、この愛ちゃんの偽りの無い優しさを一発で見抜いた事だろう。

「……そうか。そうだな……スマン」

「ひゃいつ……」

愛ちゃんの真っ直ぐな気持ちに触れて、照れ臭そうに頭をがしがし掻いている先輩と、言いたい事を言い終えて冷静さを取り戻したがゆえに、逆にまた恥ずかしさで囁んじやってわちやわちやしちやつてる愛ちゃんが、二人で向かい合って照れ合っている姿を、今や空気と化したわたしはただ黙って見つめている事しか出来なかった……

続く

一色いろははフラグを回収する……

「ひつ、比企谷しえんぱいは、い、いつもココでお昼やしゅみをしゅごつ……す、過ごされてるんでしゅかつ……？」

「お、おう。雨降ってなきや大体そうだな」

「そ、そうなんでしかつ……きよ、教室とかかはしゅごされな……教室とかでは過ごされないんでしかつ……？」

「……ぼっちは昼休みなんか教室には居場所がないからな」

……

「すすすすみませんっ……！デリカシーの無いしちゅもんしてしまいましたっ……」

「ああ気にすんな。そんなの慣れてるしな。てか俺に対してデリカシーなんてもんを感じて貰えたこと自体が初めてまである」

……

「……ぷっ……はっ!? しゅしゅみませんっ！ わわわ私、笑っちゃうなんてな



「は？」

「ひやああああ！しゅみませんしゅみましえんつ！きゅ急に变なこと言いだしちやつて！あわわわわつ……」

「あ、や、別にそれは構わないんだが、い、いきなり何の話だ……？」

「すつ、すみませんつ！……あの、私比企谷先輩とお話出来る事がもしあつたら……その……じゅつと言いたかつたんれしゅ……です。あ、あの時……実は比企谷しえんぱいのあのセリフに……胸がスツとしたんです……ホントはたぶん私だけじゃなくて、すごく少なかったですけど、あの時あの現場で最初つから真面目に残つてた生徒は……みんなスツとしたんだと思つてます……」

……………

「それなのに、多数派のサボつてた人達の逆ギレの空気が恐いからつて、そう感じてた私達までもがそんな空気に乗つちやうなんて……ホント情けないですよね……」

「……だから気にすんなつたつたろ？あれは俺がやりたいからやつただけだ。あ、も、もう別に卑下してるワケじゃないかな!?……単純に効率良く回す為に取つただけの手段に過ぎないんだから、お前が気にすることじゃねえよ。むしろ全体がその空気になつてくんなかったら、あの行動はなんの意味も無かつたんだからな」

「……………はい……………ううう……………すみませんっ……………自分から言い出したことなのに話が逸れちやいまいゆた……………と、とにかく私が言いたかったのはそういう事じゃなくって、あの時はホントにホントにスツとしたし、ホントにホントに可笑しかったんでしゅっ！……………す」

「そうか……………」

「えへへ……………私もう、あの時笑い堪えるのホント大変だったんでしゅからっ！俯いてプルプルしてたら涙出てきちやいましたよおっ」

「お、おう。ウケてなによりだ」

「もーっ！大体なんなんでしゅかつ、しよの後も『俺とか超犠牲でしよ。アホみたいに住事させられてるし』とか、『これが『ともに助け合う』ってことなんですかね。助け合ったことがないんで俺はよく知らないんですけど』とかって！も、もう私苦しくって死んじゃうかと思っただんでしゅからねっ！」

「ぷっ……………そっか」

……………はっ！！

や、やばいやばい……………あまりの空気っぷりに意識失いかけてたっ！



結局あの後、その場を立ち去ろうとする先輩を引き止めて、元の位置に座り直して残り20分弱の昼休みを過ごしましょうよって話になったんだよね。

そしたら愛ちゃんがすごい頑張って先輩に話し掛けだして、わたしが口を挟む隙が無くなっちゃって今に至るって感じなのです……

て、てかなにこの感じ！なに先輩デレデレしちゃってんの!? バカはちまんっ！

「それに文化祭始まった直後の雪ノ下先輩とのインカムでのやりとりとか、もうホント面白しゆぎですよ。なんですか『俺の存在感のなさを揶揄しているのか』って！その後の『そんなこと言っていないわ。それよりさつきからどこにいるの？客席？』『めっちゃ揶揄してんじゃねえか。ていうか見えてんだろお前』とかもうっ！漫才やってみたくて、思わずすごい勢いでインカム外して1人でうすぐまっつて笑っちゃってたんですよ？」

涙を浮かべながら心底可笑しそうにクスクスと笑う愛ちゃんに、すっごいデレデレな先輩ががしがしと頭を搔きながら反論する。

「いやだつてあれはどう考えても雪ノ下の責任でしょ。つてか良くそんな細かい事まで覚えてんな……恥ずかしいんで忘れてくんね？」

「えへへっ♪無理ですっ」

「……さいですか」

どうしよう……つ、つらいよお……

× × ×

その後も時間一杯まで愛ちゃんと先輩のイチャイチャ（怒）トークは続いた。

愛ちゃんは相変わらず真つ赤になりっぱなしでチョコチョコ噛んではいたものの、少しずつ普通に戻れるようになってきたみたい。

大好きな憧れの比企谷先輩との会話に浮き足だつてたけど、次第に先輩のお兄ちゃんみたいな優しく温かい視線と空気に落ち着いてきたんだろうね。

その間、わたしは一言も発せなかった。

なんだろう、この感覚……すごい既視感……でも、その既視感がなんなのか、気付きたくない気がする……

そして一人空気のなか予鈴が鳴り、ようやく今日の昼休みの終わりを告げてくれた。

いつもならホントのギリギリまで先輩と一緒に居たいのに、今はここから早く離れたくて仕方がない。

なにこれ……？わたしってこんなにメンタル弱いのか？

「……ではでは先輩、五限に遅れちゃうんでわたしもう行きますねー」

なんか数年ぶりに声を出したかのような感覚がわたしを襲う。

「おう」

「わわっ……じゃ、じゃあ私もししし失礼しますっ」

愛ちゃんは何と頭を下げてぱたとわたしを追い掛けてきた。

なんか……わたし愛ちゃんの邪魔してるみたいじゃん……

「あっ……あ、あのひびひ比企谷しえんばいっ！」

そしてわたしに追い付く前に愛ちゃんは振り返り、先輩に向かって爆弾発言をしたのだ！

「わわわ私っ！け、結構ここでお昼ごはん食べるの、しゅしゅしゅしゅきかもでしゅっ！………や、へへ変な意味とかじゃにやくって、そのっ、外で食べりゆのが気持ちいいと言いますかにやんと言いましゆか………っ！………そのっ！………ま、またお昼にここに来ても良いれしよーかつっ………？」

なっ！なんですとおっ！

ま、愛ちゃん！急にそんなに積極的になるのっ？

で、でもっ！でも先輩は基本食事は一人で食べる派だっって言って……

「ま、まあ別にここは俺専用の場所ってワケでもねえしな………来たけりや自由にしたらいいんじゃないの………？」

ぐはっ！マ……マジですか……!?

「ひやつー！ひゃいっ………そ、それではまたっ！し、しちゆれいしまちゅっ！」

もう一度ペコリと素早くお辞儀すると、愛ちゃんは「ひゃあああ………」と小さく悲鳴をあげつつ、両手で頬つぺたを押さえて走ってきた。

わたしの隣に並んだ愛ちゃんは涙目なのにペロツと舌を出しつつ、「うひゃあ……えへへ……や、やつちやつた……っ」と一言。

でもその声も肩もすぐく震えていた。

わたしは素直に感心してしまう。よくこんな状態でこんなに頑張れるなあ………つて。………わたしは、今こんな状態になっちゃったけど、これから頑張れるのかな………

× × ×

先輩のベストプレイスから一年生の教室へと向かう道すがら、わたしは思いを巡らす。

正直に言おう。わたしは………高を括っていた。

わたしの方が先に先輩と知り合ったし、わたしの方が先に先輩と絆を築けて、わた

しの方が先に先輩を大好きになったんだもん。

だから、いくら愛ちゃんが先輩好みの女の子だからって、わたしは負けるはず無いって思ってた。

あくまでもわたしのライバルは雪ノ下先輩と結衣先輩であって、三番手ではあるけど、伏兵は伏兵なりの戦い方をして頑張つて、いつか先輩を手に入れてやる！って思ってた。

だから平気で……平気では無かったけど……愛ちゃんを紹介出来たんだ。

純粋な愛ちゃんに純粋な気持ちで応えてるつもりでも、やっぱり心のどこかにはそんな慢りがあつたんだと思う。

でも、現実は全然違つたんだ。

わたしの方が先に知り合つた？先に絆を築けた？先に大好きになつた？

バカじゃないの？……現実全部、愛ちゃんの方が先だつたんじゃない……

わたしが先輩に会おう前から、愛ちゃんは先輩に会つて、先輩に認められて、先輩に惹かれてたんだ。

ああ……さっきの既視感、気付いちやつたよ……

あれは、わたしがどんなに頑張つても割り込めないと感じた奉仕部の空気じゃん……

先輩が熱い気持ちを吐き出して奉仕部が崩壊を回避した直後、職員室で平塚先生に  
デイスティニー。パSPORTを貰った時のあの三人の空気と一緒。

新学期迎えた後に何度も出入りした奉仕部で、三人の輪にわたしには割り込めない  
なあ……つて感じた疎外感と一緒。

それでもわたしは頑張った。なんとかその輪に食い込んでやろうって！わたしとい  
う存在を刻みつける為に爪を立ててやろうって！

そして最近、ようやく一筋の光明が見えてきた気がしてた。

藻掻きまくって、ようやくわたしを先輩の心に刻み込め始められたと思ってた。

「いろはちゃん」

だから、だからこそ先輩に対する想いにもう立ち止まらないだなんて思えたのに。

そこに来ての……そこまで来てのこの疎外感。

それも、今日がほとんど初対面みたいな愛ちゃん相手に……

わたし、もう一度あの疎外感と戦わなくちゃなんなの？

一度目は必死に藻掻いて頑張ったけど、もう一回って言われたら、さすがに心が折れ

そうだよ……先輩。

「いろはちゃん？」

ああ……気付きたくなかったな、あの既視感に……

× × ×

「いろはちゃん？」

「はへっ？」

うっわ！思考が泥沼にハマってる間に、いつの間にか愛ちゃんの教室前まで到着して  
たみたい！

わたしとんだけ考え事してんのよっ！

「わっ、愛ちゃんごめんごめん！んじゃあねっ」

D組に到着したわけだから愛ちゃんとバイバイしようとしたところ、愛ちゃんに呼び  
止められた。

「どうしたの？」

そのまま自分のクラスに帰ろうとしてたわたしが振り返ると、愛ちゃんはすつと居住  
まいを正し、とてもとても真っ直ぐな瞳でわたしを見つめる。

「……いろはちゃん……今日は本当にありがとうございました。私、ちゃんと比企谷  
先輩とお話出来てホント良かったっ……ま、まあ噛み噛みすぎてちゃんとお話出来た

かどうかは疑問なんだけどねっ……あく恥ずかしかったあ……えへへっ……」

あまりにもヒドすぎた壮絶な嘔みっぷりを思い出しちゃったのか、愛ちゃんは真っ赤になつて頬つぺたをポリポリする。

「恥ずかしかったし情けなかつたけどっ、でもホントに良かった……！ やっぱり……比企谷先輩はとつてもとつても素敵な人だったっ……」

言いながら俯いてもじもじとスカートをギユツと握ったりリボンを弄ったりする愛ちゃんだけど、「んっ！」と自分に気合いを入れて、もう一度わたしをしっかり見つめる。「だからホントにありがとう！ 私、頑張るっ！……雪ノ下先輩とか由比ヶ浜先輩とかあ、あとは……」

言い淀んで、一瞬複雑な表情をした愛ちゃん。どうしたのかな？  
でも顔をぶんぶんしてから言葉を紡ぐ。

「とにかくっ……私頑張るからっ……勝ち目なんて無いの分かってるけど、でも頑張るからっ……だから、だから私……負けないうっ……！」

そこまで言い切ると、とてとてと教室へと入っていった。

……負けない、かあ。



雪ノ下先輩も由比ヶ浜先輩も超超強敵だよ？

あはははは……その上わたしにはさらに超強敵が出来ちゃったから、なんかもう負けちゃいそうだよ……

頬も耳も真っ赤に染めて教室へと掛けていく愛ちゃんの背中を見てた時、わたしはふとあることを思い出した。

「……あつ」

そういえばわたし、先輩に紹介し終わったら、本当の気持ちを愛ちゃんに伝えなきゃ！とかつて思ってたんだった。

こんなの、もう伝えられるわけ無いじゃん……

「あくあ……こんなこと香織に話したら、フラグ回収職人乙！とかつてワケ分かんないキモいこと言われちゃいそうだなあ……」

そんな自嘲気味な独り言をボソリと呟きながら、わたしはたぶんふて寝確実な五限へと向けて、重い重い足をゆっくりと運ぶのだった。

続  
く

一色いろはは決意をするも間が悪いっ

「むう……………むうっ！」

自室のベッドでうつ伏せに寝転んでジタバタしながら拗ねているわたし。

……………はあ、まさかこんなことになるなんてなあ……………

結局あのあと、放課後は奉仕部にも行かずサッカー部にも顔を出さずにいじけて帰ってきちゃったワケだけど、むう……………

なんですかなんなんですか先輩のバカ……………

あんなにデレッツデレしちやってさー！

今まで先輩のあんなにデレた顔、戸塚先輩の前くらいでしか見たこと無いですよ……………いや、それはそれで異常事態なんですけれども。

それにしても愛ちゃん凄かったな。あんな状態なのに、あんなに頑張って積極的に攻めまくるんだもんな。

アレだったら、あと数日後に迫ったバレンタインでも頑張つて告白出来ちゃうんだろ  
うな……先輩、なんて答えるんだろ？

さすがに告白に応じる事は無いだろうなんて、なんの根拠も無く樂觀視してたけど、  
あの様子見ちゃうとそんな自信は陽炎みたいにすうつと消えていった。

わたしは起き上がり、机の一番上の引き出しに大切に大切にしまいこんだプリクラを  
取り出した。

ホントはいつも一緒に居られるように鞆とか携帯に貼りたいんだけど、それはいつか  
ちゃんと気持ちを伝えられた時のご褒美の為に我慢しているのだ。

だったらこんな風にちよくちよく見んなよつて話なんですけどねー！

汚れちやわなないように透明なフィルムに包んだソレを見つめながら、今度はゴロンと  
仰向けになった。

わたしの手の先ではプリクラに写った先輩が、わたしに急に抱きつかれて真っ赤に固  
まってる。

えへへ……かあいーなあ♪

「……せんぱーい……わたし、どうしたらいいんですかねー……」

わたしがいくら問い掛けても引きつって固まっている先輩はなーんにも答えてはく

れない。

「ふう……いじわる……」

我ながらバカみたい。

こういう人に見せられないようなちよつぱり恥ずかしい行為が、よく先輩や香織辺りのオタク系の人達が言うところの黒歴史つてやつに変わっていくのだろうか。

「はあ、苦しいなあ……わたし、先輩になんか出会わなきゃ良かった……」

× × ×

そう。わたしは先輩に出会って、そして先輩の心に触れて本物つてものを知った。

今のわたしからすれば、もし先輩に出会わなかったら……もし先輩のあのセリフを聞いてなかったら……つて考えただけでもゾツとする。

それ以前のわたしは本当に何にもない、つまらない空っぽの偽物だったって自覚があるから。

自分が偽物だなんて事にも気付かないで、恋に恋して可愛いわたしを作って偽物の笑顔振りまいて、そんな可愛いわたし、みんな（男限定☆）に愛されるわたしに満足し

ていた。

そう。逆説的に言えば、先輩に出会わなければわたしはあのままのわたしの人生を面白可笑しく、なんの疑問も持たずに送っていたのだ。

あざとい笑顔を振りまいて、適当に都合のいい男と遊びに行つて、ごはんだけだつて映画だつて好きだけ奢つてもらえたし、その一方でみんなの人気者の葉山先輩に恋したつもりになつてアタックしまくつて、毎日ヘラヘラと過ごしていたはずなのだ。

男なんてこの可愛い一色いろはにとつてのステータスに過ぎない。可愛いわたしをさらに着飾る為のアクセサリ。

そんな風にあたりまえのように考えられていたほんの数ヶ月前までは、あんなに毎日が楽しかった。

辛いとか苦しいとかなんて、全然考えた事も無かった。

確かに先輩に会わなきゃ空っぽの中であの頃のわたしなりに幸せになれてたかもしれない。だから出会わなきゃ良かったってホント思う。

でもね？でももう手遅れなの……もうあなたを知ってしまったから。

先輩に出会ってしまった。心を感じてしまった。

心の底から、本物が欲しいと思ってしまった。

……どうしてくれるんですか先輩！

もうそんな薄ら寒い人生なんてまっぴらにさせられた、もうあんな薄っぺらくて偽物の人生になって二度と戻りたくないって気持ちになってしまった今のわたしに、先輩はどう責任をとってくれるんですか！？

辛い？苦しい？

この一色いろはを舐めんなあっ！

今のわたしには、その辛さだって苦しさだって、先輩に関わる事であれば、本物に関わる事であれば、どんなことだってわたしの心のステータスになるんだから！

だから苦しくたって辛くたって諦めたりなんかしない！ちよつとだけ逃げちゃうことはあるかもだけどっ……

わたしあの時、二人っきりのモノレールの中で先輩に言いましたよね？

『先輩のせいですからね、わたしがこうなったの』

『責任、とってくださいね』

わたしが今までのわたしで満足出来なくなったのは全部せんぱいのせい。

今までのつまらないわたしをかなぐり捨てて、泣いたり苦しんだり無様に本物を追いかめるようになってしまったのも全部全部せんぱいのせい。

「だから……誰がなんと言おうと……」

そしてわたしは、他に誰が居るワケでもない、誰が見てるワケでもない一人っきりの部屋なのに、口を歪ませてとびっきりの小悪魔笑顔になるのだった。

「責任……取ってもらうんだからっ♪」

よしっ、差し当たって出来る事といえば……

「早く寝よっ」と

この戦いが終わったら、絶対先輩に告白するんだ！

わたしはまた余計なフラグを立てつつ、明日からの負けられない戦いに向けて眠りに落ちるのだった。



× × ×

「ふああ、ねむっ……」

現在朝の五時。別にお婆ちゃんなわけでは無いのですよっ！

わたしはいつもより早く起きて、いつもより気合いの入ったお弁当を先輩に作ってあげるのだ。

今日のお弁当の品目は、先輩が美味しかったって言ってくれた玉子焼き。

あとは男の子が大好きな定番のからあげとハンバーグ。しょうが焼きなんかも入れちゃおうかな？

あ、でも色合的に地味になっちゃうかなあ……地味さを誤魔化す為にミニトマトと入れたら先輩的にポイント低くなっちゃうしなー。

よしっ、ハンバーグじゃなくてロールキャベツにしよう♪

デミグラスで軽く煮込んだロールキャベツとか出せば、超手が込んでるように見えるしね。

腕まくりをしてペロリの舌なめずり。愛用のエプロンの紐をキュツと締めて、わたしは女の戦場へと赴くのである！

「今日も美味いぞっ、いろは☆って言わせちゃうぞっ」

× × ×

「……………」

四時限目の終了のチャイムと同時に教室を飛び出そうと思ったのだが、運悪く四時限目の数学担当の教師にプリントを集めて職員室に持っていくようにと命じられ（これでも一応生徒会長なんで、こういう場合に文句とか言えないんですよ……）、ちよつと遅れて先輩の待つベストプレイスに到着した頃には……………すでに愛ちゃんが先輩と楽しそうにお喋りしていた……

マジで……………？確かに愛ちゃんはまたお昼に来てもいいですか？って言ってたけど、まさか翌日に来るなんて……

って言ってもバレンタインは来週の月曜日。木曜日の今日にでも頑張らないと、バレンタイン前に一緒に過ごせるチャンスは明日のお昼だけになっちゃうもんね……………くっそー……………迂濶だったあ……………

まだ距離があるから何を話してるのかは分からないけど、遠目からでも愛ちゃんが真つ赤な顔して相変わらずトチリながらも、身振り手振りで一生懸命話してるのが伺える。

そんな愛ちゃんに戸惑いながらも、時折あの優しそうな眼差しを愛ちゃんに向けている先輩。

こつ……これは入って行けないっ……いくらなんでも無理です……

そもそもまだ愛ちゃんにホントのこと言えてないから、愛ちゃんが居る前でこんなに気合いの入ったお弁当とか渡せるわけ無いしっ！

せつかく早起きしてお弁当作っただけ、ここは戦略的撤退しかなさそうです……  
 ゆうべあれだけの決意をしたのに早速逃げちゃうのかよわたしっ。

で、でもちよつとだけ逃げちゃうかもって言ったし……！

明日のお昼こそ一緒に過ごすんだからっ！

いやいや、それよりもまずは今日の放課後！ちよつと行き辛くて避け気味だった奉仕部に顔を出して一緒に過ごそう。

………はあ、早く教室帰ってヤケ喰いしよつと……

× × ×

放課後。

わたしは奉仕部へと向かう為に荷物をまとめる。

「ありや？いろは今日はサッカー部行かないんだー。生徒会？」

「え……？あー、うん。そんなとこー」

「へえ……そんなとこねー。なんか今日の昼休みもいきなり居なくなっただと思つたら、とつとと帰ってきてて弁当二つもヤケ喰いしてるし、最近私の友達のいろはさんは一体なーにやってんだかねーっ」

「ぐっ……なにその腹立つニヤつき顔っ……ま、まあ今はまだ負けられない戦いがそこにはあるー！とだけ言っておきますかね……い、いずれねっ?!この戦いが無事に終わつたらちゃんと話すからっ」

「………いやそれ死亡フラグだから」

ウ、ウザイなこいつ……やつぱりフラグやらなんやらキモいこと言われちゃったよ……

余計な一言を言う友達に若干のイラつきを覚えつつ、一杯過ぎるお腹を押さえながらわたしは勇んで教室を後にした。

奉仕部に着いたら何しよう。

もう猶予も余裕もゼロなんだから、雪ノ下先輩達からの恐ろしい視線なんてこの際知つたこつちやない！

雪ノ下先輩に視線で殺される覚悟でいつそ告つてやろうかつ……いや、でもまだ愛ちゃんに本音も言えてない段階で先に告るなんてヒド過ぎる。

だったらバレンタイン前の土日のどっちかにデートの約束を（無理矢理）取り付けてやろうっ！

その上で明日の部活で愛ちゃんに本音を話せばいい。

バレンタインにチョコ渡して、告白する気まんまんの愛ちゃんに今さら本音を言うのは正直気が引けるけど、恋はバトルだもん！絶対負けられないっ！

「よしっ！」

決心がついた気合い一杯のわたしの足取りはとても力強く、もうなんの迷いもなく前へと進む。

なんならホントにこのまま告白だって出来ちゃいそうな勢い！

よーしっ！やるぞー！

「一色！ようやく捕まえたぞっ！」

「……へっ？」

わたしの細腕を物凄い力でガツシリと掴む手。

そこには般若の如きアラサー独身女性が一人。

「ひ、平塚先生……ここ、ここにちは」

「ああ、こんにちは一色。……ではないっ！なぜ昨日生徒会に来ないで帰ったのだ！前々から約束してあっただろう！」

や、約束ってなんのことでしたっけ……？

「まさか君は忘れてるわけでは無いだろうな？前々から何度も提出しろと言っている送辞はどうなっているのかね！提出期限は昨日だぞ！」

「……………わわわ忘れてたあっ」

な、なんてこった……最近色々ありすぎてすっかり忘れてたあ……

「まったく……そんなことだろうと思つたよ……もう来週から卒業式の諸々の準備も始まるんだぞ……」

やつばい……！今は送辞どころではっ……！

「ふう、まあいい。こんなこともあるうかと、答辞を用意する城廻に手伝いをお願いしておいた。送辞以外にもさんざんサボり倒した雑務も諸々残っているからな。今日明日は放課後も朝も昼も生徒会室に缶詰めになると覚悟したまえ！」

う、嘘でしょ？

まさか今まで散々サボり倒して来た生徒会のツケが、こんな時にこんなタイミングで

降り掛かってくるだなんてっ……

……………はッ!! だったらこんな時こそちようど先輩に……

「言っておくが今回ばかりは比企谷に頼るのは無しだ。ふふふっ……仕事が終わるまでは奉仕部に行くのは禁止だぞっ?」

そしてわたしは、ニツコリと青筋を立てるアラサー独身女性に無理矢理引きずられ、その日はもちろんのこと、翌日の朝・昼・晩と、たつぷりと生徒会室に缶詰めにされたのでした……

こ、これが社畜というやつか………先輩に会えないまま、愛ちゃんにも本音を打ち明けられないまま、今週が終わっちゃったよ……

続く

# 一色いろははついに決戦の朝を迎えるっ

「……居るワケ無いよなあ……」

2月12日土曜日の今日、私は千葉駅周辺を彷徨っていた。

以前先輩を連れ回したデートコース・ゲームセンターやラーメン屋さんの前をウロウロしたり商業施設内の中に入ってキョロキョロしたり、はたまたデートコースでは無かったものの先輩がひよっこり現われそうな本屋さんを何店も巡ってみたり。

フィクションじゃないんだから、街で偶然想い人に会えるなんて事がそうそう起きるわけは無いんだけど。

朝から、もしも会えたらたまたまを装うつもりで何時間も徘徊しているわたしの行為が偶然の出会いと言えるのかどうかは疑問なんですけどねー。

てかそれはもう偶然でもなんでも無いですね。

「はあ……そもそも先輩が休みの日に外出すること自体が超レアだもんなく……」



木曜日と金曜日によって生徒会室に完全に監禁されたわたしは（ごめんなさい自業自得です）、バレンティン当日までの間に少しでもアタックを掛けてやろうという目論見が外されてなかなか焦っていた。

まさかあんな決意をした途端に、バレンティン当日まで先輩に会う機会が巡ってこなくなるなんて誰が予想していたのでしょうか？ 神様酷いよっ!?

せめて当日までもう一回くらいは先輩に会いたかったけど、目的が目的なだけに結衣先輩に先輩の連絡先を聞く事なんて出来ないから、藁にも縋る思いで千葉まで出てきたはいいけど、そんなに上手く行くわけなんか無いのだ……

それでもほんのわずかな奇跡に望みを乗せて、今日何度目かも分からない本屋さんをウロウロキョロキョロしてみる。

わたしのこの姿は店員さんに何度も目撃されてるだろうし、これ先輩がやってたら完全に通報モノだよな。

先輩が職質を受けてキョドってる姿を想像して、こんなときだつてのについニヤニヤしてしまふわたしは、本当に恋する乙女やつてるんだなあつてついつい実感してしまふ。

おっと、さらに余計にニヤつきがとんでもない事になっちゃった！ わたしが通報されちゃうからっ。

はあく……ホントこれがドラマとか少女漫画とかだったら、本屋さんの狭い通路ですれ違うお客さんの肩がぶつかったりして、「あつ……す、すみません」なんてお互いに顔を見合わせてみたら、そこには今一番会いたい人がつ……!

なーんてフィクションなご都合主義展開が待っててくれるんだけどなあ……なんて馬鹿な事をぼーつと考えていた時だった。

どんつ!と肩に衝撃が走った。

え……嘘でしょ?マジで?

そそそそんなことホントに起きるわけ無いじゃんつ!何!?わたしって物語のヒロインになつちやつたの!?奇跡が起きちやつたの!?

「あ、すみません……つて、あ、あれ?」

謝りながらも疑問符を付ける男の人。

わたしは軽くパニックになって真つ赤に俯きながらも、ゆっくりと顔を上げてその男の人へと期待の眼差しを向けた。

「つべー!やつぱいろはすじゃんつ!休日こんなところで偶然会うなんてマジミラクルつしよ!マジパないわー」

「……………」

「どうやら奇跡は起こらなかったみたいです。」

× × ×

「完全にやる気を削がれたわたしは、即帰宅した自宅にてお菓子作りの本とにらめっこしていた。」

「んー。なに作ろっかなー」

「とどのつまり、今わたしに出来る事といえば、明後日のバレンタイン当日に先輩に最高の贈り物をして、そして想いを伝えることだけなのです！」

「変に夢を持って街に繰り出したってしよーがない。先輩の連絡先を知らない以上は、あとは本番で当たって砕けるのみ！」

「ううっ……………く、砕けたくないよおっ……………」

「とにかく今日は一日無駄にしちゃったから、明日は精根込めて、想いが届くように愛情がたっぷり詰まったチョコレートを作ろうっ。」

「去年までは愛されいろは用に作ってた義理チョコなんて、今年はひとつだって作らな」

い。

奉仕部のこと、愛ちゃんのこと、あの愛ちゃんのお昼休み以来先輩に会えてないこと、ここ最近なんか間が悪くて嫌な予感しかしないこと………ホントは頭が破裂しちやいそうなくらい考えちゃうことは一杯あるけど、もう今さら考えたって仕方ないことばっかだもん。

だからもう余計な事なんて考えないで、本番の明後日までに残された僅かな時間はチョコレート的事だけ考えよう。

「甘っ……」

先輩の大好きなコーヒーをちびちび飲みつつ、わたしは気持ちを集中させるのであった。

ん！このコーヒーも使ってみよっかな♪

結局残された日曜日を使って、わたしはわたしに出来る最っ高のバレンタインセツトを作り上げた。

ナッツたっぷりチョコブラウニー・ふわふわしっとりチョコマフィン・お口でとろけるトリュフチョコ・チョコクッキー&MAXクッキーの豪華詰め合わせセツト。

全部お店で出せるレベル！味見したら超美味しかったんだからね、せんぱいっ！

わたしはベッドに腰掛けながら、枕元に置いた超可愛くラツピングしたお菓子詰め合わせを優しく撫で、そつと瞳を閉じて先輩に出会つてから今日までの事を思い出していた。

ロマンもなんにもない酷い出会い。

まんまと乗せられた生徒会役員選挙。

初めて先輩の優しさに気付いたクリスマスイベント。

突き刺さるような寒さの薄暗い廊下で聞いてしまったあの熱い言葉。

偽物の恋に決着をつけた二人きりの帰り道。

初めてのデート。そして初めてのキス……

まだたつたの二ヶ月ちよつとのはずなのに、わたしの今までの人生の中で一番の、大事な思い出がたくさん詰まつた掛け替えの無い大切な大切な時間。

心臓が爆発しそうなくらいにドキドキして、顔が燃え上がつちゃうんじゃないの？ つてくらいに熱い。

わたしは明日……………せんばいに想いを告げるんだ。

× × ×

2月14日。運命のバレンタイン。

正直緊張であんまり眠れなかった。

いつもよりもずっと早く目が覚めちやった真つ暗な朝は、冬の張り詰めた空気そのままに、新聞配達バイクの音以外はしんと静まり返っていた。

くまとか出来ちやってないかな？疲れた顔してないかな？

今日は、最高のわたしで先輩の前に立ちたい。朝から鏡とにらめっこして、可愛いわたしを磨き上げる。

どんなに可愛いく作り上げたってあの先輩には全く通じないんだけど、それでもわたしはわたしに自信を持って運命に臨みたいから。

自慢の亜麻色の髪を可愛くセット。

震える指先でマスカラを充て震える指先でリップを塗る。

ネイルもメイクもあくまでもナチュラルに。そっちの方が先輩は好きだろうから。

今からあんまり気合いを入れても、どうせこのあと部活で乱れちゃうのは分かっているよ？

でも、女の戦いはもうここから始まっているんだよ。

だからわたしはわたしを磨き上げる。

いつ愛しいあの人に見られても恥ずかしくないように。目を逸らさずいつでも最高の笑顔を向けられるように。

さあ行こう！一色いろは！

わたしの戦いはここからだっ！

× × ×

「おー！いろはすおはよー！今日は朝からなんか気合い入ってね？」

「おはようございますっ！戸部先輩っ」

こんなに大事な日の今日に、朝からマネージャーなんてやりにきたのは他でもない。愛ちゃんにわたしの気持ちを伝える為。

昨日とかに電話なりメールなりしたって良かったんだけど、やっぱり直接向き合って話したいからね。

真正面からちゃんとわたしの気持ちをぶつけて正々堂々今日の戦いに臨みたい。

愛ちゃんも今日に向けての心の準備は済ませてきたのかな。緊張しすぎて大変な事になつてなきやいいけど。

たぶんあの子はお昼休みに告白するんだろうな。あの場所です。

わたしは？いつチョコ渡せばいいんだろ？

やっぱりフェアに愛ちゃんのと？でもそしたらもう手遅れって可能性だってあるし、お昼休みのあとって言ったなら放課後しかない。

せめて先輩が奉仕部に行く前には渡したいし、だったら愛ちゃんと一緒にお昼休みに……って手もあるんだよね。

でもそれじゃ愛ちゃん迷惑だろうなあ……

とか色々考えてたら戸部先輩から声が掛かった。

「いろはすー。そういえば、まなつちはまだ来てないん？俺ら選手よりも先に来てないなんて珍しくね？」

「……えっ？愛ちゃんてまだ来てないんですかっ？」



いつも真面目で一生懸命な愛ちゃんは、誰よりも早く部室に来て、みんなが来るまでの間に諸々の準備をしておくてのがいつものパターンなのだ。

わたしは部活をサボり始める前は毎日ちゃんと朝練に参加してたけど、愛ちゃんが先に来て無かったことなんて一度もなかった。

もしかして昨日チョコ作りに苦戦して寝坊とかしちやつてるのかな？

それとも緊張し過ぎてわちやわちやパニックで、どつか知らない町まで電車に運ばれてつちやつたかな……？

愛ちゃん……普段は超しっかり者なのに、いざ先輩が絡むと途端にポンコツになるからなあ……どつちも有り得過ぎて怖い……

「まあまなつちは珍しいとして、なんかアレじゃね？いろはすー！……なーんか最近疲れちやつてつから、今日は甘いもんでもチョコつと食いたい気分じゃねっ？」

まあさすがに今日はしようがないかあ。愛ちゃんなんてわたしより頭の中ぐちゃぐちゃだろうし。

先に用意とかしとけば今に来るよね。

少しでも作業進めといて、愛ちゃんが来たときに少しでも時間が取れるようにしとかなきゃねっ！

「いろはす？あれ？チ、チョコつとさ？ちよ！？いろはすー？無視はないわー……」

わたしは他の二人の女子マネなんかには一切意識も期待も向けずに作業を進めた。  
え？戸部先輩？だれそれ。

そしてそうこうしてる内に葉山先輩も他の選手たちも到着して本日の朝練が着々と進行していったのだが………

結局……その日は愛ちゃんが朝練に顔を出すことは無かった……

続く

## 一色いろはと愛川愛

朝のSHRが終わり一限になっても、わたしの心は酷くザワついていた。

愛ちゃんが朝練に来なかった。それだけで通常では起こりえない異常自体なのは間違いない。

朝練が終わって教室に向かう時にチラツと隣の教室を覗いてみたけど、愛ちゃんはまだ来てなかった。

どうしたんだろう……？まさか事故？

んーん？それは無いか。それだったら学校にすぐにも連絡くるから、部活にだって至急連絡が来るはずだもんね。

だとしたら……

と、校内にチャイムが鳴り響く。気が付いた時には、どうやら一限が終わっていたらしい。

それでもそのまま考え込んでいると不意に肩をトントンとされた。

「あのく、一色さん……お客さんだよ?」

クラスの子に遠慮がちに声を掛けられて振り向いた扉の先では、愛ちゃんがニコニコと手を振っていた。

× × ×

「いろはちゃん、ごめんね? 今日急に朝練休んじゃって……」

わたし達は今、人気の無い特別棟の階段の踊り場へと向かっている最中だ。

愛ちゃんがあんまり人の来ない所でお話したいって言うから。

「あ、うん……びび、ビックリしたよー。愛ちゃんが突然サボるなんて超珍しいから……」

「へ? サボる? 私、朝戸部先輩に今日は休みますってメールしたんだけどなあ……」

戸部ええ……

「……そういう時は戸部先輩じゃなくて葉山先輩に連絡した方が良くない!? 戸部先輩じゃあ……」

「えへへっ……私葉山先輩の連絡先知らないんだよね。ほらっ、あの子達のガードが固くってさっ。入部当初に一応聞いと思うたらすすごい睨まれちゃってやめ

ちやつた！」

「テハツとする愛ちゃんだけど、そういう時は怒りなさいよ……つたくあの女どももつ！  
「うー……それにしても酷いよ戸部先輩……私今日無断休扱いになつちやつてる  
のおつ？」

「ぶんぶんつ！と頬を膨らます愛ちゃん。

「なんだか……普段よりもずつとテンションが高い……」

「まあちゃんと伝わったか確認しなかった私が悪いんだし、サボりみたいなものだし、仕方ないよね……」

「そして休み時間になんて誰も来ないであろう特別棟の階段の踊り場に到着した途端に、ずつと言いたくて我慢してたのだろう愛ちゃんが、なんの前置きもせずにいきなり告げてきた……」

「……いろはちゃん……えへへへ……私……振られちゃつた……つ」  
「…………愛ちゃん」

「気丈に振る舞っていた愛ちゃんは、その瞬間ずつと張り詰めていた気持ちを緩めたんだらう。」

「ボロボロととめどなく涙が零れ落ちる。」

「えへへっ……ひっ……ひぐっ……わ、私ねっ……？駐輪場でっ……朝からずっと、待っていたのっ……誰よりも早くっ……比企谷先輩につ……チョコっ……わだしたかったからっ……」

「愛ちゃん！……無理しなくつてもいいからっ……」

「でもねっ……ひぐっ……わがつてたけどっ……分かってたことなんだけどっ……ひっ……やっぱり……私、あはは……ふ、振られちゃったよおおっ……ひっ……ひぐっ……ふえ……っ……ふえええええっ……！」

崩れ落ちそうになる愛ちゃんを抱き止めて、ギョツと抱き締める。

ずっと我慢していた足枷が取れたかのように、子供みたいにわんわんと泣きじゃくる愛ちゃんの声が、誰も居ない特別棟に響き渡っていた……

× × ×

私はなんとなく分かっていた。

愛ちゃんが教室に来た時のニコニコな笑顔を見て。

ここにくるまでの無駄にテンションの高い愛ちゃんを見て。

だってその笑顔は偽物だったから……

そしてわたしは愛ちゃんのその偽物の笑顔を見た瞬間………心のどこかでホツとしてしまっていた。わたし、最悪だ……

ひとしきり泣き続けた愛ちゃんがようやく落ち着いてきた頃には校内に予鈴が響いていた。

「つ……ぐすつ……ごめんね？いろはちゃん……ホントはもつとお話したいことあったんだけど、もう行かなきゃねつ……ありがと、もう大丈夫だからっ……」

抱き締めるわたしの腕をほどき、慌てて教室に戻ろうとする愛ちゃんを、わたしは必死で引き止めた。

だって、そんな顔で教室に帰せるわけ無いじゃない……

「待って！……愛ちゃんっ、授業サボっちゃおっか？」

「ふえ？」

戸惑う愛ちゃんを無理矢理引き連れて、わたしはそのまま屋上へと向かう。

女子の間では有名なんだよね。特別棟の屋上の鍵が壊れてて出入り自由なんだってこと。

「や、でもっ、生徒会長のいろはちゃんが授業サボるとかマズいんじゃない？」

うぐっ……確かにあとで独身に呼び出されるかもね……

でも今はそれどころじゃないからね。

「だーいじょーぶっ！不真面目な生徒会長が授業サボるより、優等生の愛ちゃんが授業サボる方が遥かに目立つもんっ」

「ひどっ!？」

階段を上がりきりぶら下がってるだけの錠前を外して屋上への扉を開けると、真冬の高い青空が視界いっぱいに広がる。

そして恐ろしく冷たい風が吹きこんできた。

「ざっむー!」

「ひゃああく……」

サボタージユを屋上で！ってアイデアは失敗だったかも知れないです……

× × ×

とりあえず風が吹き付けてくるのを防げる場所へと移動する。

お、陽なたなら結構いけるかもっ！

「ホントごめんねいろはちゃんっ……サボりに巻き込みちゃって……」



「んーん？だつてわたしが強引に引つ張つて来たんだもん」

「……えへへ、私が酷い顔しちやつてるからでしょつ？」

「うん。さすがにそんな顔じゃ教室には帰せませんよお父さんはつ」

「ふふつ、ありがとうねっ！お父さんつ」

「あははつ」「えへへええ」

やつと笑顔が出てきてくれた。

あまりの寒さのあとのポカポカ陽射しで、ようやく落ち着いてくれたみたいだ。

良かった……でも……

それからせつかく時間も出来ちやつた事だしつて事で、愛ちゃんが色々お話してくれ  
た。無理しなくてもいいつて言ったのに、今日のことを全部。

「朝もね？すつごい寒かつたんだあ。比企谷先輩が何時くらいに登校してくるか知らな  
かつたから、朝一で学校に来てずっと駐輪場で待つてたのつ」

「ひええ……マジで……？」

「うんつ、まじでつ！ふふつ、まじ」なんて初めて使つちやつたつ」

今の愛ちゃんはナチュラルテンション。無理の無い笑顔がすつごく可愛い。

「でもまさかあんなギリギリで登校してくるなんて思わなかつたよ。あれだつたら部

活サボらないでも済んだなあ。……………でね? 私が待つてたから先輩つてばすっごいビックリしてたっ」

ほんの二時間前の事なのに、遠い記憶を思い出すかのようにクスクスと可笑しそうに笑う。

「……………チヨコ差し出して『ずっと好きでしたっ!』つて言ったらもつとビックリしてた! 鳩がママでつぽう食らったみたいな顔つてやつ?……………あつ! 告白はちゃんと噛まないで言えたんだからねっ!」

えへんっ! つて胸張つてるけど、そこ威張るとこじゃないからね?

「断られちゃったけど……………でもね!? 比企谷先輩、チヨコをその場で開けて食べてくれたのっ!」「うん。旨いっ」つて言ってくれたのっ!」

すっごく嬉しそうに話す愛ちゃん。

振られちゃったのに、なんでそんなに嬉しそうに話せるんだろう…………

「ふふっ、でねでね? 食べちゃったあとにハッ!として、『わ、悪い! 普通こういう場合つて……………断るんなら貰っちゃいけないんだよなっ……………』つてあわあわしちゃつてねっ? 『す、すまん……………俺こういう経験無だからテンパっちゃつて……………』つて。……………ふふふっ! 私、比企谷先輩にチヨコあげた初めての女の子になっちゃったあ!」

「そっかっ」

「うんっ！……あの時、比企谷先輩のビックリしたり慌てたり、美味しそうだったり申し訳なさそうだったり、先輩の色んな顔見られて私分かつちやったんだ。ああ、やっぱり私この人が好きなんだなあ……って」

「愛ちゃん……」

愛ちゃんは振られちゃったのにスッキリ出来たんだな……

思いつきり気持ちぶつけて、思いつきり振られて、思いつきり泣いて……

でも……でもわたしは……

「だから私は、告白して本当に良かった！……たぶんお知り合いになれる前だったらこうはいかなかったと思う。……だからいろはちゃん……紹介してくれて、ホントにありがとねっ！」

愛ちゃん……わたしは愛ちゃんにお礼を言われるような立場なんかじゃないんだよ……

わたしは自分の本当の気持ちも話さないまま紹介したの。

わたしはあなたの恋が上手くいかないだろうって分かかって紹介したの。

わたしはもしかしたら上手くいっちゃうんじゃないかって不安になって、紹介したのと後悔しちゃったの。

わたしは愛ちゃんが振られてホッとしちゃったの。

わたし最悪だね……ズルいよね……

だから、今のわたしじゃ愛ちゃんみたいに先輩に真面目からぶつかってスッキリする資格なんて無いだろうな。

だから、だからわたしは……まだ先輩に告白するのはやめておこう。

大好きな人に振られちゃった女の子に、実はわたしも先輩のことが好きだなんて言うわけ無い。告白なんて……出来るわけ無い。

はあ……わたしの決意なんてそんなもんだよね。

ちゃんと愛ちゃんに本心を伝えなきゃ。ちゃんと先輩に気持ち伝えなきゃ。

いつでも言えたはずなのに、いつでも伝えられたはずなのに、なにかと理由を付けて後回しにした結果がコレなんだ。

ホント情けない。こんなじゃ……わたしには本物を手に入れることなんて出来やしな……

「いろはちゃん」

わたしのネガティブな思考が泥沼にハマリかけていた時、その声が掛かった。とつても優しい響きなんだけど、とつても厳しい響きにも聞こえる声で。

「……ええ？」

そしてその優しく厳しい声は、わたしを泥沼から力づくで引き上げるような台詞を口にした。

「……いろはちゃんは、どうするの?」

俯いていた心を上げると、愛ちゃんが真剣な眼差しでわたしを見つめていた。

× × ×

「ど、どうするのって……なにが?」

「……チヨコレート、渡すの? 気持ち、伝えるの?」

「えっ……? は、葉山先輩に……?」

この期に及んでトボけるのかよわたしは。

そんなわたしにクスリと笑い、ゆっくりと首を横に振る。

「違うよいろはちゃん。分かってるでしょ?」

「……分かって……たんだ」

「ふふつ、それは分かるよ。恋の応援は出来ないって言われたり、目の前であんなに楽

しそうな夫婦漫才を見せられればね〜！」

「そっか……………ごめんね？嘘ついてて」

「……………で、どうするの？」

少しの間を開けたあと、もう一度同じ質問をしてきた。

「あ、や……………わたしは……………」

すると愛ちゃんはコホンツと咳払いをすると、右手の人差し指をピツと立てて左手を腰に充てて、わざとらしく私怒ってますよ？アピールな表情を顔に張りつけた。

「いろはちゃんっ！いろはちゃんは、もしかして私に悪い事したから、告白するのを諦めようとか思っていない!？」

「……………へっ?？」

「まったくうー!やっぱりそうなんだ。……………いい?いろはちゃん!いろはちゃんはズルくなんて無いからねっ?!普通だったら紹介だつてしてくれないんだから!だからいろはちゃんはズルくないっ」

わたしとは違う天然モノのぷくつと頬っぺのはずなのに、アレ?なんか良く見慣れている感じだぞ?

まるで養殖モノのわたしを鏡で見るかのような……………

「むしろね?ズルいのは私の方なんだよ……………だつて、いろはちゃんが比企谷先輩の

こと大好きだつて気付いてたのに、気付かないフリしてただから……気付かないフリして先輩に近づいたんだから……」

そう言つて愛ちゃんは、膨らんだ頬つぺを引つ込めて、少しだけ悲しそうな笑顔になつた。

「私はね、ホントにズルいの。一緒にお昼休みを過ぎした翌日、もしかしたらいろはちゃんもお昼休みにあの場所に来ちゃうんじゃないかと思つて、急いで比企谷先輩のここに行つた……後からいろはちゃんが来たとしても、比企谷先輩には私だけを見てもらえるように、必死に話し掛けてた……」

「……………」

「今日だつて……部活休んでまですつと比企谷先輩を待つてたのは………いろはちゃんが……いろはちゃんだけじゃない……雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩が想いを伝えちゃう前に、どうしても先に告白したかつたからなの……」

愛ちゃんのこんな顔は初めて見る。

いつも優しくニコニコしてる愛ちゃん。

いつも一生懸命部活に取り組んでる真剣な愛ちゃん。

先輩を前にした時はわちゃわちゃとパニックになつちやう愛ちゃん。

でも、こんなに苦しそうな顔は見たことが無い……

「もちろんね？結果なんて分かっていた……私は手遅れだったから………文化祭のあとに勇気を出して声を掛けられていたら、もしかしたらちよつとだけ違う未来が待っていたのかも知れないけど……でも私は勇気を出せなかった。声を掛けられなかった。だから……私はもう手遅れだったの……」

……涙が、つと頬を伝う。

「でも………もしかしたら、万が一でも可能性があるかも知れないから、せつかく告白するんだし、ほんのちよつとでも希望持ちたかったから………だから誰かに告白されちやう前に………どうしてもチョコ渡したかったの……」

「ま、な………ちゃん」

「……ねっ？私の方が、ずっとズルいでしょ？いろはちゃんなんて全っ然ズルくなんか無いっ。………へへっ！どちかと言うと、ちよつと勇気が足りなかっただけっ」

「うぐっ！」

「だからさ、いろはちゃん！………いろはちゃんは私みたいに手遅れにならないかも知れない可能性があるんだよ？………手遅れって、ホントに辛いんだよ？………だから………いろはちゃんは想いを伝えなきゃダメだよっ………伝ええないなんて、そんなの勿体ない」



そう言いながら、愛ちゃんは両手でわたしの両手をギユツと握ってくれる。そしてニコツと笑顔になった。

「ふっふっふ！ズルーい私は、いろはちゃんに取って置きの情報を教えちゃおうっ！」  
…………え!?きゅ、急に!?

呆氣に取られたわたしの事など一切気にせず、愛ちゃんはそのまま話を続ける。

「私が比企谷先輩になんて言われて振られたか、いろはちゃんだけに特別に教えてあげるっ」

「へっ?」

「『すまん……愛川の気持ちはすげえ嬉しい……でも、今俺には、どうしてもほっとけないバカが居んだよ……だから愛川の気持ちに応える事は出来ない……』だつてさ……………へっへっへっ！一体誰のことだろねー?」

あの先輩がそんなこと……わたし達にだつて絶対に言わないような事を愛ちゃんに言うだなんて。

先輩、ちゃんと真剣に愛ちゃんに向き合ってたんだな……

「こないだのいろはちゃんのお話からすると、ほっとけないつて言ったら由比ヶ浜先輩かな?でも比企谷先輩からしたら、意外とあの雪ノ下先輩でさえもほっとけない人になるのかもねっ……………でもね?それはいろはちゃんにだつて言えることだよ……………?だ

からさっ」

その時、二限終了のチャイムが校内に鳴り響く。

「あつ、もうこんな時間になっちゃったんだ！さすがにこれ以上サボっちゃうのはマズいよねっ？……そろそろ行かなきゃ」

そして愛ちゃんはわたしに背を向けて階段への扉へと真っ直ぐに向かう。

わたしは、愛ちゃんに背中を押してもらっちゃったのかな……何度も見せ掛けの決意をして、そしてまた何度もへこたれるような情けないわたしの背中を……

「愛ちゃん……わたしっ……」

すると愛ちゃんはわたしの言葉を遮るように、振り向きもせずにとつても予想外の言葉をお口にします。

「あつ、いろはちゃん！……今日、一番言いたかったこと言うの忘れてたよ。……」

あのね、勘違いしないでねっ？」

「はへ？」

愛ちゃんに対して宣言しようとしていたわたしは梯子を外された格好になり、思わず変な声が出てしまった。

「……さっきも言っただけだね？……私、やっぱり比企谷先輩のことが好きなのっ……告白して振られちゃったからこそ本当に気付いちちゃったんだっ。私、間違っただけじゃなかつたん

だって。この気持ちはホントにホントに本物なんだって」

「ま、愛ちゃん……?」

「私、比企谷先輩が大好き!だから私っ、諦めないからっ……だって、振られちゃったからって、諦めなきゃいけない決まりなんてないでしょ?……もし誰かさんの告白が成功して彼女が出来ちゃったって、諦めなきゃならない決まりなんてないでしょ?……だって……ずっと想い続けて、ずっとアタックしまくって……いつか振り向かせちゃえばいいんだからっ!」

ちよちよちよちよつと愛ちゃん!?

「さっき言った手遅れって言うのはね、あくまでも『今年のバレンタインは』って意味だよっ?私に足りなかったのは、雪ノ下先輩達やいろはちゃんみたいな積み上げられた時間と絆だもん!だったら、これから築き上げてけばいいんだもんっ!……私、あの日言ったよね?負けないって……!あの負けない宣言は別に今日までの話なんかじゃないの!だからさっ」

そして愛ちゃんがぐるりと振り向いた。

涙を浮かべてるけど、ちよつと悔しそうな顔してるけど、でも飛びっきりの小悪魔笑顔で………って、え?こ、小悪魔あつ!?

「もしもいろはちゃんの告白が上手くいったとしたら、私が比企谷先輩を振り向かせるまでの間だけ、ちよつとだけ貸しておいてあげるっ……♪」

涙で潤んだ目をパチリとウインク。んべえ！と舌をちよつぴり出したその笑顔は……まさしくわたしが良く見慣れた、小悪魔そのものだった……

その笑顔ですつと背けて扉に手を掛けた愛ちゃんは、今度は一転優しい天使のような声で優しい一言を残し、校舎の中へと消えていった。

「だから今日は………がんばれっ」

× × ×

参った……マジで参った……

呆然と一人屋上に取り残されたわたしは、なぜか口元が上へと曲がっていた。

……なにアレ!? 天使で小悪魔とか反則でしょ!

もしかしたら、わたしはわたしの優柔不断な行いで、とんでもない怪物を生み出し

ちやったのかな……?」

……違うか。たぶん単にわたしが……みんなが愛ちゃんの事を誤解してただけなのだ。

天性の優しさとぼわぼわ空気で、まるで純真無垢な天使のような子だっと思ってたけど、そうじゃなかったってだけの話なんだろう。

確かに天使ではあるけど、でもひとたび本物の恋を知っちゃったら、その本物を手に入れる為にはただの恋する乙女にだって小悪魔にだってなっちゃうような、なんてことない一人の普通の女の子だったんだ、愛ちゃんは。

一瞬だけ、その優しさでわたしの背中を押すためのお芝居だったのかな?なんて考えが頭を過ったけど、それは違うんだろうな。

だって、あの小悪魔笑顔は本物だったから。

天使な愛ちゃんも小悪魔な愛ちゃんもどっちも嘘偽りの無い本物の愛ちゃん。

だから明日からは、あの天使さと小悪魔さで先輩をガンガン攻めてきそう!下手したらあの子、即日サッカー部に退部届け出して、奉仕部に入部しちゃうんじゃない!!」

「うっわあ……こりゃとんでもないライバルが誕生しちゃったなあ……」

……でも、さつき見た愛ちゃんの小悪魔笑顔は、わたしが今まで見てきた愛ちゃんの

どんな素敵でどんな可愛い笑顔よりもずっと魅力的だったから、だからわたしはつい口元が緩んでしまってるんだらう。

だったら……

ぱあん!!

わたしは両手で両頬をはたいた。

「……よーしっ！やるぞお！もうホントに負けらんない！愛ちゃんに取られちゃう前に………わたしが絶対本物を手に入れてやるっっっ」

そしてわたしはその足でそのままあの人の元へと向かう。三限が始まっちゃうまでにはまだ時間があるから。

だからわたしは真っ直ぐに向かう。あの人が待つ……二年F組へと。

続く

## 一色いろはは想いを告げた

2月の冷えきっているはずの廊下を歩いているのに、身体中熱くて仕方がないのは、たぶんさつきまで屋上に居たから寒さに慣れ切ってしまったからなのだろう。

顔の火照りが止まらないのは、普段居ない一年生が二年生のテリトリーを歩いているから、視線が集中して気まづいからなのだろう。

胸の鼓動が激しく高鳴るのは、特別棟の屋上からここまで急いで歩いてきたことによる息切れに違いない。

だつて………熱くたつて火照つてたつてバックンバックンしてたつて、なぜか不思議と心はとてもし落ち着いているから。

愛ちゃんのセリフ。私はなんであんな簡単な事に今まで気付かなかつたのかな？恋は盲目すぎでしょ。

そして目的地に到着した。

この扉を開けるのは今日で二度目だ。

あの時も熱くて火照ってドキドキしてメチャクチャ緊張してたけど、同じような熱っぽさなのに、今はこんなにも心が落ち着いてるんだから不思議。

そしてわたしは迷わず扉を開いた。

× × ×

「失礼しまーす」

そう声を掛けた途端に集中する視線。うわっ……結衣先輩がぎよつとして超見てる。

なにせ今日は2月14日。たぶん……なんか感じ取ってるんだろな。

でもそんな事はもう気にしない。集まる視線だって全然無視しちゃう。

今のわたしの瞳に映ってるのは、イヤホンを耳に差して机に突っ伏してるクセに、わたしの「失礼します」にビクツとなったあの先輩の背中だけ。

わたしは迷わずその背中の隣まで歩いて行くと、あの日とおんなじようにイヤホンを思いっきり引っ込抜いてやった。

「うひゃっ」

「うっわ……相変わらずキモくてちよつと無理ですごめんなさい」



「……登場早々振られちゃうのかよ……で、なんの用だよ一色」

頭をガシガシ掻きながら、気まずそうに目を逸らす先輩。

ふむ。こんな日にわざわざ来たんだから、理由なんて分かってますよね？

それとも、友達の愛ちゃんを振ったからその件で文句言いに来たとか思ってるのかな？

「えつとですわねー。ここではなんなんであ、お昼休みに生徒会室に集合してくださいっ」  
きやるんっ！と可愛く言うのと、先輩は超嫌そうな顔をした。

いやまあわたしが今日という日に生徒会室への呼び出しを口にした瞬間に、教室中がザワリとしたから当然と言えば当然なんですけどね。

「あ、や、昼はアレがアレでな？」

だからわたしは先輩のどうでもいい言い訳なんて無視して、耳元でそつと囁いてやった。

「……言つときますけど、もし逃げたらこの間のデートであったこと全部、この教室でついでに口が滑つちゃうかもですよ……？」

「なっ！お、おま……」

あの日以来、お互いに敢えて避けてきたデートの話題に触れたら効果てきめん！

そう……わたしがこの話題を口にするってことは、今日がその時なんですよ？せんぱ

い……

「ではではよろしくですっ♪」

絶妙な手の角度と腰の角度がポイントの、必殺の敬礼をバシツと決めて、わたしはF組の教室を後にした。

わたしの強襲を受けて、結衣先輩は先に動いたりするのかな？

先に呼び出したわたしを見てからその前に動くなんてちよつとズルいけど、恋はバトルだしズルいくらいじゃないと何にも始まらないんだって、わたしはあの子に教えて貰ったからね。

だからお先に告りたければお先にどうぞ？

むしろこれで動かないくらい気持ちなんだったら、もうあなたなんて恐くない。

× × ×

四時限目終了のチャイムが校内に響き渡ると同時に、わたしはチョコレートに入ったカバンに手を伸ばしてすつと立ち上がる。

三限の休み時間の間に生徒会室の鍵は借りていた。

もちろん平塚先生には即呼び出しを食らって、昼休みに生徒指導室に来るようにと命

じられたんだけど、「今日の昼休みだけはご容赦を！土下座も辞さない覚悟であります！」って言ったらなんとか許して貰えた。

もちろん放課後は強制連行確定ですよ？なのでもう実質的にワンチャンなのです！覚悟は出来た。時間も出来た。だからもう焦りなんて一つもないから慌てずに行こう。

「ありや？いろは今日もお昼……………ふくん。そっかそっか！よくしつ！頑張ってこーいっ」

「いろはちゃんふあいとおー！」「行ってら〜。ま、頑張んな」「行ってらっしやーい！フアイツ」

ぐぬぬ……………わたしそんなに顔に出てんのかなあ……………

えへへ〜、今まで何にも聞かないでいてくれてたのありがとうとねっ。

帰ってきたら、ちゃんとみんなに話すからね。

「おうっ!!」

わたしはわたしらしく勝ち気な笑みを浮かべコブシを突き出した。

ついに勝負の時。待ってろせんばい！

× × ×

鍵を開けて、誰も居ない冷えきった室内に入る。

そして会長に就任してから持ち込んだハロゲンヒーターのスイッチを入れて、ふと室内をぐるりと見渡してみる。

思えば色々あったな。とは言ってもまだたったの二ヶ月ちよつとしか経ってないけどね。

でもたったそれだけとは思えないくらいの濃密で素敵な時間だった。

やっぱ先輩と決着を付けるとしたら……ここしかないよねっ。

そしてわたしはいつもの自分の席に着いて先輩の到着を待つ。

本当に不思議。今まであれだけ不安だったり恐かったりして逃げてばかりだったのに、わたしの心はとんでもなく穏やかなままだ。

昨夜までは何度も吐きそうなくらいに緊張しっぱなしだったのに、こんなに落ち着いているなんて、わたしおかしくなっちゃったのかな？

『だって、振られちゃったからって、諦めなきやいけない決まりなんてないでしょ？……もし誰かさんの告白が成功して彼女が出来ちゃったって、諦めなきやならない決まりな

んでないでしょっ？……………だって……………ずっと想い続けて、ずっとアタックしまくって……………いつか振り向かせちゃえばいいんだからっ！』

あの時の愛ちゃんの言葉が頭を過る。

ホントばつかみたい、わたし。なんでこんな簡単な事に今まで気付かなかったんだろ。なにをそんなに恐れてたんだろう。

こんなにも簡単な事だったんだ。こんなにも当たり前前の事だったんだ。

そう……

「逃げられちゃうなら、どこまでも追っかければいだけじゃんっ！」

こんな簡単な事だけど、わたしには見えてなかった。こんな簡単な事なのに、気付けただけで心が落ち着いた。

だから愛ちゃん、ありがとねっ。

と、その時扉を叩く音がした。

「どっぞで」

客人を招き入れるその声は常時と何一つ変わらない落ち着いた声色で、一人っきりの生徒会室に優しく響いた。

× × ×

ガラリと開いたその扉から、いつもの面倒くさそうな顔をした愛しい先輩が顔を覗かせた。

「おう……来たぞ」

「ふふつ、お待ちしてましたよ？せーんばい。さき、どぞどぞー」

室内に招き入れられた先輩は、なんだか所在なさげによく座る席に腰掛ける。

「……あー、で？なんの用だよ……」

さてさて、それでは何からお話しましよーかねえ？

とはいえ、まずは聞いとかなきゃならないことがありますね。

「えーつとお、先輩はー」

人差し指を口元に充てて、首をかしげながら聞いてみる。

たぶんその作ったあざと可愛い仕草とは裏腹に、ここからはちよつと声のトーンが落ちちやいます。

「愛ちゃんに……チョコ貰ったじゃないですかあ？………なんで、断つちやつたんですか？先輩なんかにあんな可愛くて素敵な子がチョコくれて告白してくるなんてこと

「……もう一生無いことかも知れませんか……?」

すると先輩はため息をついてガシガシと頭を搔く。

「……やっぱその事か。まあアレだ。あまりにも急すぎてビックリしたしな」

「……ビックリしたから断つちやっただですか……? ホントこんな事、もう二度と無いかも知れないですよ……? 後悔しちやいますよ……?」

「ああ……まあ後悔すつかもな。愛川はすげえ良い子だし、その……なんだ、か、可愛いしな……」

「だったら、なんで……」

「そもそも釣り合わんだろ俺となんかじゃ。俺と付き合ってたって、愛川のためになんかなんねえだろ」

「……じゃあ、先輩が愛ちゃんの告白を断つたのは、単に愛ちゃんの為とかって言うんですか?」

その質問に、先輩はちよつと苦しそうに顔を歪めた。

「………んなわけねえだろ。そんな理由だけで断つたら、気持ちを真つ直ぐにぶつけてきてくれた愛川に申し訳ねえよ……それだけじゃなくて、理由は他にもある」

「他にもって?」

「まあ単純に、俺はまだ愛川の気持ちに応えられるほど愛川の事を知ってねえってこと

だ。確かに良い子だし、か、可愛いが、それだけで付き合おうとやって良く分かん……」  
「そうですか。他には？」

「……あとは、それこそ俺の問題なんだが……なんつうの？人を好きになるつうか、人に好かれるつうか、そういうの自体が良く分かんねえんだよ……」

「……良く……分かりません」

「……俺はな、今まで他人から好かれた事なんて無かった。常に悪意とか憎悪とか、そういうのに晒されてきた人間だ……だから、俺みたいのを好きになる人間の気持ちがかんねえんだよ……たぶんそれは勘違いだ。俺に勘違いして、勝手に幻想を抱いてるだけだ」

「……まったく。ホントにどうしようもない先輩ですねー、せんばいは。」

人の気持ちを勘違いと考えること自体があなたの勘違いなんですよ？人の気持ちって、そんなに簡単じゃない。

たぶんそう言いながら、わたしの気持ちにも牽制を入れてきてるんでしょ？

先輩はわたしなんか想像出来ないくらいに、たくさん辛い目にあってきたんだろ  
う。

その事についてはわたしには何にも言えないし言う資格もない。

でも……それとこれとは違うんだよ。先輩みたいな素敵な人は、もつと真つ直ぐに人



の気持ちを受け取ったっていいんだよ。

「やっぱり……良く、分かりません……でも、とりあえず分かりました………あとは？」

「とりあえずは……そんなとこだ……」

そう言いながら、先輩はふいっと目を逸らした。

……先輩？嘘つきましたね？

わたしは今、超怒ってます！

分かってた事だけど、想定内の事だけど、それでもっ……恋する乙女の熱い気持ちを勘違いの一言で切り捨てて逃げようとする先輩のあまりのヘタレっぷりに！

だから今日は絶対に逃がしてやらないんだから！

「せーんぱい？……こんなに真面目なお話してるのに、嘘は良くないですねー」

「は？嘘なんてついてね……」

「ほっとけないバカが居る」

「………なっ!？」

先輩の顔が一気に青くなった。

わたしはそれを見て、たぶんわたし史上最上級の黒い笑顔を向けてやった。

「ほつとけないバカが一人居るから、愛川の気持ちに応える事は出来ない……ですよねっ?」

「お前っ……!なんでそこまで知ってるの……?」

そしてわたしはカバンからわたしの気持ち全部詰まってるって言っても過言ではない、最っ高の贈り物を取り出した。

「ホーントせんぱいはどうしようもないヤツですよ。目は腐ってるし心も腐ってるし、寒いしキモいし捻くれてるし。あとキモい」

「おい……キモいって二回言ってるぞ」

「そして何より、恋する女の子の気持ちを舐めすぎです。ふざけんなです。なにが俺を好きになんかなるわけが無いですか。人の気持ちなんだと思ってるんですか。本当に悪人ですね。ガチでムカつきます」

とても告白なんかをしてるようには見えない雰囲気の中、わたしはそつとチョココレクトを先輩へと差し出した。

「どうぞ先輩。そんなどうしようもない先輩に、誰にも好かれる資格なんて無い最低最悪な先輩ごときに、このわたしが仕方がないのでチョコあげましょう」

戸惑う先輩に、無理矢理チョコを押し付ける。

そしてわたしは、たぶんわたし史上最上級の微笑みを先輩へと向けた。

自分では分からないけど、本当に自然に出た笑顔だったから、たぶんその笑顔は本物なんだろう。

「好きですよ？せんぱい。……わたしは、あなたの事が大好きです」

あまりにも自然に出た言葉。

思わず笑っちゃうくらいの史上最低で史上最悪なヒドい告白劇。でもキラキラした素敵なムードの告白劇なんかより、こっちの方が断然わたし達らしいよね？

こんなヒドい告白になっちゃったけど、この想いは………ちゃんとおあなたに届くかな………

続く

## いろはす色はあなた色

わたしの愛の告白とも呼べないような酷い告白に先輩は一瞬だけ唾然としたけど、次の瞬間には苦い顔をして視線を逸らした。

先輩はわたしの言葉からどう逃げ出そうか画策してるのかもしれない。

ホントしょーがない人ですねー、この先輩は。この期に及んでまだはぐらかす気満々なんでしょうね。

でもね？どんなに苦い顔したって、どんなに逃げようとしたって、その頬の赤みだけは隠せてないですよ？

少なくとも意識はしてくれてるってことですよね？

「先輩、ホントは分かかってましたよね？わたしの気持ちなんて」

「お前の気持ちなんて分からん……さつき言っただろ。俺を好きになるヤツの気持ちなんか分かんねえんだよ……分かっている事つつたら、一つだけだ」

「わたしの先輩への気持ちは勘違い……ですか？」

「ああそうだ。だってお前は葉山があれだけ好きだったはずだろ。あんなすげえ男を好きだった奴が、俺を好きになる訳ねえだろ……ただ、振られたあとに近くに居たら、大変な時に手伝ってくれたから、だから好きとかって勘違いしているだけだ」

……ホントわたしはなんでこんなどうしようもない男を好きになっちゃったんでしようね？

想定通りだけど、あまりの捻くれた思考回路に思わず苦笑してしまう。

「はあく……先輩の言う通り、こんな気持ちがあただの勘違いだったら気が楽なんですけどねー。ホントこんな人好きになっちゃったなんて、わたしのラブコメ間違い過ぎですもん。……でも先輩？……気持ちってそんな簡単なものじゃないんですよ……？」

ふう……コレだけはやりたくなかったんだけどなあ……

あまりの先輩のダメっぷりに告白自体はとつても自然にとつても落ち着いて出来たのにつ……きゅ、急にドキドキしてきたあ……

ま、まあこの心臓の鼓動こそ、今からする事には絶対に必要だからいいんですけどねっ……責任、取ってもらいますからね！

「……先輩があまりにもダメダメでヘタレで捻くれてて、どうせわたしが何を言っても真っ直ぐには受けとめてはくれないと思うので……今から証拠を見せて……聴かせて

あげます」

「……………は？なんだよ証拠つてつて……………え？ちよつと？」

そしてわたしは椅子に座る先輩の頭を震える手で抱え込むように、優しく……………でも強く強く胸に抱き締めた。

× × ×

「……………つ！おまつ……………な、なにしやがつ……………」

動揺しまくる先輩の喚き声が、わたしの胸からくぐもつて響いてくる。

そりやそうだ。だって先輩はわたしの胸に顔をうずめてるんだから。

「ちよつ！先輩！あ、暴れないでください！わわわたしだってこう見えて実は結構いっぱいいっぱいなんですからっ……………はっ！まさか動揺するフリして暴れて顔を激しく揺することによって可愛い後輩の胸の感触を顔いっぱい楽しんでるんですか想像以上の状態ですね正直かなりキモくて無理ですごめんなさい」

「……………こんな状態でも振られちゃうのかよ……………」

そう言いながら先輩はようやくおとなしくなってくれた。

そりゃあんなこと言われたら暴れるわけにはいかなくなりますよね♪

「んーんんー……ま、まあ先輩がわたしの胸の感触を楽しんでるかどうかはこの際不問にしておきましょう」

「楽しんでるの前提で話進めるのは止めてもらえませんかね……」

「わたしが言いたいのはですな……？」

暴れて離れようとしなくなつたから、強く抱き締める手を緩め、優しく包み込むように優しく抱き締める。

「先輩……わたしのドキドキを聴いてください……どうですか？すっごいバクバクしてるでしょ？……わたし、こんなに鼓動が激しいのなんて生まれて初めてなんですよ？……今まで色んな男の子に告白されたり、葉山先輩に告白したり、ドキドキした事は何度もありますよ？……でも」

先輩は黙つてわたしの話とドキドキを聴いてくれている。

そんな先輩の顔を、もう一度力強くギョツと抱き締める。

「……でも、こんなに激しくドキドキしたり、こんなにきゆうつて苦しくなつたのなんて生まれて初めてなんですよ？先輩……先輩はこのドキドキも苦しさも、全部わたしの勘違いだつて言うんですか？単なる一時の気の迷いだつて切り捨てるんですか？」

「……………」

「……………先輩、それはとっても酷いことなんですよ？残酷なことなんですよ？……………先輩とバカな話で盛り上がってる時はホントにメチャクチャ楽しいんです。先輩がめんどくさそうな顔しながらも、しよーがねえなあって、頭を掻きながらワガママ聞いてくれる時はメチャクチャ嬉しいんです。先輩が奉仕部でイチヤイチャデレレしたり、愛ちゃんとイチヤイチャデレレしたりしてるのを見ると、心臓が鷲掴みされてるのかって思うくらいにメチャクチャ苦しいんです」

「ちよつと待て。イチヤイチャデレレしてばつかみてえじゃね…」

「うるさいです黙ってください」

「はい」

「……………先輩は今の関係を壊したくないとか逃げ出したいとかそういう気持ちの為だけに、こんなわたしの、わたし達のこんなにもたくさんの嬉しくて楽しくて苦しい気持ち全部を踏み躪ってるんですよ？そんな気持ちは全部全部勘違いだなんて、ただけヒドいこと言ってると思ってるんですか……………」

「……………ヒデえな、確かに……………」

「そうですよっ！ホント酷いです。ホント最悪です。ホントどうしようもないです」

「そうだな……………すまん」



「……………」

抱き締める力をもう一度弱めて、片手で優しく頭を撫でてあげた。

「……………」でも悔しいけど、わたしはそんな先輩が大好きになっちゃったんです。ぼつちでキモくて捻くれてて目が腐ってヘタレでどうしようもなく格好悪い先輩が、イケメンで頭脳明晰で優しくて皆の人気者の、ステータスの塊のような葉山先輩なんかより、ずっと格好良く見えちゃうんです。どうしてくれるんですか責任取ってください」

この鼓動はあなたに届いてますか？

爆発しちやいそうなくらいドキドキしてるのに、でも穏やかなわたしの心音。

これが勘違いだなんて言わせませんからね？

「だからわたし、もう決めたくなんです。想いを告げたら逃げちゃう先輩が恐くて、わたしもずっと先輩から逃げてたけど、愛ちゃんに教わったから」

「愛川に……………」

「先輩？逃げたいならどうぞ逃げてください。わたし、追い掛けますから！先輩がどこへ逃げたって絶対捕まえてみせます！先輩みたいなのを好きになっちゃった以上、ここにだってそれなりの覚悟があるんですからっ」

「……………」ぶつ、お前どこのストーカーだよ……………」

「ストーカー上等です！わたしだって意地がありますからね！好きな人が逃げるなら、

それをどこまでも追っかける。だって……どうしようもなく好きなんですから……それが一色いろはの答えです」

「……そっか」

「……そうです」

しばらくの沈黙。

こんな風に言っちゃったけど、「お前ウザイわ」とかって言われちゃったらわたしはどうするつもりなんだろう。

んーん？ そんなの愚問だよね。だってそんなの決まってる。

「……げねえよ……」

不意の先輩からの返答に、わたしは良く聞き取れなかった。

「え？ なんですか？」

「……お前はどこの難聴系主人公だよ」

「なに言ってるんですかまたなんか気持ちの悪いこと言ってる……」

「逃げねえよ」

「逃げないって……言っただけですか……？」

「……てか逃げらんねえだろ……こんなにガツチリとホールドされちゃったら、どこに

も逃げようがないだろ」

「……今はそんなにガツチリと締め付けてるわけじゃないですよ……？」

「じゃあ、わたしは先輩の何をガツチリと掴んでいるの？ 気持ち……？」

「ちよ、ちよっと待ってください先輩……え？ それって、どういう意味ですか？ ……」

「えっと、その……に、逃げないってことは……わ、わたしの気持ちを、その……受け入

れてくれるってことですか!？」

「嘘？ マジですかマジですか？ だってそれって……え？」

「…………っーだ、だから言ってるんだろ……に、逃げてても無駄なら……その、なんだ

……逃げる労力が、も、勿体ねえだろっ……俺は効率最優先な男だからな……無駄

と分かってて頑張ってる逃げるなんて真似はしたくないんだよ」

「……えっと……告白に対しての返答が想像以上に捻くれ過ぎててちよつと分かり辛い

んですけど、その、か、彼氏になってくれるって事でいいんですかね……？」

「あ……や、ま、まあそういうのもなきにしもあらず……かも知れん」

「ホ、ホントにいいんですか……？ だ、だって、そしたらわたし、今から思いつきり彼女

面しちやいますよ……？」

「は……あー、まあなんだ……そ、そういうのも、まあやぶさかでは無い……かもな

……」

「じ、じゃあ明日から廊下で先輩を発見したら抱きついちゃいますよ……?」

「いやそれは恥ずかしいからやめて」

「むー、それじゃこの前撮ったハグプリクラを携帯に貼って友達に見せびらかしちやったりしますよ?」

「いやホント無理です勘弁してください」

「むー! だったらだったら! 明日から毎日手を繋いで一緒に登下校とかしちやいますよ!?!」

「アホか。そんなの無理に決まってるんだろ」

「……………」

「……………」

あ、あれ? なんかもお互いの認識がちよっとおかしいんですかね……?

あれ? 別に彼女にしてくれるわけでは無いの?

「……………せ、せんばい?」

「……………お、おう」

「えっと、ですね……? わたし、先輩の彼女って事でいいんですよね?」

「や、だからさつきからそう言ってる……」

な、なんだこれ? 告白が成功したようには全く思えないんですけど。

あれ？わたしが変なの？

「つ、つまり……わ、わたしの告白はOKで、今から彼氏彼女になるのもなきにしもあらず……彼女面する事もやぶさかでは無いけど、イチヤイチャしたりするのは恥ずかしいからやめてくれ……と？」

「だからそう言っただろ……」

「……………」

ひ、ヒドすぎる……

わたしの告白も大概だったけど、先輩の応えがこれまたヒドすぎるっ……

「……………」

「……へ？」

「くくくっ……あはははははっ！あー、もうホント最悪っ！」

「な、なんだよ？なんか笑うとことかあったか!？」

「なんなんですかねこの人！笑うとこしか無いじゃないですかー。わたしが一生懸命想いを告げたのに、その応えは、なきにしもあらずとかやぶさかでは無いとかでハッキリと応えるの誤魔化すし、付き合ってから希望とか全部却下じゃないですかっ！ホント

「ただけへタレなんですかつ」

このおバカな先輩をそう小馬鹿にしながらも、顔を抱き締める力をギュツと強める。だって……なんかもうこの情けないへタレっぷりが庇護欲そそりまくりで可愛いんですもん！

ホント先輩こういうトコあざとすぎて卑怯です！

「つーく、苦しいって……」

「ホントにもう！なんなんですかこのムードもへったくれも無いヒド過ぎる告白劇はっ……ふふふっ、わたしの告白も先輩の返事も、ホントにヒドいもんですねっ」

「……………それは全面的に同意する」

「二世一代の覚悟を決めて臨んだ、絶対に素敵でロマンチックになるはずだったバレンティンを、こんなヒドい内容にさせられてわたしシヨックです！傷心してます！だから……………ちゃんと責任取ってくださいね？せーんぱいっ！」

「まあ、可能な限り善処する……」

こうして晴れてわたしと先輩は恋人同士となった……の？

正直こうなれたのは死ぬほど嬉しいんだけど、こんな人とこの先ずっと永遠に生きていくだなんて不安しかない。

でも………ぷっ！こんな人だからこそ、この先もずっと一緒に居たいって心の底から思えるんだろうねっ。

そんな不安しかない幸せな未来の為にもまず乗り越えなきゃならない危機は、本日の放課後の独身女性からの呼び出しと、そしてあの部室の恐ろしさに他ならないんだけど、そこはホラ、ね？

ちやーんと責任とってもらいますので、どうぞよろしくです☆

× × ×

わたしの心はいろはす色。

その時々によっていろんな色に変化する。

偶然せんぱいを見つけた時には嬉しくてポカポカとお日さまみたいな黄色になったり、せんぱいと目が合った時はドキドキしてピンクになる。

せんぱいと静かにまったり過ごせてる時には心落ち着く清らかな白にもなるし、せんぱいが他の女の子と喋ってるのを見ちゃった時なんかは一日中真っ黒にだってなっちゃうの。

だからわたしの恋心は、いぎ口にするまで何色なのか分からない無色透明ないろはす色。

わたしの色が何色なのかは、わたし自身にだって分からない。

だからせんぱいにはわたしの心が何色なのかは教えてあげられないよ？

でもね、それでもどうしても教えて欲しいって言うのなら………そーだなあ、うん！  
その時わたしはあなたにこう答えてあげる。

わたしの色ですか？

そんなのもちろん決まってるじゃないですかー？



わたしの色………んーん？一色いろはの恋心の色は……

八色ですっ♪

終わりっ☆

## 愛川愛編

### 愛川愛は初恋と出会う

「まったく………一色はともかくとして、愛川までが授業をサボるとは、一体どういうことかね」

「ちよつと先生!? わたしはともかくって、わたしこれでも生徒会長なんですけど……」

「だが生徒会長である前に一色だ」

「酷っ!?!」

先生の容赦の無い口撃にいろはちゃんが崩れ落ちた。

今日2月14日バレンタインデーの放課後、私、愛川愛と、部活仲間で友達の一色いろはちゃんは、二人して一時限目をサボってしまった罰に、生徒指導教員の平塚先生に呼び出しを受けていた。

「すみませんでした、平塚先生。いろはちゃんは私と一緒に居たんですけど……その

……私がちよつと授業に出られるような状態では無くなってしまった為に、いろはちゃんが私に付き添っていてくれたんです……」

「……ん？出られるような状態では無い……？それは一体どういうことだ？」

「……あの……それは、その……」

……これはちやんと言うべきなのかな？

でも、振られて泣き腫らしちやつたから授業に出られなかっただなんて言っちゃつても平気かな。

——でもこのままだと、私の為に付き合ってくれたいろはちゃんに迷惑が掛かっちゃう……

平塚先生は冗談めいてああ言ったけど、私なんかと違って、生徒会長のいろはちゃんが授業をサボるなんて問題になっちゃうもん。あくまでもいろはちゃんは友達のために付き合ってくれただけの優しい被害者だって事にしなきゃいけない。実際にそうなんだしね。

とつても言い辛いことだけれど、ふう……と息を吐いて発言しようと思つたら……

「……ふむ、まあ愛川がそういうのであればそうなのだろう。……今回は、愛川の体調不良に一色が付き添っていた……と、こういう事にしておこう」

どうやら平塚先生は、言い辛そうにしている私に気を遣ってくれたみたい。

本当にこの先生は良い先生だなあ……

「っ！あ、ありがとうございますっ」

「ありがとうございますっ！」

「ふむ。今後は十分に気を付けるんだぞ？ 一色」

「だからなんでわたしだけ……」

そうして今回に限り無罪放免とされた私たちは、二人並んで生徒指導室を出た。

「ひえ〜……助かったあ」

「うふふっ、ねっ！」

並んで廊下を歩きながら笑い合う私たち。

でも……呼び出されて生徒指導室で会ってからのというもの、いろはちゃんは私と一度も目を合わせてくれようとはしないんだ。

理由は分かっている。言いづらいんだよね？

でもそれは心苦しいから、私に気を遣ってくれてる事は申し訳ないから、私の方からお話を振ってあげよう。

せっかくの素敵な日なんだから……

「……ねえ、いろはちゃんっ」

私は立ち止まる。

するといろはちゃんも立ち止まって振り返ってくれた。

「……なに？愛ちゃん」

私はいろはちゃんの両手をしっかりと握り、精一杯の笑顔で祝福してあげる。

「おめでとう！幸せ掴めたねっ！」

「……ま、愛ちゃん……わたし、まだなんにも……」

「あつまーい！そんなの言わなくて分かるよー。その顔見ればねっ♪」

いろはちゃんは俯き、複雑な表情を見せた。

「もーっ！せっかくの良い日を、そんな顔で台無しにしちゃダメだよっ？」

「ゴメンね、愛ちゃん……ちゃんと言おう言おうって思ってたのに、いざ顔を合わせ

ちゃったらなんて言ってるのか分かんなくなっちゃって……」

私はいろはちゃんの手を離して、いろはちゃんの頬つぺたをむにとしてやった。

口角を無理やり上げるように。

「はーい、笑って笑って……？……？……？……？……？いろはちゃん!?!いろはちゃんは今日はそんな顔してて許されると思ってるの!?!そういう顔は、むしろ負けた女の子に失礼なんだからね!?!」

めっ！って顔でいろはちゃんを叱ると、ようやく少しだけ笑顔になってくれた。

「……？……？……い、いひやいよく、まにやひやくんっ……」

「ふふっ」

私が頬つぺたから手を離すと、いろはちゃんは両手で頬つぺを押さえる。

ちよ、ちよつと強すぎちよつたかなっ……!?

「あいたたあつ……」

「……んん！ん！……い、いろはちゃんが悪いんだからねっ……?」

「うー……」

そうなのだ！全部いろはちゃんが悪いんだもん！

私はちよつとだけ罪悪感を覚えながらも、こほんつ！とひとつ咳払いをして、両手を腰に当てているいろはちゃんを優しく叱る。

「私に気を遣ってくれるのはとっても嬉しいよ？正直、すっごい悔しいって気持ちがあるのも事実だし……それでも、今日はいろはちゃんに笑顔でいて欲しいのっ。だって……誰よりも私が、いろはちゃんが今どれだけ幸せかって分かるんだから！だからそんな辛そうな顔なんてして欲しくないっ」

「愛ちゃん……」

「だって……そんな顔されちよつたら……」

私は、今の私の本音を思いつきりいろはちゃんに届ける。とびつきりの笑顔で！

「比企谷先輩を奪い甲斐が無いじゃないっ?」

「すっごい悪い笑顔してるよ!? 愛ちゃんっ」

あれ? 私、そんな顔しちやつてたんだ、えへへ。

それに私はこうなるだろうなって事なんて分かってたんだよ? いろはちゃん。

あなたが先輩に紹介してくれたあの日から。

あの日、比企谷先輩がいろはちゃんに向ける特別な眼差しを知っちゃったから。

分かってたけど、それでも私は告白せずにはいられなかった。

だって……私は比企谷先輩に、自分で思ってたよりもずっと惹かれてたみたいだから。

——比企谷八幡先輩。

私はあの人との出会いを思い出す。

私の初恋の記憶を……

× × ×

「えーっと……文化祭実行委員に立候補してくれる人は居ないかな……まずこれから決めなきゃ次に進めないんですけど……」

教卓では、ルーム長さんがかなり困った様子で会の進行を見守っている。

文化祭実行委員かあ……誰もやりたがらないモノだよ、こういうのって。

「えー、だって文実つつたつてさ、結局文化祭回すのは二、三年で、俺ら一年なんて雑用させられるだけだろー?」

「だよねー。てかアタシらだつてクラスの出し物に集中したいんですけどー」

「そうそれ!」

そうなんだよね。文実に参加するという事は、つまりクラスの出し物にはあんまり参加出来なくなっちゃって、せっかくの文化祭を楽しめなくなっちゃうんだよ。だから私も出来ればやりたくは無いな。

「……でも文実が文化祭でのクラスの代表みたいなもんだからさあ、まずコレ決めないと次に進めないんだつてば……このままだと、アミダとかじゃんけんで決める事に……」

「ええー!」「はあ?」「んなの横暴だろー」「反対ー」

あ、あははは……みんな自由だなあ……



はあああ……仕方ないかあ……あんまりやりたくは無いけど、このままじゃ永遠に決まらなさそうだし、ルーム長さんも大変そうだし……

そして私はおぼずおぼずと手を上げた。

「あ、あの……じゃあ私がやりまゝ……」

この空気の中で立候補した私にもすごい注目が集まっちゃったっ！ひ、ひえええ  
っ……

「ええええっ!?!」「愛ちゃんはダメでしょー!」「そうだよー!愛川さんはダメだよ!」「愛ちゃんを文実なんかに寄越しちゃったら勿体ないってー!」「我がクラスの天使はあげらんねえよー!」「うちの出し物のメインだろー!」

あ、あわわわわっ……

「ほか誰かやんなよー!誰もやりたがらないから愛川さんが犠牲になってくれてんじやーん」「じゃあお前がやれよ」「やだやだ!私は無理ー!」「ねえ、じゃあ誰か居ないのおお?愛ちゃんに氣イ遣わせんのはダメだって!」「わ、私も文実はちよつとお……」  
はわわわわっ……

「あ、あのっ……私はそんなじゃ無いからっ!別に犠牲とか気を遣うとかじゃなくって、私、そういうのちよつとやってみたかったからっ……だからその、大丈夫……で

すっ」

クラスが静まり返る。

うう……本心では無いことを言ってるから、正直居心地悪いつ……

「……まあ愛がそういうんなら仕方ないかあ……」「よくよく考えてみれば、クラスの代表って考えれば文句無い人選だしなあ」「私さんせー!」「俺もー!」

ふ、ふう……なんとか意見が通つたみたい。

……うー、本当はやりたくない委員を自分から懇願する事になるだなんてなあ……ホント私っていつまで経つてもこんななのかな……

——私は、こんな風にみんなに良くして貰ってる事はすごく嬉しいしすごく有り難い事だっと思ってる。

……気が付いたら、私はずっとこうだった。

元々大人しくて引つ込み思案だったくせに、強くて格好良いお兄ちゃんの影響もあって、困ってる人を見ると思わず手を出してしまうという。大人しくて引つ込み思案な癖にお節焼きという厄介な性格”になっちゃったものだから、気が付いたら周りから”愛ちゃんは無言で良い事をしてくれるいい子”って見られるようになってしまった。

だからと言って、別に周りからの期待に応えようと “いい子” を演じてきたりなんかしてない。ただ私は私らしく、やりたいって思ったからやってきただけ………のつもりだった。

でも、実際はどうなんだろう……？

本当に私は周りの目を気にしてないのかな。周りからの期待に応えようと無理してないかな。

最初はそんな事なかったはずなのに、いつの間にか私は周りの目を意識しちやったりしてないかな……？

“いい子” で居なきや……って、無意識に行動しちやってないかな……？

でも、そんな風に考えてしまいがちでも、やっぱりそう行動してしまう私は、少なくともみんなが言うような天使なんかじゃないんだよ。本当にただの普通の女の子なの。だから今の私には、いい子とか天使とかって言うてくれて良くしてくれること自体が、本当はちよつと重い……私は、そんなんじゃない……

こうしてこんな自己嫌悪に苛まれながらも、会は着実に進行していく。

女子の委員が決まったことで男子も立候補しやすくなったのか続々と立候補してくれて、程なくして男女の文実が決定する。

そこまで決まってしまうとそのあとはスムーズに流れていき、無事その日の会は滞りなく終了した。

——数日後には文実が始まる。

私は、今までやったことのないようなそんな経験を糧として、こんな自分を少しでも変えられたらいいのにな……って、密かに願わずにはいられなかった。

× × ×

文化祭実行委員に割り当てられたのは会議室。

私はその日のLHRが終わると同時に、男子の委員の子に誘われて会議室へとやってきた。

普段はあんまり話した事の無い男の子だったんだけど、同じ委員になったからか積極的に話しかけてきてくれた。

んー、普段は話さないのにこういう慣れない緊張の場で気を遣ってこんなに話しかけ

てくれるなんて、実はいい人なのかな？

なぜだか今まで私はあんまり好印象は持って無かったけど、女の子たちにも人気のあ  
る人みたいだし。

うん！良く知りもしないのに、勝手に印象だけで決め付けちゃうのは良くないよねっ  
！

まだ会議室に到着した時点ではあんまり他の委員の人たちは集まって無かったんだ  
けど、その男の子が話しかけてくれてる間に続々と集まりだしていた。

「わー！さがみんだー！さがみんも文実になったんだあ」

「あー、ゆっこだー！」

「なになにゆっこー、友達ー？」

「そ。さがみ……あ、相模南ちゃん。一年ときクラス一緒だったんだあ」

「どーも、相模南です！よろしく〜」

「こちらこそよろしくねー」

ふふっ、なんだかそこかしこで微笑ましい光景が生まれてる！

二年生の先輩方かな？なんだかいよいよね、こういうのって。

最初は乗り気じゃなかった文実も、あんな風に楽しくなればいいなあ……！！

ガラリツ……

そんな楽しい光景をこっそり眺めていると、その遠慮がちに開かれた扉の音と共に一人の男子生徒が入室してきた。

なぜだかは分からない。分からないんだけど、みんなが楽しそうな様子でお喋りしている中、一人でやってきて、一人だけ目を曇らせて、猫背で面倒臭そうに室内を観察しているこの男子生徒が、私はとても気になったのだった。

続く

## 愛川愛は過去の記憶に今を見る

「ど、どうかした？ 愛川さん」

「……………え？」

「あ、やー、なんか楽しそうにクスクスしてたからさあ……………」

「……………へっ？……………んーん？ な、なんでもないよ……………」

……………嘘、ついちやった。

なんでもないなんて事は全然ないの。

だって私は、今こっそりとある人を見てちよつと楽しんでたから。

でも、お仕事中にクラスの男の子に声を掛けられちゃう程に笑ってたなんて、自分でもちよつとビックリ！

って、あつ……………ふふっ！ またお仕事押し付けられてあんなに嫌そうにしてるのに、ブツブツいいながらも一生懸命にお仕事してるっ……………！

最近、なんだかあの先輩のああいふ姿を見てるだけで、知らず知らずに顔が綻ん

じやつてる自分がある。

なんかいいな、ああいうの。

自分の感情を隠すことも繕うこともしないで、嫌なら嫌、面倒くさいなら面倒くさいでその感情を思いつき顔に出しちゃつてるのに、根が真面目だからか他の誰よりも一生懸命お仕事してる姿に、なんだか心が和んじやう。

んー……なんで私はここまであの先輩……比企谷先輩に目が行つちやつてるのか良く分からないけれど、それは……今がこんな時だからかな……

今文実は、物凄く佳境に立たされている。

それは、文化祭実行委員の集まりが始まった数日後に起きた委員長のあの一言から始まったのかも知れない……

あの一言で、私たちは今まさに追い詰められているのだ。

わわわっ！こんな事ばかり考えてないで、私だって少しでも役に立てるように頑張らなきゃっ！

私は現在進めていたお仕事を一旦切り上げるとすぐさま立ち上がり、比企谷先輩のもとへと掛けていく。



「あの、先輩！私もそれちよつとでよければ受け持ちます！ここの積まれたお仕事、いくつか持っていけますねっ」

「……え、マジで？えと、あー、サ、サンキューな」

「いえいえっ！また自分の分終わらせたらお手伝いしますねっ」

「お、おう。スマン、助かるわ……」

……ホント、真面目な人だなあ……

スマンとか助かるとか、だってこれって元々先輩のお仕事じゃないんだから、スマンだなんて言う必要なんて全然無いのに……

「……はい！……つと、それではコレ貰っていきますね、んしよっ」

私は比企谷先輩の机に積まれた、本来先輩がやるべきでは無いお仕事の書類をいくつか持って自分の席へと戻っていく。

「ホント愛川さんは真面目だよなー。それ別に愛川さんの仕事じゃないじゃん……！そんなあの二年生に任せといて、俺らも一緒にクラスの準備行けば良くない？」

「……あ、うん……私は文実のお仕事するから、別に一人でクラスの準備をお手伝いをして行ってもいいよ……」

「い、いやー、愛川さんが残るんなら、もちろん俺だつて残るよー」

「……そ」

……あなたはここに残ってても、一生懸命にお仕事しないじゃない……

私はクラスメイトにその一文字だけを返すと、すぐに自分のお仕事に取り組んだ。

私なんてまだまだ全然役に立ってないもん。比企谷先輩や雪ノ下先輩、城廻先輩に比べたら全然お仕事をこなせてなんかいない。

早く自分のを片付けて、また先輩のお仕事を少しでもお手伝いしなきゃ……！

× × ×

『少し、考えたんですけど……文実は、ちゃんと文化祭を楽しんでこそかなって。やっぱり自分たちが楽しまないと人を楽しませられないっていうか……文化祭を最大限楽しむためには、クラスの方も大事だと思います。予定も順調にクリアしてるし、少し仕事のペースを落とす、っていうのどうですか？』

あれは文実がスタートしてから少しした頃だった。

相模実行委員長が、少し前倒しに作業が進んでいる事で、こんなことを言い出したのだ。

確かにあの時は作業の進捗状況は悪くなかった。

それもこれも、委員長の相模先輩ではなく、副委員長に就任したあの総武高校一の有名人、雪ノ下雪乃先輩が物凄いリーダーシップを発揮して作業を進めていったからなんだけど。

やつぱり文化祭って言ったら、仲良しなお友達とみんなで楽しくクラスの準備したいもんね。

だから相模先輩のその提案は、多数の文実メンバーの賛成の拍手を持って可決された。

だけど、その相模先輩の提案が危険な要素を孕んでいるって事は、一部の生徒は気付いてた。私もそれはまずいんじゃないのかな？って、漠然とだけ感じていたし。

一部の生徒が気付いていた危険性は、それからたったの数日後にはカタチになって現われた。

クラスの準備を優先して文実に参加しないメンバーが出始めちゃったから。

一旦『クラスを優先していい』って空気が蔓延し始めると、次から次へと不参加メンバーが増えていき、元々各クラスの実行委員総勢60人＋生徒会役員さん達という大所帯は、今では役員さんを含めても20人にも満たない人数になってしまい、もう進捗状況はボロボロになっちゃってたし、当の実行委員長が率先して不参加になっちゃってる

からもうどうしようもない。

たまに顔を見せても、文実でも無いのになぜかたまにお手伝いをしてきている葉山先輩を発見して、

『あー、葉山君こっちにいたんだー』

と文実と一切関係の無い世間話に花を咲かせては、クラスの用事を済ませるとそのまま直帰……

その上葉山先輩を誘ってそのままご飯に行こうとする始末だったり……

はあ……相模先輩って、なんで委員長に立候補したんだろ……？

初めから雪ノ下先輩が委員長に就任してればなあ……

今は僅かに残されたメンバーでかなり無理してお仕事を回してるけれど、こういうのに慣れてない一年生の私でも分かる。たぶんこのままいつたら、文化祭実行委員は……文化祭は失敗する……

でも不満ばかり考えてたってなんにも始まらないっ……まだ大して役にも立てない私は、こんな空気の中でも一生懸命やってくださっている先輩方の力に少しでもなれるように、自分にやれる事を精一杯やるだけだっ！

よしっ！やるぞー！

……………と思つてただけど、この日はそれじゃ済まなくなつちやつた……  
「雪ノ下なんだが、今日は体調を崩して休みだ」

会議室へ入つて来た平塚先生の第一声。

そう、今日は委員会開始からずっと居ないなあ……？つて思つてただけど、どうやら雪ノ下先輩が体調を崩してしまつたらしいのだ。

下校時刻までに片付かなかつたお仕事も持ち帰つてたみたいだから、たぶん……無理をし過ぎちやつたんだろうな……

そしてそれと同時にまた別の問題が発生した。

なんと先日提案されて委員会でも決されたスローガンにNOが出ちやつたみたいなのだ！

やつぱり私もまずいんじゃないのかな……？つて思つてただよね……

だつて……『面白い！面白すぎる！』潮風の音が聞こえます。総武高校文化祭  
『』つて……

そ、それつて埼玉の老舗和菓子屋さんのキャッチフレーズなんかも……

結局この日は完全に作業を中断し、このキャッチフレーズ問題についての議論にあてがわれた。

そして文実を早退して雪ノ下先輩のお見舞いへと向かったのは……なんと比企谷先輩だった。

まあ今まで先輩をチラチラ見ていて、なんとなく雪ノ下先輩となにかしらの関係があるのは分かってた。オブザーバーとして参加してる雪ノ下先輩のお姉さんとも仲良く？お話してたし。

でもまさか雪ノ下先輩の自宅に直接お見舞いに行く程の仲だとは思ってなかった。

なにせあの雪ノ下先輩だもん。眉目秀麗文武両道、その美しすぎる容姿と優秀すぎる能力から、ある意味学校内で孤立しているというか、近寄りがたい孤高の高嶺の花としてとつても有名なあの雪ノ下先輩の仲良しさんが、ちよっぴり気になるあの先輩だなんて。

んー……なんだかちよつと気になっちゃうなあ……もしかしたらお付き合いとかしてるのかな……？

×  
×  
×

翌日は文実のスタートから、昨日のスローガン問題についての話し合いが行われた。さすがに早急にスローガンを決定しなくちゃマズいみたいで、普段欠席しているメンバー達も昨日の内に召集を掛けられたみたい。

そして雪ノ下先輩も出席してる。大したことなかったようであつた……！

でもやっぱり見るからに疲弊してる……雪ノ下先輩だけじゃなくつて、生徒会役員さん達も……

現在の遅れに遅れている状況で持ち上がったこの出来事は、執行部としてはとてもとても痛手になるものだから。実行委員長を除いて……

会議が始まり委員に意見が求められたけど、当然のように誰も意見なんて出さない。普段ちゃんも委員会に参加してるメンバー以外は今の状況が切迫してるなんていう感覚が無いようで、たんなるお喋りの場と化してしまつてる。

ううっ……この空気の中で手を上げるのはかなり恥ずかしいっ……

でも誰も意見を出さないんだもん。私一人でも意見を出す事で、やる気の無い人達の起爆剤に少しでもなれば……！

ちよつと涙目になりながらも、意を決して震える手を挙げようとした所で葉山先輩が先に挙手した。

「いきなり発表っていうのも難しいだろうし、紙に書いてもらったら？」

……挙げかけた震える手が宙ぶらりんでギリギリ止まった………た、助かったああ………

うー……ダメじゃない私！助かっただなんて情けないこと思っちゃったら……

その後各自に白紙が回されて、とりあえず案を書いて提出という事になった。

んー……スローガン、かあ。

一応さつき発表しようとした事を書いてみる。

『ONE FOR ALL』

………なんだか、自分で書いてとても空々しい……

この現状で——一人はみんなのために——って、ね……

結局回収された案はごく僅かで、私のそんな空々しい案も、比企谷先輩に鼻で笑われて終了って感じだった……うう……お役に立てずにごめんなさい……

しかしそんな中ついに事件は起きてしまった。

相模実行委員長によって……



× × ×

「うちのほうから『絆　くともに助け合う文化祭』っていうのを……」

「うわぁ……」

相模先輩が案を発表してホワイトボードに書き始めた瞬間、ある一人の男子生徒の眩きによつて、会議室がざわめき始めた。

うわぁと眩いたのはそう……比企谷先輩。

そしてその眩きにより生じたざわめきは、明らかにその案を発表した相模先輩に対する嘲笑だった。

「……何かな？　なんか変だった？」

「いや、別に……」

「何か言いたいことあるんじゃないの？」

たぶんこの場に居る委員会の人だったら、比企谷先輩が何を言いたいのか皆分かかってる。

でも、相模先輩の『クラス優先』という言葉に乗っかって一緒になつて文実をサボつてた人達だって、相模先輩を笑えないんだよ。

そして心の中では不満に思いながらも、言いづらいからってそれを容認しちゃってた私達だって……

「いや、まあ別に」

「ふうん、そう。嫌なら何か案出してね」

すると、比企谷先輩はとんでもない言葉を放ったのだ。

たぶんそれは今対峙してる相模先輩だけじゃない、この場の全員に向けて。

『人々よく見たら片方楽してる文化祭』とか」

……会議室が凍り付いた。

それはつまり、今比企谷先輩が挙げたスローガンに、誰もしが納得してしまったから。

そして納得してしまう現実を認めたくないから。

唯一人この発言に大笑いしているのは雪ノ下先輩のお姉さん。

うん。この中で今の発言で笑ってもいいのは、この人と雪ノ下先輩くらいだもんね。

でも立場上さすがにそれを嗜めた平塚先生が、次は比企谷先輩に呆れた様子で問い掛けた。

「比企谷……説明を……」

「人という字は人と人が支え合って、とか言ってますけど、片方寄りかかってんじやないっすか。誰か犠牲になることを容認してるのが人って概念だと思っんですよね。だ

から、この文化祭に、文実に、ふさわしいんじゃないかと」

「犠牲、というのは具体的に何を指す」

最初は呆れた様子で問い掛けた平塚先生も、比企谷先輩の説明を聞いたあとは真剣な表情に変わった。

「俺とか超犠牲でしょ。アホみたいの仕事させられてるし、ていうか人の仕事押し付けられてるし。これが『ともに助け合う』ってことなんですかね。助け合ったことがないんで俺はよく知らないんですけど」

一瞬の沈黙、そしてざわつき。

文実メンバーであれば、誰しもが胸に少なからずの鈍い痛みを感じているはずだ。

全員の視線とざわめきは一旦相模先輩に集まったあと、副委員長であり実質的な委員長でもある雪ノ下先輩に向けられてそこで止まる。

すると……………

……ふえ？

ゆ、雪ノ下先輩が！すっごいぶるぶるしてる!?

議事録で顔を覆い隠して机にうずくまって、すっごいぶるぶるしてる！

「比企谷くん」

ひとしきりふるふるし終えた雪ノ下先輩が顔を上げると、それはもう女の私が思わず見惚れちゃうくらい、ほんのりと上気した美しい笑顔だった。

「却っ下」

わ、わあ……素敵な笑顔だあ……

その美麗なまでの素敵な微笑みのまま比企谷先輩の案を打ち切るとすぐさま真顔に戻り、本日の会を終了させてしまった。

『以降の作業については全員全日参加にすれば、この遅れも充分取り返せる』との言葉を残して。

執行部と比企谷先輩を残して、その他大勢の私達は会議室を退出する。

その時、私は比企谷先輩の横を通り過ぎる人達が、わざと先輩に聞こえるように「あの人」「なんだよアイツむかつくな……」とかつて、とても冷たい視線を向けながら言ってるのを聞いてしまった……

そんな態度をとってる人達に限って、ここ最近ほとんど委員会で見かけない人達だったのが無性に悔しかった……

悔しかったんだけど……正直私もなんで比企谷先輩があんな言い方をしたのかが全

然分らないよ……

あんなに嫌そうな顔をしながらも、人一倍一生懸命お仕事してた先輩が、なんであんな言い方したの……？

先輩の言ってたことは本当に正しい。この場で反論出来る人なんて誰一人居ないくらいに。

でも……あの言い方じゃ……ただ自分が仕事したくないって文句を言ってるようにしか聞こえない……

私は、この先輩は本当はとってもいい人なんだろうなって思ってた。

でも今は……ちよつと分からなくなっちゃったよ……

そんな想いは、翌日にはあっさり打ち砕かれるとも知らずに。

「う……わ……」

翌日、HRが延びてしまい少し遅れて会議室に到着した私は、会議室に入室するなり我が目を疑ってしまった。

確かに今日からは全員全日参加との話にはなってたから、人が多いのは当たり前なんだけど、私が驚いたのは人の多さそのものよりも、その活気？モチベーションの高さ？

昨日までとは明らかに空気そのものが違っていた。

あれほど決らなかつたことが、その溢れ出るやる気によって次々と決まっていく。

昨日まででは絶対に有り得ない激論でスローガンが決まると、その熱も冷めやらぬままに各担当各担当で熱く意見交換し合う。

これこそが、本来の在るべき姿なんだろう……

『ごめんな、愛。でもみんながバラバラになっちゃった時つてさ、悪者が必要な時もあるんだよ……』

ぼんと優しく頭に乗せられたおつきい手の体温の記憶と、そんな言葉の記憶が頭を過つた。

そう。あれはまだ私が小さな小さな子供だった頃の遠い記憶……

× × ×

私のお兄ちゃんは子供の頃からサッカーが大好きで、いつも笑顔でボールと一緒に駆け回る、とても元気で格好良いお兄ちゃんだつた。

そんなお兄ちゃんが大好きだった私は、近くのサッカークラブでエースとして頑張っていたお兄ちゃんの試合を良く見に行っていた。

あの日、兄のクラブが試合した相手は地元ではとても有名な強豪クラブだった。

兄はそんな強豪と試合出来る事をずっと楽しみにしてたけど、チームのみんなは始めから諦めムードのなか試合に臨んでいた。

いつも兄にくっついて回っては試合を応援してた私にはすぐに分かった。兄以外の選手達がいつもと動きが全く違う事を。

どうせ頑張っても勝ち目が無いからなのか、明らかに普段よりもダラダラと動いていて試合は一方的だったつけ。

前半が終わって0対4。むしろ4点で済んでるのが不思議なくらいの酷い試合だった。

『お前らこんなにヘタクソだったつけ!?マジで最悪だわ!やる気ねーんなら、もうサッカーなんて辞めちばえよ!?ヘタクソばかりだとすげえ邪魔なんだよ!カカシが立つてる方がまだマシなんじゃね?』

そんな時、ハーftimeで兄がチームメイト達を罵倒した。

危うく乱闘騒ぎになっちゃうんじゃないかってくらいにチームメイト達が兄に詰め寄ったんだけど、監督さんがなんとか止めてそのまま後半に突入した。

後半が始まってからの兄のチームの連帯感は物凄かった。

前半のやる気の無さが嘘みたいに声を掛け合って激励しあって、結局試合には負けちゃったけど試合終了時のスコアは3対5と2点差まで迫ってたし、みんな全力を出し切れたからか満足さと悔しきで肩を叩き合っていた。

『かーっ！くっそー、惜しかったなあ！』『なー！あともうちよいだったのに！』『でも意外と俺らもやれんじやね？』『な！あそこそここまで渡り合えたんなら、次はヘタしたら優勝しちゃうかもなああ！』

——でも、もうその輪の中に兄は居なかった。

兄は離れた場所で、一人ポツンと立ちすくんでた……

いつも友達の写真の中心になっていた兄。

だから私はそんな光景を見るのが嫌で泣きながら先に帰り、帰って来た兄を大泣きして責めちやっつたんだよね……

『なんでお兄ちゃんあんなこと言ったの؟! もうあんなんじや仲間に入れて貰えないかも知れないじゃん!! 愛、もうあんなお兄ちゃん見たくないよお……!』

すると兄は私の頭を優しく撫でて、目の端に涙を浮かべて悲しそうな表情を必死に隠して笑顔を浮かべながら言ったのだ。



『ごめんな、愛。でも、みんながバラバラになっちゃった時ってさ、悪者が必要な時もあるんだよ………へへっ！でも大丈夫！俺はエースだもん！謝ればみんな分かってくれるって！』

にひっ、と笑顔を浮かべた兄の思いとは裏腹に、結局そのあとチーム内で居場所を失ってしまった兄は、冷たい視線と空気に傷付きサッカークラブを辞めて、そしてサッカー自体を辞めてしまった。

またサッカーを始めるようになったのは高校生になってから。

高校生になるまでの兄は、ずっと平気な顔をしてたけど、あの時の行為を心のどこかで後悔してたんだって、後々苦笑いしながら語ってくれたっけな……

今では笑い話になっちゃったけど、あの当時はとてもとても辛い経験だった。

× × ×

「……そっか」

文実メンバーが一致団結してお仕事を進める横で、誰にも話し掛けられず相手にされず、今までよりもさらに無言で仕事を押し付けられている比企谷先輩の面倒くさそうな

顔を盗み見ながら、私は兄と比企谷先輩を重ね合わせていた。

たぶんこれは、比企谷先輩の真意は、ちゃんと『比企谷先輩』を理解している雪ノ下先輩、雪ノ下先輩のお姉さん、平塚先生。そしてあの経験がある私にしか分からないんだらうな。

私みたいな偽物の天使と違って、純粹で優しいあの本物の天使の城廻先輩でさえ、比企谷先輩に対して落胆しちやつてるみたいだし……

胸が苦しくなる。

私はあの時のお兄ちゃんを見ているから。

周りの視線と態度に耐え切れず、次第にサッカークラブから離れていった、あのお兄ちゃんの前で辛そうな顔を見ていたから。

たぶん比企谷先輩も……次第にここには顔を出さなくなるんだらう。

全員参加とは言っても、仲のいい雪ノ下先輩や、ちゃんと比企谷先輩を理解してるっぽい平塚先生ならば、たぶんそれを許すんだらう。

だって……こんな視線の中で、毎日ここに来るのなんて絶対無理だもん……

すみません……比企谷先輩……

あんなことをさせてまで、こんなに辛い思いをさせてまで文実を救ってくれた先輩に、私にはなんにもしてあげられない……

「あはは！マジで良い気味だよなー。てか自分が仕事すんのヤダからってあんな暴言吐いたくせに、よくまだ顔だせるよねー、あの二年！ねっ、愛川さん」

「……………」

「あ、あれ……？」

同じ男の子なのに、あの先輩とこの人は違いすぎる……

私はこの時を境に、このクラスメイトの男の子とは口をきかなくなった。

× × ×

あれから二日経ち三日経ち、気が付けば一週間ほど経過していた。

そして私は異変に気付く。んーん？ホントはもつと前から気付いてた……

比企谷先輩が……ちゃんと毎日文実に来ているのだ。

他の文実メンバーからの視線も態度も何一つ変わらない。

むしろ仕事の押し付けが酷くなってるんじゃないかってくらい、相変わらずの酷い扱い。

今日もいつもと同じように無言で机に置かれては、うわあ……って顔して面倒くさそうに頭を掻いてお仕事してる……

どくんっ……

——あれ……？なんだろう……？

私は頭をぶんぶん振って「よしっ！」と立ち上がる。

比企谷先輩の元へ。

「あ、あのっ……せ、先輩……、こ、これちよつとでよければ、そ、そのっ……受け持ちますね！」

「……え？あ、ああ……えと、サンキューな」

「い、いえっ！また自分の分終わらせたなら……そのっ……お、お手伝いしましゅっ……す……ううっ……」

「ス、スマン、助かる……」

「ひゃいっ！」

——あ……れ？私、どうしたの……？

私は比企谷先輩の机に詰まれた書類をいくつか貰って慌てて自分の席へと戻ると、嘸んじやったからか恥ずかしくて真っ赤になつて居るであろう熱い熱い顔を、ブンって音がするんじゃないかってくらいにすごい勢いで俯かせる。

——ど、どうしよう……！私、どうなっちゃつて居るの……！？

私は必死に俯きながら、貰ってきた書類に目を通すふりをして、チラッと比企谷先輩を覗き見てみた。

いつもと同じ面倒くさそうな顔で、はああく……とため息を吐きながら、またパソコンの画面へと視線を向ける。

視線を比企谷先輩から外して、信じられないくらいにドキドキと高鳴る鼓動を必死に押さえ付ける。

——なんで？なんでこんなにドキドキするの……？

そして私はまたも比企谷先輩をこっそりと覗き見て、今までお兄ちゃん以外の男の子には感じたことなんてない感情のはずなのに、なんの迷い疑いもなく、お兄ちゃんに對してよりもずっと強いこの感情を自然と受け入れたのだった。

……………どうしよう……………格好良いっ……………

続く

## 愛川愛は一人感謝の頭を下げる

「……ちゃん?……愛ちゃん!」

「ふえ!」

「どうかした?急にボーっとしちやっってたけど」

「へ?あ、えつと……」

わわわっ!いけないいけない!

いろはちゃん見てたら、つい考え事しちやっってた。

「えつとね、んーん?なんでもないよ。ただ、初恋失恋記念に比企谷先輩との出会いを思い出してただけ」

「ぐうっ……」

えへへ、ちよつと意地悪しちやった♪

でもこれからいろはちゃんとの戦いは続いていくんだから、こうやってちよこちよこ  
と、ツンツン突ついてこうかなっ?

「なんか最近愛ちゃんが恐いんだけど……」

「うふふ、気のせいだよー」

「……絶対わざとやってるでしょこの子……」

なんだかいろはちゃんがぼしょつと嘆いてるけど気にしな〜い!

「……………えつと、出会いって事は、文実の時の?」

「えへへ、うんつ。私が男の人を格好良いな! って初めて思った時のこと。あと、初めて誰かを明確に嫌いと思えちゃった瞬間でもあったかも……」

「恐い恐いつ。愛ちゃんリアルで恐いからね! その表情と声……!」

んー、なんだか最近よく顔に出るようになっちゃったみたいだなあ。

クラスでも友達に「なんか愛ちゃん最近変わった?」って良く言われるようになったし。

ふふつ、誰かさんに似ちゃったのかも!

あの実行委員を決めるHRで変わりたいと思えた自分に、ほんの少しずつでも変わっていきけるのだとしたら、恋は破れちゃったけど、でもあの人に恋を出来たこと、そして告白出来たことは本当に良かったと思う。

「そんなことより、いろはちゃんはこれから生徒会?」

「うん。まあこの間平塚先生に缶詰めにされて、蓄まっていた仕事しこたま片付けさせら



れたから、大して仕事は残ってないんだけどねー」

「そっか。……えと、その……奉仕部は……？ どうするの……？」

たぶんいろはちゃんの告白は成功するんだろうなって思ってたから、気になってたことを聞いてみることにした。

いろはちゃんから比企谷先輩のお話を聞いている時から分かったことだけど、いろはちゃんは先輩のことはもちろん大好きだけど、奉仕部……雪ノ下先輩も由比ヶ浜先輩も好きなんだろうなって思う。

だから気になってた。

結果的に奉仕部三人の関係性を壊してしまうことになるいろはちゃんが、今後どうするのか。どう考えてるのか。

するといろはちゃんはその表情に一瞬だけ隠しきれない暗い影を落としかけたけど、それを誤魔化すようににぱつと笑ってこう言った。

「やー、さすがのわたしでも、しばらくは顔だせないかなー。……まあホラ！そこは先輩に任せてあると言うか押し付けてあると言うか、雪ノ下先輩たちの怒りは全部先輩に被って貰つていてー、わたしはこっそりと先輩の骨を拾う係？」

そうだよね……

いろはちゃんだって、思うところが無いわけない。

私は最初っから振られるの分かってたから当たって砕ける精神でぶつかって砕け散っちゃったけど、もし……もしもあの告白が上手く行っちゃったとしたら、いろはちゃんに合わせる顔なんて無かったかも知れない。

でも、恋は戦いだもん！

奉仕部の二人だつて、油断して悠長に構えてたからいろはちゃんに取られちゃったんだもん。それはやっぱり自業自得だと思う！

だから私は、いろはちゃんに『気にすること無いよ?』って意味合いを込めて、肩を優しくポンと叩いてこう声を掛けてあげよう。

「大丈夫！逃げ隠れしないで、いろはちゃんも正々堂々と比企谷先輩と一緒に骨になつてね！私が比企谷先輩の骨だけ拾うからっ」

「そんな素敵な笑顔で酷いっ!」

ふふふ……

振られた腹癒せにいろはちゃんをいじめるのは今日のところはこの辺にしといてあげようかなっ。

「ところで愛ちゃんはサッカー部のほう平気なの?」

「……あ」

すっかり忘れてたあ！

そういえば今朝もサボっちゃったし、胸も頭もいっぱい過ぎて、放課後も遅れるとかって連絡一切してないよ……

「どどどどうしよういろはちゃんっ……！ 私なんの連絡もしてないのに、朝も午後もサボり扱いになっちゃうよお……！ まあ朝は戸部先輩が悪いんだけど……それに今から行っても、平塚先生に呼び出されてただなんて、なんて言って説明すればいいのかな……!? ど、どうしよう！ 振られちゃったところから全部話さなきゃダメかなあ!？」

涙目になってわちゃわちゃしていると、いろはちゃんが悪戯めいた笑顔になって助け船を出してくれた。

「ふふふ、わたしを虐めてばかりだからそういう目に合うんだよ？ 愛ちゃん!……! しよーがないなあ、んじや今日のところはわたしも一緒に行つて、適当に嘘ついて説明してあげるよー。愛ちゃんに任せといたら、全部正直に話しちやいそうで恐いし。貸しだからねー」

「……ううっ……ありがとういろはちゃん!……! つて、今日のところはわたしも一緒につて、いろはちゃんだつてサッカー部員じゃない! いつも生徒会を理由に部活サボつて比企谷先輩のところに遊びに行つてたくせに!」

「あ……えへへ? バレてた?」

「バレバレだよ……う？もうっ！」

でも、いろはちゃんから比企谷先輩と奉仕部の事を教えて貰ったあの日までは、ちゃんといろはちゃんのこと信じてたんだからねっ!? ホントにもう！いろはちゃんったら！

「……貸しは、無しだよ……う？」

「……はい」

そして「ホント愛ちゃん怖いー」と真顔で恐れるいろはちゃんを引つ張って、私は部活へと駆け出すのだった。

——それにしても、たったの四ヶ月くらいの出来事のはずなのに、ホント懐かしいな。

あの日あの時、初めて比企谷先輩の事を格好良いなあ、って自覚しちゃった委員会から、なんだか世界が違って見えた。

恋をすると今までモノクロだった世界が美しく彩付き始めるってよく聞くけど、まさにそんな感じだった。

お仕事ぶりと功績からは有り得ないような文実での扱いに胸を傷めながらも、気が付いたらいつも目で追ってしまっていた。

でもその頃からは緊張で上手く喋れなくなっちゃった自分も自覚してたから、なかなか声も掛けられず、前みたいにお仕事を手伝うのも容易ではなくなっちゃってた。

だつて……ちよつと挨拶しようとしただけなのに「お、お疲れさまでしゅ!」とかつて囁んじゃうんだもん……

比企谷先輩が私の事を憶えてくれてたのが『こいつ変な奴だな』つて理由なんだとしたら、もう恥ずかしくて死んじゃいそうっ……

でも………そんな風に、ただ比企谷先輩を傍で見ているだけで幸せな気持ちでいられたのは、あの瞬間までだった。

あの日からしばらくの間は、比企谷先輩の事を想うだけで、胸が引き裂かれそうなくらいに苦しい日々が続いたっけな……

そう。文化祭二日目。エンディングセレモニーで起きたあの事件の瞬間まで……

× × ×

「ねえねえヤバくない!? ホントならもうエンディングセレモニー始まつてる時間だつてのに、相模さん居なくなっちゃったらしいよ!」

「は？マジかよ!?だから予定になかったライブやってんのか……なんだよあの女……委員会の中から居ても居なくてもいいような存在だった癖に、必要な時だけ居ないってなに？」

「オーブニングでも酷かったし、そもそも雪ノ下さんに全部持つてかれちゃってたから、可愛い自分がいたたまれな過ぎて逃げ出しちゃったんじゃない？」

……大変なことになってしまった。

あれだけ成功が危ぶまれた文化祭がせっかく上手くいったのに、最後の最後でこんな事になるなんて……

現在エンディングセレモニー直前の舞台袖では、文実メンバー達が慌ただしく動揺している。

どうやら、エンディングセレモニーの最終打ち合わせをしようとしたら、相模実行委員長がどこにも無かったらしい。

それから執行部が手分けして捜したらしいけど結局見つからず、今はついに時間稼ぎとして雪ノ下先輩を始めとするすごいグループの、予定の無かったバンド演奏が執り行われている最中なのだ。

由比ヶ浜先輩のボーカル、雪ノ下先輩のギター&ダブルボーカル、雪ノ下先輩のお姉さんのドラム、城廻先輩のキーボード、そしてまさかの平塚先生のベースと、とても即

興とは思えないような凄いライブで体育館中が盛り上がりつつあるんだけど、文実メンバーは勿体ない事にそれどころでは無かった。

『よろしくね』

そんな状態なんだと聞きつけて、私が舞台袖に到着した時は、ちょうど雪ノ下先輩の声援を受けて、振り返りもせず右手を挙げて体育館から出ていく比企谷先輩とすれ違ふところだった。

つまりはエンディングセレモニーが……文化祭が成功するかどうかは、比企谷先輩に託されたってことなんだろう。

雪ノ下先輩は、比企谷先輩なら誰も見つけられなかった相模先輩を見つけれらるって信じてるんだ。

やっぱり雪ノ下先輩は比企谷先輩を信頼してるんだなあ……やっぱり比企谷先輩は、あの雪ノ下先輩にここまで信頼される程に凄い人なんだなあ……

そんな謎の高揚感で、意味不明に鼻が高くなっちゃった気持ちと同時に、私はとても不安な気持ちも抱いてしまっていた。

相模先輩は比企谷先輩の事が大嫌いなのは一目瞭然。

仮に比企谷先輩が本当に発見出来たとしても、たぶん精神的な問題で全てを捨てて逃げ出しちゃったであろう相模先輩が、比企谷先輩の説得で戻ってくるの？

責任を放棄して居なくなっちゃった相模先輩は、今さら発見されて連れてこられても、皆に責められる事からは逃れられない。

それなのに、大嫌いな比企谷先輩が迎えに来たからって、大人しく従うなんて到底思えないよ……

それだけで済むんならまだいい。

でも、比企谷先輩は果たしてそれを良しとするだろうか？

答えは否。とてもそうは思えない……

あの人は絶対になんとかしてしまおう。それも、自分を投げ出しても……自分を悪者にして……

だから私は不安で仕方がないよ……

——神様、お願いしますっ……！どうか比企谷先輩に、スローガン決めの時みたいな辛い思いをさせないで……

× × ×



私は今、この光景を見て、——ああ……神様なんか居ないんだ——って絶望している……

だって、本当に神様が居るのだとしたら、こんな酷すぎるよ……

なんで？ なんであんなに素敵な人なのに、なんであんなに一生懸命やつてる人なのに、なんで比企谷先輩ばかりがこんな辛い目に遭わなければならぬの……？

「だいじょうぶー？」「あいつがなんか言わなかったら平気だったのね」「あれで調子くるったよねー」

無事とは言えないまでも、なんとかセレモニーを終えて舞台袖に降りてきた、涙まみれの相模先輩に寄り添っていく文実メンバーたち。

その人たちの目は、相模先輩を可哀想な目で見ると同時に、比企谷先輩に向けて隠そうともしない嫌悪の眼差しを向けている。

『……ううっ……』

『さがみん大丈夫!?!』

『ねえ！ みんな聞いてよ！ あのヒキタニ？ とかいう奴がさあ、南ちゃんに酷い暴言吐いてさあー！』

『スローガン時もそうだったけどさあ、あんなクズのくせして、さがみんに『かまって

ほしいんだろ?』とか『最低辺の世界の住人』とか『お前なんかその程度の存在』とかって言いやがって!きがみん超可哀想〜』

『ホント最低だよあいつ!』

即興ライブが終わりかけたたちようどその時、相模先輩は二人の友達に支えられて泣きながら戻ってきた。

最初相模先輩が現れた瞬間は非難の眼差しを向けた文実メンバーたちも、そのあまりにも酷い泣き顔と、二人の友達の相模先輩擁護とも比企谷先輩への罵りとも取れない悪態にすぐさま態度を軟化させて、あれほど相模叩きをしていた場の空気は、信じられない事に一気に相模擁護の空気へと一変した。

それと同時に、スローガン決めで悪印象のある比企谷先輩が、本来相模先輩が負うべき非難を一身に受ける形となってしまったのだ。

エンディングセレモニーを泣きながら締めた相模先輩が舞台袖に降りてきた時、責任を放棄して逃避した相模先輩に向けられた視線と言葉は哀れみ。

そして、誰も見つけられなかった逃亡者を捜し当てて戻ってきた比企谷先輩に向けられた視線と言葉は、侮蔑と断罪だった。

——なんで……？だつて、さつきまであなたたちは、散々相模先輩を非難してたじゃないっ……

さつきまで、居なくなった相模先輩の搜索を、比企谷先輩に一任してたじゃないっ……

なのに、なんでそんな風に相模先輩を気遣うフリが出来るの……？

なんで比企谷先輩に、そんなに冷たい視線を向けられるの……？

エンディングセレモニーも終わり、私たち文実も後片付けを終えて、ようやく長い長い文化祭が幕を閉じた舞台袖で、城廻先輩に悲しい笑顔でありがとうと言われた比企谷先輩の姿を見たとき、知らず知らず私の頬には涙がたつていた……

——比企谷先輩、お疲れさまでした……

私は、誰にも向けられる事のないであろう、比企谷先輩の真意と功績に対する親愛と感謝の意を込めて、少し離れた場所から、一人頭を下げるのだった。

続く

## 愛川愛は思いがけない遭遇を果たす

「ううう……今日もダメだったよお………えへへえ」

嘆いたりニマニマしたりと忙しい私は、現在自室のベッドにちよこんと腰掛けて、先ほど勉強机から大事に持ってきた写真立てとにらめっこしていた。

その写真立てに写っている私の初恋の人は、とつても面倒くさそうな顔をして、なぜか頭に包帯を巻いている。

頭に包帯なんていう物騒な写真を微笑ましげに見つめている私は、とてもじゃないけど人様にはお見せ出来ないですよね。

——あの文化祭から早二ヶ月。

季節は秋を通り越して、世間はすっかりクリスマスムード一色になっているこの12月。

私は相も変わらず自分の情けなさど闘う日々、に明け暮れている。

あの日から一体何度目だろう……校内で偶然比企谷先輩を見掛けたのは。

何度目だろう？ だなんて嘘ばかり！

ちよつと日記を開けば、先輩とすれ違った日にちも回数も全部書いてあるし、それどころかわざわざ日記を開かなくなつて、その内容は全部記憶してるっていうのにな。

そして今日もまた偶然校内で見掛ける事が出来た。

——ホントに偶然だよ!?

もう数度目にもなる廊下での偶然のすれ違いにも関わらず、私は今日も声を掛ける事が出来なかつた。

まあ比企谷先輩からしたら、覚えてもいないであろう私にいきなり声を掛けられたらビックリしちゃうだろうから、結果的にはいいのかも知れないけど。

そんな、今日も安定して情けなの無い私は、体育祭の棒倒しの時にこっそり撮影しちゃつた比企谷先輩の写真を見ては、嘆いたりニヤけたりしているのだ。

「体育祭……かあ」

思えば、文化祭が終わってからあの体育祭の日々までは、私にとって今までに無いほどの苦痛の日々だった。

×  
×  
×

文化祭が終了した直後、校内ではあるひとつの噂が囁かれるようになっていた。

——二年生に、校内一の嫌われ者がいる——

その二年生は文化祭実行委員にて、空気も読まずに文実メンバー全員に悪態を吐いて文化祭を滅茶苦茶にしかけた挙げ句、本番では一方的に女子を罵倒して泣かせた最低な人間……とのことだ。

よくもまああの場に居た人間が、あの出来事をそんな風に曲解出来て、さらには第三者に広められるものだな……と、立場が違えばある意味感心出来たのかも知れない。もちろん悪い意味でだけだ。

でも当時の私にはそんな余裕は一切無かった……

その噂が広まってくると、今度はクラスの子たちが文実だった私にその事を聞いてきたから……

『ねえねえ愛ちゃん！噂の最低な二年でどんなヤツう!?』

……私はそう聞かれる度に、もう本当の事を言ってしまうのか……? って、何度も何度も喉まで出掛けてたんだけど、それは出来なかった。

それをしてしまったら、比企谷先輩が自らを傷付けてまで解決させたあの行為を無駄

にしてしまうから……

たぶん事実が広まれば、次に矢面に立たされるのは相模先輩。

私としては相模先輩なんてどうでもいいし、むしろ比企谷先輩をあんな目に合わせた報いを受けたいとさえ思ってた。

でも、それこそが比企谷先輩の行為を否定してしまうことなんだって分かってたから、私は真実を誰にも話せなかった。

だから私はその質問を受ける度に決まって、

『私はあの先輩が悪い人には思えなかった。だから私はこの噂が嫌い』  
って答えてた。

たぶんその質問を受ける度に、知らず知らず不機嫌な表情が出てしまってたんだろ  
う。

幸運な事に、私のクラスではその話題が取り上げられる事はすぐに無くなった。

もう一人の文実の男の子も初めのうちは面白可笑しく、バカにした感じで受け答えて  
みたいだったけど、クラス内がそういう空気になった途端に自分も空気を読んだみた  
い。

もうあの頃はその人の事は無視しちやってたから、詳しくは分からないし興味もない  
けど。

こうして文化祭の嫌な噂自体はクラス内ではあんまり耳に入らなくはなっただけ  
ど、それでもクラス外ではちよくちよく耳に入ってきてた。

部活に行くと、戸部先輩が『それナニタニくん？』なんてけらけらと笑ってる度に、何  
度後ろからボールぶつけてやろうかと思ったことか！

……じ、実は一度だけ手が滑ったフリして、後頭部に思いっきりボール投げ付け  
ちやったりもしたんだけど……

『まなつちそれはないわー』って泣きそうな顔してたけど、あ、あれは戸部先輩が全面的  
に悪いんだもんっ！わ、私だって、あの時は涙目で膨れっ面だったんだからっ！

………うう………あの時は本当にすみませんでしたっ………！

結局ずっとモヤモヤした気持ちのまま、総武高校は次の大イベント、体育祭の季節へ  
と突入した。

モヤモヤしながらも、実は少しだけワクワクしてた気持ちもあったんだけどね。

文化祭以来、関わる事の出来なかった比企谷先輩と、もしかしたら関われるかもしれ  
ないっ！

関わる事が出来なくても、誰の目も気にせずに比企谷先輩の雄姿が見られるかもしれ



ないし、こつそり写真だつて撮れるかも！つてね。

でも、そんなワクワク感を一瞬で吹き飛ばしてくれくらいに意外な事があつた。比企谷先輩が体育祭運営委員でもお仕事をしてるつて聞いたこと。

しかも運営委員長が相模先輩という事にも驚いた。

——まさか比企谷先輩が、また相模先輩とお仕事をしているなんて……

ホントにあの人は、あれだけいつも面倒くさそうな顔してるのに、なんで自分から大変な目に合にいこうとするんだろう……

私は、比企谷先輩がまたあんな辛い目に合わなければいいけど……つて心配する一方、ああつ……！私もサッカー部代表として体育祭運営委員になつとけば良かった！……つて、毎日頭を抱えてたつけな。

× × ×

——体育祭の準備中に流れてきた運営委員の悪い噂は、比企谷先輩では無くて相模先輩のものだつた。

初日から遅刻したり相変わらず適当に仕事をしたりとで、委員長と生徒会側からなる首脳部側と、運動部員からなる実行部側での衝突の引き金になったらしいと、サッカー部代表の先輩方が毎日のように文句を言っていた。

先輩方のそんな文句を聞きながら、だったら私が委員会行くのに！とか、またあの人はそんな状況をなんとかする為に、一人で悪者にならないといいけど……とか、ただ一人が勝手に悩んでたって何の意味もないというのに、毎日のように一人で思い悩んでいるうちに、気が付けば体育祭の当日を迎えてた。

結果的に言えば、私の無駄な心配は杞憂に終わり、体育祭はととても盛り上がり無事に終わっていった。

ここでいう「無事」とはあくまでも比企谷先輩オンリーでの話で、体育祭自体は何事も無い完全な無事では済まなかったんだけどねっ。ふふっ、しかもたぶん比企谷先輩によつてね！

私はその日一日、自分が出る競技そっちのけで、あるひとつの事に集中していた。

それはもちろん比企谷先輩の雄姿を見ること！あわよくばその姿を写真に収めるこ

と!

……ホント私って、みんなに真面目とかって思ってもらえてるのが申し訳ないくらいにダメダメな女の子だなあ……

でも、いくら探せど比企谷先輩はなんの競技にも出てなかった……

よくよく考えたら、運営委員なんだから当日は忙しいに決まってるよね。

あまりにもガツカリしてトボトボと歩いてる時に、救護班のテントでまさかの発見をしてしまい、どうやってケガをしようかと何度画策したことか……

残念ながら? ケガを負うことが出来ないまままで肩を落としていた時に始まった棒倒しで、ついに比企谷先輩の順番がやってきた!

『わあ! わあ! ……がんばれっ……!』

両手をぎゅつと握ってぼしょぼしょと呟きながら、とにかく比企谷先輩だけに集中して応援してたらソレは起きた。

なんと、赤組の比企谷先輩が、なぜかポケットから包帯を取り出したかと思ったら、赤色のハチマキの上から包帯を巻いて、白組のフリをして棒まで一直線に歩いて行ったのだ。

比企谷先輩……あれは明らかに反則ですつつつ!!

結局比企谷先輩は、お友達らしきおつきな人と共闘して棒を倒して赤組を勝利に導いたんだけど、当たり前のように反則負けになりましたっ！まったくもう！

まあそんな様子を笑い転げながら見てた私も私だけどねっ。

……でも、今回の体育祭で一番意外だったのはこのあとの閉会式での結果発表の時だった。

『棒倒しですが、赤組白組双方に反則行為、危険行為が確認されたため、ノーゲームとし両チーム無得点とします』

具体的に、「誰が」「どんな」反則行為をしたのかと反発の声が上がるなか、そんな声を見捨てるかのように、早々と反則問題を打ち切る発表をしたのは、他にもないあの相模先輩だったのだ。

当時、正直私は信じられなかった。

だって……あの相模先輩が、そんな事をするだなんて……

全校男子が入り乱れるなに行われた棒倒しという競技において、いつ、どこで、どのような反則行為があったのだとしても、そんなの正確に分かるはずないし、一体どれが反則だったのなんか判断なんて出来ないはずだ。

でも明確に『反則行為があつた』と発表している以上、相模先輩の差す反則とは、比企谷先輩のあの反則だつたのは間違いないと思う。

であるならば、だ。

相模先輩は……私と同じく比企谷先輩をずっと見ていたつてことになる。

もちろんたまたまその瞬間だけを目撃したのかも知れないけど、あれだけ比企谷先輩を嫌つてたはずの相模先輩が、比企谷先輩を見てた……？

さらに信じられなかったのが、その反則行為を知つたはずの相模先輩が、大ブーイングの中の結果発表で、大嫌いなはずの比企谷先輩の行為に一切言及しなかつたこと。

私はあの結果発表の時、心臓が破けるんじゃないかってくらいにバクバクしてたし、たぶん顔面蒼白になつてたと思う。

……だつて……相模先輩は、あの場で絶対に比企谷先輩の名前と行為を発表して、批判を比企谷先輩に向けさせると思つたから。

でも相模先輩はそうはしなかつた。

あれだけ嫌つていた比企谷先輩をさらに陥れるチャンスだつたのに、運営委員長でもあり結果発表担当でもある自分に批判が集まることさえ厭わずに、頑なに比企谷先輩の名前は出さなかつたのだ。

相模先輩は相模先輩なりに、なにか思う所があったのかもね。

噂でしか聞いてないけど、この体育祭運営でもかなり揉めてたみたいだから、その時になにかあったのかな。

もしかしたら相模先輩は……また比企谷先輩と一緒にお仕事をしてるうちに、比企谷先輩の優しさや強さ、そして文化祭の真実にも気が付いたのかもしれない。

そんなのは単なる私の憶測にしか過ぎないことだけど、文化祭が閉会して以来ずっとモヤモヤしっぱなしだった私の心は、あの体育祭の閉会式の、大ブーイングを受けながらも満足そうに壇上から降りていく相模先輩の表情を見て、ようやくスツと軽くなった気がしたのだった。

「……………ん？……………あ、あれ……………？わああ！？も、もうこんな時間！？」

写真立ての中の愛しい人を見つめながらあの当時の記憶に思いを馳せてたら、気が付けば目を軽く跨いでいた。

うう〜っ……………明日もマネージャー業務が忙しくて大変だろうから早く寝なきやつて思ってたのいい……………！

ああっ……早くお風呂入ってもう寝なくちゃっ……

——そう。

この所、マネージャーのお仕事がすごく忙しいのです！

いろはちゃんが、なんとあのいろはちゃんが……生徒会長になってしまったからっ

……！

× × ×

翌日。

いつものように忙しく朝練を終わらせて寝呆けまなこで授業を消化し、気が付けばもう午後練の時間。

はあ……今日の午後練も忙しいんだろうな……早くいろはちゃんの居ない部活に慣れないとなあ……

ていうか……もう！あの子達がお仕事したくないのは分かるけど、葉山先輩たちも、ちよつとくらいあの子達に注意してくれたらいいのに……！

まあ、私もちよつと恐くて注意出来ないような情けない立場だから、人のことなんて

言えないけど……

……って、あれ？

「いろはちゃん？」

「あ、愛ちゃん。ここんとこ全然出られなくてごめんね！」

「んーん？別にいろはちゃんが悪いわけじゃないんだから気にしないでっ。ところで今日は部活出られるの？……なんか海浜総合高校さんとのクリスマスイベントが大変なんじゃなかったっけ？」

いろはちゃんが生徒会長に就任したのはつい先日。

就任してからたったの数日で、他校との合同イベントなんてとっても大変そうなものを任せられちゃってるみたい。

クラスメイトからのイタズラで生徒会長に立候補させられちゃったいろはちゃんは、当初はなんとか生徒会長にならなくて済むように、平塚先生や城廻前生徒会長に助けを求めてただけど、気が付いたらいろはちゃんは自ら生徒会長になることを選んだみたい。

詳しくは聞いてないけど、どういう心境の変化だったのかな。なんか、生徒会長になるうと決めた日あたりは『意外と面白いのかも♪』って、ちよつぴり悪そうな笑顔と声で言ってたけど。



うーん……決して男の子には見せないようなああいう笑顔と声だけど、普段からそういうのもちゃんと出せば、いろはちゃんはもつとずつと魅力的だと思っただけだなあ……

男の子にとってはそうでも無いのかな……？いつの日か、そういう素のいろはちゃんの良さを分かってくれる男の子に出会えるといいんだけど。

あ、でもいろはちゃんは葉山先輩が好きなんだっけ。

「……んー……大変だからこそ……現実逃避？」

「現実逃避でお仕事するの!？」

……一体、どれだけ大変なのかな……？

そう私が密かに心配をしていると……

「……まあ便利な駒を投入したんだけどお……それでもなかなか厳しくってさあ……」

な、なんだろう？便利な駒って……

「そ、そっかあ……私にはよく分からないけどお疲れさまですつ！えへへ、なにはともあれいろはちゃんが来てくれるとホント助かる！」

「あー、でもごめんね！気分転換にちよつと寄っただけだから、ホントにちよつとだけしか居られないんだー」

「んーん？ふふつ、ちよつとだけでもホント大助かりっ！じゃあいろはちゃんが居てく

れるうちに、色々やっちゃおう！」

「だね、やっちゃいますかー！……あの役立たずのバカ女どもが目障りだけど」

いろはちゃん黒いよっ……！

いろはちゃんが来てくれたのはほんの30分くらいだったけど、こうして何日ぶりかに久しぶりに楽しいマネージャー業務を進められたのでした。

× × ×

「はいー！……までですー！ドリンク用意してあるので、一旦休憩入りまーす」

ストツプウオツチで計った時間になったので、ピイイっとホイッスルを鳴らして選手たちに休憩を促す。

「かー、ちかりたあー！」「喉渴いたあ……」「愛ちゃんタオルー」

各自思い思いに休憩に入る中、私は次なるお仕事タオル出し！

ちなみに今日はあと二人の女子マネは体調がすぐれずに欠席とのこと。はあ……

「はいー！どうぞー！」

「サンキューー」

「お疲れさまですー！」

「あんがと愛ちゃん！」

目まぐるしくタオル出しをしながら、いつもなら一番騒がし……元氣な戸部先輩が居ない事に気が付く。

「？」

おかしいな。いつもなら真つ先に『まなっちタオルちようだーい』『俺のドリンクどこー』って騒ぐのにな。

ふとグラランドを見渡してみると、戸部先輩が離れた所で制服姿の男子とお話してるのが確認出来た。

あ、お客さまが来てるのかー。

じゃあとりあえず戸部先輩はほつといてもいいかな？

じゃあ次はつと……

「葉山先輩、タオルどう……」

「隼人くん、いろはす、知らね？」

ちようど近くに居た葉山先輩にタオルを渡そうとした時だった。遠くから戸部先輩が葉山先輩に、いろはちゃんの居場所について大声で尋ねてきたのだ。

ん？戸部先輩とお話してる男子生徒が、いろはちゃんに用事があるのかな？

でも残念ながら、いろはちゃんはいさつき上がったばかりなんだよね。

そう思いながら、私の視線は自然と戸部先輩の方へと向く。

……どくんっ……!!

「ああ、ありがとう、愛」

そう言つて、葉山先輩が先ほど私が差し出したタオルを受け取ろうと手を伸ばしてきたんだけど……もう、私はそれどころじゃ無かった……

いろはちゃんを探す戸部先輩と……そしてお客さまの姿をしっかりと見てしまったから……

……なっ!!?なんで!?

なんで比企谷先輩がここに居るの!?

続く

# 愛川愛の記憶は、ついにあの日を迎える

想像も妄想もしていなかった比企谷先輩の突然のサッカー部訪問に、私はパニックになりかけた。

な……なんで比企谷先輩がここに居るの!?

葉山先輩が親しげに比企谷先輩の元へ向かって行ったけど、あの二人って仲がいいの!?

でも確か葉山先輩ってあの文化祭での事件で、相模先輩を庇って比企谷先輩を責めた王子様みたいな扱いを受けてなかったっけ!?

だとしたらその時の比企谷先輩の身を挺した作戦のグルって事なのかな!?

……お、落ち着いて私っ!……今はそんなことよりもっ!……な、なんで比企谷先輩というはちゃん関係してるの……? ……?

どこにも繋がりにゃない……よね……? ……?

なのに、なんで比企谷先輩はいろはちゃんを訪ねてきたんだろう……

私はあの二人が一体なんのお話をするのかがどうしても気になってしまい、ばれないように、静かに静かに比企谷先輩達の方へと近づいていく。

目が合うと葉山先輩に悟られちゃいそうだから、後ろ向きになって、すすすいっ……と。

ほんとに盗み聞きなんかしちやダメなの！ダメ……なんだけどおっ……身体が勝手に動いちゃう……

「なかなか大変そうだな。生徒会に頼まれていろいろやっているんだろ？いろはのことよろしく頼む」

葉山先輩のその言葉は、比企谷先輩がなぜここに居るのか？という疑問に次いで、またさらなる予想外だった。

生徒会……？なんで生徒会……？

比企谷先輩が生徒会関係者だなんて、聞いたことも無い……けど……

「なんだ、知ってんのか」

その一言で、比企谷先輩というはちゃんが生徒会絡みの知り合いであることは間違いなさそう。

「ああ。何をやっているかは言わないけど、忙しいっていうのは匂わせてくるから」  
「つつーか、わかってんならお前が助けてやれよ」

「別に頼まれたわけじゃない。頼られたのは君だろう」

どうして比企谷先輩が生徒会関係のお話に出てくるのかは分からないけれど……少  
なくとも、いろはちゃんは葉山先輩よりも、比企谷先輩の方を頼ってるってことなんだ  
ろうか……

「うまく使われてるだけだろ」

「頼られたら断らないからな、君は」

ああ……そういうことか……

どうして比企谷先輩といろはちゃんが知り合いなのかは分からないけど、いろはちゃ  
んは比企谷先輩がとつても真面目で優しい人だって理解してるんだ。

だから生徒会のお仕事を頼って手伝って貰ってるのかな。

「まなつちー！俺のタオル知んねー？あとスポドリ俺のぶん飲まれちつてんだけどー！  
まじないわー」

まだまだこのままお話を聞いていたかったんだけど、どうやらもうタイムアップみた  
い……。もー！戸部先輩のばかあつ……！

まだ続きそうな先輩方のお話に残る髪を引かれつつも、お仕事なのだからお仕事に集中しなくちゃ！と、今にも誘惑に負けちゃいそうな自分を鼓舞して戸部先輩の元へと走り出す私。

でも、そのあと戸部先輩に対するタオル出しが雑……というか乱暴になっちゃったのは内緒……っ。

ちなみに飲まれちゃったというドリンクを再要求してきた戸部先輩には、黙って水道へと指を差しましたっ。

……ホントはそういうのはいけない事だっけ分かってるんだけど、ナニタニくんの件といい今日みたいな間の悪さといい、戸部先輩なんて知らないんだから！もう！

……それにしても……なんでか知らないけども、比企谷先輩がグラウンドに現れてから何回か目が合っちゃったよ！

なんで私のこと見てたのかな!?もしかしたら私のこと憶えてたりして！

いや、単純に私が見すぎてたから気になったのかも……うー、引きつった顔を真っ赤にしてる変な子とかがって思われちゃったかなあ……？

そんな馬鹿なことを考えて頭の中がぼわぼわしていると、気が付いたら比企谷先輩は



グラウンドから立ち去っていた。

× × ×

「あああ……振られちゃったなあ……」

分かってたことだけど、いざ家に帰ってきてから実感すると、やっぱり心に来るモノがある。

それに……いろはちゃんに取られちゃったしな……

バレンタインデーの夜に一人寂しく、体育座りのようにギュツと身体を抱き締めお風呂に浸かりながら、玉砕しちゃった事、いろはちゃんに一旦……”一旦！”取られちゃった事を涙目になって思い出してらうちに、それまでの色んな出来事も一緒に頭の仲を駆け巡っていた。

文化祭後の事だったり体育祭の事だったり。

特にあの日、比企谷先輩というはちゃんの繋がりを初めて知っちゃった時の心の揺らぎを。

結局あの後は、生徒会のお仕事で忙しそうないろはちゃんとは中々会う機会が持てず、比企谷先輩のことは聞けなかった。

違うよね。顔を合わせられた時も、緊張しちやって結局聞けず仕舞いだったもん。会う機会が無かったなんて単なる言い訳。

コミュニティセンターでのクリスマス会にはいろはちゃんに呼んで貰えて、葉山先輩とのお話を聞いた感じだともしかしたら比企谷先輩も来るのかも！って、すつごく行きたかったんだけど、残念ながらクリスマスは家族でお父さんの実家に帰省するって前々から決まってたから行けなかったんだよね……

そのまま冬休みに突入してからも、クリスマスが大変だったからかいろはちゃんは部活には顔を出さなかったし、冬休みが明けてからも部活に出てこなかったから、ずっと悶々としてたっけなあ……

ていうかいろはちゃんてば！

あの頃は生徒会のお仕事大変なんだろうなって心配してたのに、実際は単に比企谷先輩の所に遊びに行ってただけなのと、もう葉山先輩には興味が無くなっちゃったからなんだよね!?

もう！信じてたのにつ………ん、んー……でもその気持ちはすぐ良く分かります

……

『……わ、私につー……ひ、比企谷先輩を……紹介して、もらえない……か、な……?』

比企谷先輩への記憶を巡る旅が、ようやく一週間前くらいまで辿り着いたその時、私の脳裏にはほんの少し思い出しただけでも、誰もいないのに恥ずかしくて顔を覆い隠したくなるようなこのセリフへと行き着いてしまった。

「……ふええ……恥ずかしいよう……ぶくつ……」

あまりの羞恥に思わず顔を半分ほどお湯の中に入れてぶくぶくしてしまった。

思えば、あのセリフは私の今までの人生の中でも、飛び抜けて色んな決意が必要なセリフだった。

もつともあのセリフを言ってしまったので以降は、今日までのあいだ毎日決意のセリフまみれになっちゃったけどねっ。

あの時のいろはちゃんの驚いた顔……そしてそれから比企谷先輩の事を身振り手振りですつても楽しそうに、でもどこか苦しげに教えてくれたいろはちゃんの顔は、たぶん一生忘れられないと思う……

……あのとき、初めて自分がこんなにもずるい人間なんだな……つて、実感できたから。

そして私は今ひとたび記憶を巡る旅に出よう。

比企谷先輩との再会のあの日から、今日のみつともない告白劇までの、運命の一週間の記憶へと。

………のぼせて全裸のまま倒れちゃわないように気を付けなくっちゃねっ……！

× × ×

四時限目終了のチャイムが校内に鳴り響き、私の心臓が破裂しちやいそうなくらいに跳ね上がる。

ついに来ちゃった……この時がっ……

「愛ちゃん。お弁当食べよっ……え？ま、愛ちゃん？」

「え!?愛ちゃん!?ど、どしたのこの娘!?!」

「わ、分かんない……なんか朝から様子は変だったけどね……」

私の周りではなんだかお友達が「おーい……?」とかって騒いでるみたいなんだけど……もう私の頭の中はそれどころでは無いのです……ごめんなさいっつっ!

どどどどうしようっ……なんか目がぐるぐるするよお……

たぶん今の私は、まるで卒業式に臨む卒業生のように、まるで面接に臨む新卒者のように、微動だにせずピシッと固まってるのだろう。

そんな時、突然クラスの男の子から声が掛かったのだ。

お友達が私を心配して掛けてくれる声は、まるで自分が水の中にも居るかのようにグワングワンと頭に響くばかりで全然聞き取れなかったのに、その男の子の声だけは、やたらとはつきり聞こえた。

「あの、愛川さん……C組の一色さんが呼んでるんだけど……」

「!? ひ、ひやあいつ!」

がんっ!!

びつくりして飛び上がりそうになって立ち上がると、思いつきりに足をぶつけてしまった。

ふええ……痛いよお……

とりあえず落ち着こう!と佇まいを整えようとすると、鞆を落としちやつて中身が床に散らばる。

は、恥ずかしいっ……

真っ赤になりながら、震える手でなんとか中身を全部拾いあげて、いろはちゃんへと歩を進めようとする、今度はなんだか歩調がぎこちなくてつまずいてしまう。

それでもコケちゃいそうになるのをなんとか耐えぬき、私はようやくいろはちゃんへと辿り着いて笑顔を向けた。

「いいいろはちゃんっ……おまおまお待ちしえっ！」

私ダメかもしれない……

口がまともに回らないし、顔がすごく引きつってるのも分かる。

「ちよっ……ま、愛ちゃん、大丈夫……？ 今日はやめとく？」

「ふえっ……うい、行くよ？ ぜ、全然大丈夫だよっ？」

……だ、大丈夫なわけ無いけど……だけどっ……！！

……たぶん今日を逃したら、今日逃げちゃったら、私は一生比企谷先輩の隣には居られない気がする。

そう決心しながらも、いろはちゃんに連れられるままに徐々に比企谷先輩の元へと近づいて行ってるのかと思うと、全身がどうしようもなく震える。

情けないことに、私は隣を歩くいろはちゃんの制服の袖をギュツと握って、涙目で話し掛ける。

「……………どうしようっ……………いろはちゃん……………私、なにをお話すればいいのかな……………」  
ていうかお話なんて出来るの？私……………

口が回らなくて噛みまくる未来しか見えないよ……………

「大丈夫だよっ。まずはわたしの友達ですよっつて紹介して、あとは先輩とわたしで適当に喋ってるから、余裕が出てきたら会話に交ざってくればいいし、無理そうなら今日はまだ顔だけでも覚えてもらえばいいんでしょ？」

「う、うんっ……………いろはちゃんありがとうっ」

本当にありがとう、いろはちゃん……………

震える手も竦む足も、いろはちゃんの袖を握っていると、ほんの少しだけ和らぐ。

ガタガタと震えが止まらないまま、永遠とも思えるほどの長い時間を掛けて連れられていったのは、購買から程近い校舎外。

そこには、あの文化祭の時からずっと夢にまで見ていたあの人が一人で座っていた。

——あの日、初めて男の人を格好良いなって思えてから四ヶ月。

ついに、私と………初恋の人との邂逅が始まる……

続く



## 愛川愛はライバルに決意を宣言する

『あ、愛川と申ひまひゆっ……！ひゃ、ひゃひゃがいやしえんぴやいきよんにちやつ  
……』

……我ながら酷すぎたよね。

私と比企谷先輩の邂逅の記憶は、あの酷い自己紹介の時点で一旦途切れちゃったくらいだもん……

でも……自分が思ってたよりもずっとずっと酷い邂逅だったけど、ホントにお話出来て良かった！

噛みまくっちゃって死ぬほど恥ずかしかったけど、嫌われるの覚悟で酷いこと言っちゃったりもしたけれど、ちゃんとお話出来た。ちゃんと自分のことを比企谷先輩に伝えられたって思う。

でも……

比企谷先輩とお別れしてから教室までの帰り道、私の心中ではとても満足な気持ちと、とても複雑な気持ちがあつていた。

満足な気持ちはもちろん比企谷先輩とたくさんお話出来たこと。

複雑な気持ちは……今私の隣を歩いているいろはちゃんが、道中で一言も口にしないこと。

いろはちゃんに比企谷先輩を紹介して欲しいとお願いした時からもしかしたら思つてたことだけど……さっきの、比企谷先輩とお話してるいろはちゃんを見ていたら、そのもしかしたらが一瞬で確信に変わった。

やつぱり、いろはちゃんが好きなのは葉山先輩なんかじゃなくて、いろはちゃんがホントに好きなのは……比企谷先輩なんだね……

あんないろはちゃんは初めて見た。

普段男の子とお喋りする時は、もっとこう、可愛く居ようと、愛されようとしてる気がする。

だからなのか、男の子の前では本当のいろはちゃんを見せてはいない。

たぶんいろはちゃんが素を見せてるのは、限られた同性の友達の前だけなんだと思う。

でも比企谷先輩に対してだけは全然違ってた。

思いつきり素を見せながらも本当に楽しそうで、むしろ私や他の同性の友達に対してよりも本当の自分を曝け出してるように思えた。

どうでもいい……って言っちゃったらすすがに失礼かもだけど、戸部先輩に対してだけはかなり酷い扱いをしてる気もするけど、“それ”は比企谷先輩に対してとは全然別モノなんだよね。

戸部先輩に対しては、基本は可愛い後輩を見せながらも、ホントはどうでもいいって感じで接してるのに対して、比企谷先輩には、なんか安心して自分を曝け出してるような……この人なら大丈夫って、この人なら本当の自分を見せても全て受け入れてくれるって信頼してるんだなあ……って、すごく感じられた。

——いろはちゃんは、なんで私を大好きな先輩に紹介してくれたんだろう？

友達だから？

お人好しだから？

今さら私を紹介したところで、大した障害にはならないって思ったから？

分からない。分からないけど、たぶんどれも合つてて……でもどれも違うような気がする。

もつと根本的な何か……私には分からないけど、たぶんそれはいろはちゃんが比企谷先輩に惹かれた理由と関係あるんだと思う。

だって、普通いくら友達だって、いくらお人好しだって、いくら大した障害にならないって思ったって、好きな人に好きな人を狙ってる女の子なんて紹介なんか出来るわけ無いもん……あんなに苦しい顔してまで……

それでも、いろはちゃんは比企谷先輩と私がお話出来るチャンスを与えてくれた。

とても嬉しくてとても有難くて、そしてとても心苦しいけど、私はいろはちゃんに告げなくちゃならない。

感謝の気持ちと……

「……いろはちゃん……今日は本当にありがとうございました。私、ちゃんと比企谷先輩とお話出来てホント良かったっ……ま、まあ嘸み嘸みすぎてちゃんとお話出来たかどうかは疑問なんだけどねっ……あく恥ずかしかったあ……えへっ……恥ず

かしかつたし情けなかつたけどつ、でもホントに良かった……！やつぱり……比企谷先輩はとつてもとつても素敵な人だった……」

「……………」

「だからホントにありがとう！私、頑張るっ！……雪ノ下先輩とか由比ヶ浜先輩とか、あ、あとは……………んーん、なんでもない。……………とにかく……私頑張るからっ……勝ち目なんて無いの分かってるけど、でも頑張るからっ……だから、だから私……負けな  
いよっ……………」

「宣戦布告を……………」

「なんでいろはちゃんが本当の気持ち……本当の好きな人の事を言わないのかは分からない。」

「いろはちゃんにも色々事情があるんだろう。」

「でも、いろはちゃんがその事を言わないのなら、言えないのなら……私はそれを利用する。利用してやる。」

「いろはちゃんの気持ちを知らないフリして、抜け駆けでもなんでもして、私は比企谷先輩との距離を少しでも縮めてみせるよ？」

私はもう、ズルくたつて汚なくたつて構わないよ、いろはちゃん。勝ち目のない戦いに臨む以上は、もうなりふりなんて構っていられない。恋はバトルなんだもん……！

しつかりといろはちゃんの目を見て気持ちを全部言い切つて、いろはちゃんに背を向けた私はぱたぱたと自分の席へと戻る。

んー……でも慣れない事はするもんじゃないよね。

いろはちゃんに負けない宣言を叩きつけて戻ってきた私は、クラリと目眩をおぼえて、ぱつたんと机へと突つ伏してしまう。

「ま、愛ちゃんどしたの!」「大丈夫!」「一色さんとなにかあつたの!」

机にくてつとなつた私を心配してくれる友達に、不安と高揚が入り交じる引きつった笑顔で、でも信念を込めた力強い瞳で私はこう答えるのだった。

「んーん、なんでもないよっ!ふふっ、ただ………絶対に負けないんだから!つて言つてきちやつただけっ!えへへっ」

決戦は金曜日ならぬ明日の木曜日から始まる……!

明日、私は比企谷先輩と二人つきりでお話してみせるんだから！

× × ×

四時現目終了のチャイムが校内に鳴り響いたと同時に、私はあの場所へと歩み始める。

すつごいドキドキするけど、すつごい足が震えるけど、もう昨日のこの時間ほど酷い事もない。

だって、もう迷いは無いもん。

昨日お話してみても、改めて比企谷先輩が素敵な人なんだって知れたから。

そんな比企谷先輩に憶えて貰えて、頑張りを見てくれてたってことも知れたから。

だからもう昨日みたいに嘸み嘸みで酷い会話にはなんないと思う。

迷いが無くなった女の子の強さを、比企谷先輩に見せてあげるんだからっ。

……ホントはゆうべお昼のこと思い出して、お布団被ってゴロゴロと悶えたり、比企谷先輩の写真と見つめ合って、嘸まないように夜遅くまで会話の練習したりしたなんて事は、絶対に……ぜーったいに誰にも言えない、私だけの恥ずかしい秘密っ……

どつくんどつくんしながらたどり着いたベストプレイス?にはまだ先輩の姿は無く、私は昨日比企谷先輩が座っていた場所の隣にちよこんと腰掛けた。

二月の寒空の下、校外にあるこの場所で、さらに冷えきったコンクリート製の階段に座るのは正直気がひけたんだけど、今は心情的な問題で心も身体も熱すぎるくらいに熱くなってるから、このひんやりするコンクリートが思いのほか心地いいかもつ。

比企谷先輩は、今ごろ購買でパンとか買ってるのかな?

ホントは、今日先輩分のお弁当を作ってこようかどうしようか、朝からすつごく悩んでいた。

作ってきたかったんだけど……でも昨日の今日でいきなりお弁当作つてくるとかさすがに引かれちゃうよね……って悩んだ末に、今日は泣く泣く止めておいたのだ……

うー……私もいろはちゃんみたいに、手作りのお弁当食べてもらいたかったなあ……!

でもでも!もし今日の二人っきりのランチが上手くいったとしたら、明日作つてきましようか!?なーんて提案出来ちゃうかもつ!えへへつ。

「お、おう、愛川じゃねえか……。マジで来るとは思わなかったわ……」



「ひいつ……!?」

「いやお前、いくらなんでも悲鳴は無いでしょ……」

不意の声掛けにびつくりしたけど、私はすぐさま立ち上がってペコペコと頭を下げ  
る。

「わわわっ!!ち、違うんです違うんですすみません……!ちよつと考え事してたので油  
断してたといいますが不意打ちにびつくりしたといえますか……」

あわわ……なんてことだろう……!

比企谷先輩を待つ間に比企谷先輩のことを考えてたら、夢中になりすぎて到着に気が  
付かなかつただなんて……あまつさえ悲鳴まであげちゃうだなんて……私最悪だよお  
……

「……ああ、いや、なんだ……気付いて無かったところに、いきなり声掛けちまった俺も悪  
いから気にすんな」

「そそそんなこと無いですっ!ここは比企谷先輩の場所なのに、そこで勝手に待つてた  
私がボーつとしたのが一番悪いんですからっ!」

「いや別にここは俺専用の場所ってわけでも無いしな。ほんとすまん」

「な、なんで比企谷先輩が謝るんですか!?せ、先輩はなんにも謝ることなんて無いんでや  
めてくださいっ……!」

……？

なんで私達はお互いにペコペコと謝り合ってるんだろ……？

なんだか意味が分からなくて、ちよっと可笑しくなってきた。ちよつた。

ふふっ、でもおかげで少しだけリラックス出来たかも。

うん！これならちゃんとお話出来そう……かもっ。

だから私はこれからのランチを少しでも楽しめる為の皮切りにと、昨日まともに出てこなかった分、ペコリと頭を下げてきちゃんと挨拶をするのだった。

「えと……お言葉に甘えて今日も来ちゃいました……あの、比企谷先輩っ、こんにちはです！」

× × ×

謎の謝罪合戦とご挨拶を一段落させると、私達は隣り合わせに腰掛けてランチタイムを始めた。

昨日は間にいろはちゃんが居たからまだ良かったけど、さすがに隣に座るって恥ずかしい……

だから私達の間には一人分くらいスペースを空けてるんだけど、それでも昨日よりはずつと近くに感じる。

緊張でなかなか話掛けられずに黙々とお弁当を食べているだけの私だけど、私にはもうほとんど時間が残されてはいないから……バレンタインまでもう四日しかないから……

だからほんの少しだけでも距離を縮めなきや！頑張らなくちゃ！

もし、もしも今ここにいろはちゃんが出来ちゃったら、たぶん私は空気になっちゃう。

もうこんな状態なんだもん。いろはちゃんだってガンガンに攻めてくるはずだもん。

だからもしいろはちゃんが来ても、ここに入つて来づらいと思えるくらいに楽しく盛り上げなくちゃ、私には付け入る隙なんてないんだもんね……

「……あの」

「ん？お、おう」

「昨日の今日なのに、ホントにお邪魔しちゃってすみませんっ」

「……それこそ別に謝る必要なんて無いだろ。昨日も言つたように、ここに来るも来ないも個人の自由だしな。……まあマジで来るとは思わなかったが」

「……そ、そのっ……いつもお弁当は教室で食べてて、昨日お外で食べてみたら結構気持ち良くてハマっちゃいました……あ、あはははは……」

「気持ちいいって……こんなところで食ったってただ寒みーだけだろ……」

「そ、それを言ったら比企谷先輩だって、寒い思いしてここでお昼を過ごしてるじゃないですか……!」

「俺は教室で食ってる時のクラスの連中からの寒い眼差しよりは、外の空気の寒さの方がマシだから我慢してるだけだ」

「ふふつ、もう!比企谷先輩ってば!」

「いや、別に冗談とかのつもりで言っただけでは……」

「大丈夫ですよ。私、女子マネで朝も日が暮れてからも外で立つてる事が多くて外の寒さには慣れてるんで、お昼のこんな寒さくらいへつちやらなんですよ?全っ然我慢出来ちゃいます!」

「そうか。……って気持ちいいんじゃないかねえのかよ。我慢しちゃってんのかよ」

「……あ。えへへ」

わあっ……私ちゃんと楽しくお喋り出来ちゃってるよっ!

ていうか……信じられないくらいに楽しい……!こんなにも楽しいんだ、好きな人と過ごせる時間って。

こうして、私と比企谷先輩の初めての二人っきりのランチは、心配してた気持ちとは裏腹に、とても穏やかに、とても幸せに過ぎていったのだった。

一度この幸せを知っちゃったら……もう、あとには戻れそうもないよねっ……

続く

## 愛川愛は想いを解き放つ

「うんーこれでよしっ」と

現在時刻はAM0:20過ぎ。

夢中に作業してうちに、いつの間にか日付は変わっていたみたい。

日付が変わった。それはつまり、今はもう2月14日ということ。

「……わっ……もう寝なくちゃ……」

明日も……というかも今日か。

今日も朝は早いのだ。部活はお休みさせてもらうけど。

なぜなら私は今日、比企谷先輩に告白する。

勝ち目なんかひとつもない告白だけど。

それでも……もしかしたらっていう、万が一っていう、ほんの少しだけの希望にすがって、誰よりも早く、雪ノ下先輩よりも由比ヶ浜先輩よりも、そして……いろはちゃんよりも早くチョコを渡したい。

そんな、ほんの僅かだけの希望にでもすがらなきや、先輩に告白するだなんて勇氣、意気地なしの私には持てないもん。

だからそのちっぽけな、ひとカケラだけの勇氣が持てるように、私は誰よりも早く比企谷先輩に会わなきやならないんだ！

私は、さつき作り終わって今ラッピングしたばかりのチョコをそつと机に置いて、明日の戦いに備えてもぞもぞと布団に潜り込むのだった。

× × ×

しん……と静まり返った、まだ真つ暗な冬の朝の空気は、普段であれば刺すような痛みを伴うほどに身を凍えさせる辛いものだけれど、今の妙に火照った身体には少しだけ心地好いと感じてしまう。

結局一睡も出来ず、ポーっとぼわぼわしているようでもあり、でも冴え渡っているようでもある私の頭は、緊張のしすぎでちよつと麻痺してるのかもしれない。

「寒っ……」

とはいえ、いくら心地好いなんて言ってみたって、やっぱり寒いものは寒いのだ。早

く学校に行こつと。

まあ学校に着いたって、私は結局のところいつ来るかも分からないあの人を、寒空の下ずっと駐輪場で待つてることになるんだらうけどね……

「えーつと……」

「件名：おはようございます」

本文：早朝から失礼します、愛川です。

誠に急で申し訳ないのですが、どうしても外せない急用がありまして、本日の朝練を休ませて頂きたくご連絡させていただきました。

私は葉山先輩のアドレスを知りませんので、お手数ですが葉山先輩にお伝えしておいていただけると助かります。

それではメールより失礼いたしました。」

「これで、よし……う？」

ホームで電車を待つているあいだにお休みを伝える準備。

ホントは昨日のうちにしなくちゃだったんだけど、普段あんまり作らないお菓子に悪戦苦闘してるあいだにすっかり忘れちゃったのだ。

初めて戸部先輩にメールを送るんだけど、なんていうか……あはは、すつごい業務連絡みたいになつちやつたよ……。いくらなんでも固すぎるかな。



でも伝えたいことはホントこれくらいだし、大丈夫だよな？

「追伸……戸部先輩。朝練ガンバってください！」

うん。最後の一文で随分とやわらかくなったよね？

「送信っ」

よし。これで準備は全て整った。

あとは……いざ決戦の地へ……！

× × ×

途中でカイロ替わりに買った、最近お気に入りの黄色と黒の派手な缶のコーヒーを頬っぺに当てつつ目的地に到着っ。

駐輪場で待っているあいだ、私の頭の中には色々な思いが巡ってる。

比企谷先輩との出会い。

文実での悲しい出来事。

体育祭での、ほんの少しだけ救われた気持ち。

いろはちゃんへの告白。

比企谷先輩との再会。

比企谷先輩との二人つきりのお昼休み。

——私は……比企谷先輩が好き。

これはもう、どう考えても覆しようのない事実。

じゃあ……私はこのチョコを先輩に渡して……そのあとは一体どうするんだろう。

このチョコを先輩に差し出せば、その瞬間に私の初恋は終わってしまうだろう。

だって比企谷先輩が大切に想ってるのはたぶん……。

それ以前に、私は先輩にとってのそういう対象でさえ無いしね。

……あまりにも遅すぎた。

臆病な自分を言い訳にして、この気持ちをちゃんと伝えようと動きだすのが。

まだ私と比企谷先輩にはなんの絆も繋がりもない。あるのは再会出来た日と、それから二日間一緒に過ごせたお昼休みの、たった三時間にも満たない短い時間だけ。

もし、勇気を出してもつと早く動きだせていけば、あるいはもう少しだけは希望を見

いだせていたのかもしれないけれど……でも、どっちにしたって結局結果は一緒だろう

し、今更タラレバにすぎたってみつともないだけだ。

私は振られて、それでそのあとどうすればいいのかな。すぐに諦めはつくのかな？すぐに忘れられるのかな？

それとも……もつと苦しいのかな……？気持ちを伝えたくても伝えることが出来ずに苦しんできた今日までよりも。

そんなことを考えていると、足がどうしようもなく震えてくる。

ゆうべだつてそんなことばかり考えちゃつて一睡も出来なかつたつていうのに、まだ懲りないのか……私は。

バカだなあ……私。

だつたらまだ告白なんてしなればいいのに……

せつかく仲良くなれたのに……せつかく二日も二人きりで一緒にランチが出来る仲間になれたのに……

振られると分かつてる今、無理に告白なんてしないでこのままゆつくりと二人の時間を費やして行けば、私と比企谷先輩の間には、確かに絆が生まれるはずなのに……

それなのに私は、その未来の可能性を消しちゃうかもしれないのに、全部壊しちゃうかもしれないのに……それでもやっぱり今日の告白はもう止めることが出来ない。

なんで私はバカだつて分かつてるのに告白を止めないのかな。

それは、バカだつて分かつてるけど、なんで止めることが出来ないのかの理由も分かっちゃつてるからなんだろう。

——私は、今まで散々自分自身の弱さで手遅れにしてきた。だから、もうこれ以上の手遅れは嫌なんだ。

たぶん、私が告白しようとしまいと、このバレンタインで比企谷先輩の環境は大きく変わるような気がする。

奉仕部のお二方というはちちゃんによつて。

そしてその環境の変化への予感が当たってしまったら、私は二度と想いを伝えることさえ出来なくなつてしまうだろう。

それだけは絶対に嫌だ……！

私はこれ以上の手遅れに、ただ手をこまねいているだけじゃられないんだ。

せめてこの想いだけでも伝えたい。たとえ……あの夢のような二日間みたいに、比企谷先輩と二人で笑いあうことが出来なくなつたとしても。

私は、私のせいで辛い思いをさせてしまったこの可哀相な想いを見殺しには……もうしたくない……

と、その時心臓がどくと跳ね上がった。

この場所で待ち始めてどれくらいの時が流れたのだろうか。

せつかくの優しさを隠してしまうような気だるそうな目。

朝からとつても面倒くさそうな猫背。

セツトとかに一切興味が無いのであろうボサボサの髪。

普通であればそれらの全てがマイナスイメージでしかないはずなのに、恋する私にはそれらの全てが愛おしく感じてしまう。

そんな、愛おしくてたまらない初恋の人の姿が、寒さと不安に震える私の視界に、ついに映ったのだ。

× × ×

「ひ、比企谷先輩っ、おひゃ……おはようございますっ」

どう声を掛けたものか少し迷ったけど、これからとても重要なイベントが待っている以上、そんなことでウダウダしてる場合じゃない。

だから私は、所定の位置なのであろう場所に自転車を停めて鍵を掛けている先輩へと急いで駆け寄り、そのままの勢いで挨拶をした。

……もう先輩とお喋りしてもあんまりトチったり噛んだりはしなくなれたはずなのに、さすがに今日この日の挨拶だけは無理だった……

これは緊張とかのせいじゃなくって、寒空の下1時間以上も待つてた事による口まわりのかじかみのせいだと思いたい。

すると普段では有り得ないのであろう後ろからの突然の挨拶に、比企谷先輩がすつごくビクウツとしたのが窺えた。

あわわ……！ビククリさせちゃったかなつ……

「と、突然声かけちゃってすみマセン！驚かせちゃいましたか……？」

「あ、やー……別に大丈夫です……。えと……ん？だ、誰……？」

……………え、嘘……？

比企谷先輩が最後にボソリと付け加えた呟きに頭が真っ白になった。

いろはちゃんに紹介してもらえた水曜曰。

抜け駆けして二人で過ごせた木曜曰。

そして、その二日間の経験を経てとつても楽しく過ごせた金曜日。

私にしては頑張れたって思ってたのに、まだ記憶に留めておいてもらえる程の存在じゃなかったのかな……

「あ、あの……その……」

視界が滲み始めた。

だ、ダメでしょ愛……！そんなの、覚えてもらえてない程度のことしか出来なかった私が悪いんだから！

それならそれで、もう一度名乗って告白すればいいだけの話じゃない……

それは分かっているんだけど……なんだかスタートから心が折れちやいそう……

「あ、スマン愛川か……！あー、アレだ。お前普段なんつーの？サイドポニーつつうの？片側に髪まとめてんのに今はおろしてるから、一瞬誰かと思っちゃまったわ」

「……へ？」

……はあく……ビックリしたあ……そういうことかあ……

なんだか安心して全身の力が抜けてフニヤツとしちやってるのがよく分かる。

うー……良かったよお……で、でもっ……

「ひ、酷いですよ比企谷先輩……髪型違うだけで誰？だなんて……」

「いやマジでスマン。普段朝から声を掛けられること自体無いから、少し焦っちゃまった

のかもしれない」

もおっ！

……ま、まあ女の子は髪型ひとつで印象全然違っちゃうしね。

でも私は酷いとか言いながらも心の中ではホントに安心して、思わず笑顔になってしまいうるようになる。

「えつとですね、私普段はおろしてるんですけど、マネージャーのお仕事がある日は、邪魔になっちゃうんで朝からずつとまとめてるんですよ」

「あー、そういうことか。……じゃあ今日はサッカー部が休みってことなのか」

「あ、違って……その、今日は朝練を休ませて貰ったんです」

「あ、そうなの？ どうした、どっか体調でも悪いのか」

「わわわっ……いえいえ大丈夫ですっ！ ちよつと用事があつたんでっ」

「ほーん」

……えへへ、やつぱり比企谷先輩は優しいな。

ちよつと部活を休んだって言ったくらいで、すぐさま体調の心配をしてくれるなんて。

ふああ……一時はどうなる事かと思っただけど、このやりとりのおかげで緊張が吹き飛



んでくれた。

比企谷先輩が私が誰か分からなかったおかげで助かったなんて……ふつつ、なんだか複雑っ。

「てかなんか用事あったつーんなら、こんなところで俺と喋ってて大丈夫なのか？……あ、もう時間も時間だし、用事が済んでたまたまここに居たらたまたま俺が通ったつてところか」

「……」

一瞬だけ解けた緊張が、先輩のそのセリフでまた私の心に襲い掛かってくる。

「……いいえ、違いますよ？ 用事は、まだ済んでないんです」

でも……また襲い掛かってきた緊張なんてもう知らない。

私はもう止まらない。

「あ、そうなの？ んじやあ俺はこれで……」

「私の用事というのは、今まきに行われている最中なんです」

「……はっ」

「だって……私は比企谷先輩に用事があったんですから」

なんだろう？ おかしいな。

これから告白しようとしているのに……また襲ってきた緊張で足が震えてるっていうのに、なんで私はこんなにも落ち着いてるのかな。

それは……一旦緊張の糸が切れちゃったからなのかも知れない。

それとも、集中しすぎてゾーンってやつに突入しちゃったのかな。

分からない……分からないけど、それならそれで好都合でしかない。

告白しながら泣いちゃったりとかするのかな？なんてちよつと心配だったから、そんなみつともない事にならなくて済みそうで助かつちやつた！……かもつ。

うん。手も足も震えてるけど大丈夫！頭は冴え渡ってる！

いくぞ！愛！

そして私は鞆から可愛くラッピングしたひとつの包みを取り出し、両手を添えて先輩へと差し出した。

「……比企谷先輩……私は、文化祭実行委員で先輩と出会って本当に良かった。あの時はホントに色んな事があつたけど、この人凄いなって……すごく格好良いな、って思つてました。実行委員が終わって会えなくなっちゃいましたけど、もうお話出来なくなつ



愛川愛の初恋は終わりを告げる。そして……

——ずっとあなたのことが好きでした——

私は、ようやくずっとと燻っていたこの気持ちを打ち明けることが出来た。

寒空で冷えきった身体はガクガクと震えてるのに、貧血気味の時みたいにつつと倒れこんじやいそうなくらいフラフラなのに、頭だけはホントにクリア。

ただの恋心だけじゃない。

文化祭や体育祭でいっぱいいっぱい思いをして、でも比企谷先輩はそんなのよりもずっとずっと辛くって、そんな辛そうな背中を見ていたはずの私なのに、なんにも出来なかつた後悔や悔しさ、そして自分の無力さへの憤り。

そんな色んな気持ちが交ざりあつた想いをやつと吐き出せたから、頭の中にたくさんアドレナリンが出ちゃってるのかもね。

先輩はとてもしつかりしたような、とても困つたような顔をしてる。

「……あー……スマン。えと……マジ、か？」

「はい……」

「……そうか」

「……はい」

何度か行われる確認作業。

それはそうだね。ちゃんと話出来るようになってからたった数日しか経ってないのに、いきなり告白なんかされたって信じられないよね。

私の返事を心の中で噛みしめる比企谷先輩は、次第にさつきよりもっと困った顔になっっていく。

困った……というよりは、そう。とても苦しそうな顔。

……覚悟はしてたけど、やっぱりやだなあ……

大好きな人が、私の告白のせいでこんなに辛そうな表情をするのなんて、やっぱりどうしようもなく苦しくなる。

今すぐにも逃げ出したい。嘘ですよっ！って、ちよつとした冗談ですよー！って、逃げ道を作ってしまったみたい衝動に駆られる。

……でも、それじゃダメだ。私はもう逃げたくない。

だから、逸らしてしまいたい目は逸らさない。チヨコを差し出す震える手だつて引つ

込めない。

ただ、真つ直ぐに先輩を見つめて、先輩の言葉を待つことだけが、今の私に出来ること。

そんな私の想いに応えてくれるように、比企谷先輩も私の目を逸らさずに見つめてくれる。

これから断りの言葉を口にしようとしてるんだ。ホントは比企谷先輩の方こそ目を逸らしたいよね。

それでも目を逸らさずにくれてるってことは、ちゃんと真剣に私の告白を受け取ってもらえて、私のことを考えてくれてるって証拠だよな。

ふふつ、やっぱり優しいなあ、この人は。

「その……なんつうか、すげえ驚いた……。愛川みたいな子が、俺みたいなのを好つ……想ってくれてるなんて……マジでビックリだ」

「えへへ、私もビックリです。私がかんなにも男の人のことで頭がいっぱいになっちゃうなんてっ……」

私の言葉に少しだけ表情を緩ませた比企谷先輩は、意を決したかのように一呼吸し

た。

たぶん……ここまで、かな。

「……なんか、勿体ないくらいだわ。愛川にそんな風に想ってもらえるなんて……。だけれど……。すまん……。愛川の気持ちはすげえ嬉しい。でも……」

「……でも、なんですか?」

なんですか?なんてちよつとわざとらしいかな。

その先の言葉なんて分かつてるのね。

そして、お互いに見つめ合いながら、お互いにこくりと咽を鳴らした。

「今俺には……」

そう口にした先輩は、ずっと合っていた視線を一瞬だけ逸らして気まずそうに俯いたけれど、でもすぐにもう一度私の目をしっかりと見つめ直して、私の思いへの答えを言葉にしてくれた。

「……俺には、どうしてもほつとけないバカが居んだよ……。だから愛川の気持ちに応える事は出来ない……」

……正直ちよつと驚いた。

断られるのは分かってたけど、そんな答えが返ってくるとは思わなかったから。でも……………ふっつ、そっか……………」

「……………そうですかっ！ほつとけないバカが居るんじや、仕方ないですねっ……………」

たぶん比企谷先輩は、自分の心の内を他人にはなかなか話さない人なんだって思う。だから私の告白は体よく断られるモノだと思ってた。

でも、比企谷先輩はこうしてちゃんと答えをくれた。

私の気持ちをちゃんと受け取ってくれて、その上で心の内を打ち明けてくれた。

だから……………ありがとうございます先輩。私は、心の底から満足しました……………！

比企谷先輩、あなたに想いを伝えられたことを。

× × ×

満足はしたけど、それでもやっぱり来るモノがあるなあ……………

仕方ないですねって、先輩のお断わりに笑顔で答えてみたけど、それでもやっぱり泣きそうになってしまう。

そんな、涙が滲んでしまいそうな笑顔を見ているのが堪らなくなったのか、比企谷先輩は慌てて私の手からチョコを攫った。



「愛川、これ……今一個食つてみてもいいか」

「ひゃ!?は、はいっ……!」

突然のことにビックリした私は、思わず変な声を出してしまった。

だ、だって……こういう場合って、チョコは受け取らないモノなんじゃ……?

そんな私の動揺なんて知ったことかと言わんばかりに、比企谷先輩は私が想いを込めて包んだラッピングを、とても丁寧に……というよりは寧ろ恐る恐る?解いていく。

ラッピングを解いて箱を開けると、そこには昨夜見たばかりのミルクコーヒー色の生チョコが4つ、大切な人に食べてもらいたそうにそつと顔を覗かせていた。

「おお、なんかすげえ美味そう……。頂き、ます……!」

先輩はその生チョコを一つ摘むと、とても大切な宝物でも扱うかのように、慎重に口へと運ぶ。

「ど、どう……ぞっ!」

ホントだったら、手作りのお菓子を好きな人に食べて貰えるなんてすつごくドキドキしそうなシチュエーションなのに、今の私は啞然とその様子を見守ることしか出来ないでいる。

だって……そのチョコは私が今まで作ってきたどんなお料理よりも心を込めて作ったものだけど、でも……心を込めた相手の口に入ることは無いと思って作ったチョコだ

から。

でも、そのチョコはなんと想い人の口の中に放り込まれてしまった。

まさか……食べて貰えるだなんて……。しかも、目の前でっ。

むぐむぐとチョコを舌でとろけさせる先輩。

どうしよう……。今更ながらにドキドキしてきちゃった。

ちゃんと味見はしたけど、お口に合うかな!? 口溶け具合とか大丈夫かな!?

「……はー……」

は、はー?

「すげえ良く出来てんなあ……。うん。美味しい」

……や、やったあ! 美味しいって言って貰えた!

私は、比企谷先輩が本当に美味しそうな顔をしてくれたのを見て、さっきまでの玉砕劇のことなんかすっかり忘れて、飛び上がらんばかりに心がはしゃいでしまう。

「やべ、も、もう一個食っちゃおうかな……。?」

「はいっ! どうぞ!」

……なんか、私ってこんなにも単純なんだなあ。

人生初の告白が予想通り玉砕という形で幕を閉じたばかりなのに、それなのに私の

チョコを美味しそうに頬張ってくれてる大好きな人の顔を見てるだけで、こんなにも心が安らいでしまう。

「これって、マツ缶風味な味付けになってんのか？ すごい美味しいんだけど」

「えへへえ、そうですね♪ 溶かしたビターチョコに、インスタントコーヒーと練乳を企業秘密の割合で練り混んだんですよ。この味になるように、何度も何度も試行錯誤したんですから！ おかげで昨夜はチョコ食べ過ぎちゃいましたっ」

「マジか……いやホント美味しいわ」

「はああ、良かったあ……私、普段お料理はしてもお菓子ってあんまり作らないので、美味しく出来るかどうかちよつと不安だったんです！……ちゃんと美味しく出来て、その上……ちゃんと食べて貰えるなんてっ……」

あまりにも嬉しくって自然と漏れだしてしまったその言葉に、比企谷先輩は途端にハツとして顔を青くする。

「わ、悪い！ 普通こういう場合って……断るんなら貰っちゃいけないんだよな……」  
……あ……そ、そういうえばそうだった……

私だっつてついさつきまで唾然としてたのに、驚きよりも嬉しさの方がずっと優っちゃつて、ついつい忘れてしまっていた。

「す、すまん……俺こういう経験無だからテンパっちゃって……」

そんな心底申し訳なさそうな比企谷先輩に、私は両手を突き出して、必死にぶんぶんと振る。

「ぜ、全然です！そんなことないです！……私、比企谷先輩にチョコ食べて貰えて、ホントに嬉しかったです！……、それに」

そして私は、あんまりにも悲痛な顔で私から目を逸らしている先輩を見てたら少しだけ可笑しくなっちゃって、ちよつとだけ芽生えてしまった悪戯心を隠そうともせずニコリと笑顔を向けた。

「……それに、どうせ先輩に食べて貰えなかつたら、せつかくのこのチョコは即ゴミ箱行きの予定だったんですよ？……もう思いつきりゴミ箱に投げつけてやるつもりだったんですからっ！ばっこーんって！」

とりやつ！とゴミ箱にチョコを投げ入れるポーズをしながらもう一度笑いかけると、比企谷先輩はバツが悪そうに「じゃあ食って良かったわ」って苦笑いしてくれた。

——今日は、色んな先輩の顔を見たな。

ビツクリした顔。苦しそうな顔。美味しそうな顔。そして……優しい苦笑い。

そんなたくさんの先輩の顔を思い浮かべる度に、私の心はポカポカしたりぎゆうってなったりする。

うん。そつか……………やっぱり……………やっぱり私は……

「……………比企谷先輩」

「お、おう……………」

「今日は朝からお時間とらせちゃいましたけど、本当に……………本当にありがとうございまして……………」

「……………いや、俺は愛川に礼を言われるような……………」

「私っ!」

「うおっ!?!」

「先輩にちゃんと気持ちを伝えられて良かったです!ちゃんと先輩の顔を見て答えを聞いて、本当に良かった。……………おかげで……………ふふっ、なにかに目覚めちゃったかもですっ」

「……………は?……………な、なにか?目覚、め……………?」

「……………それでは失礼します。……………では「またっ」」

そう言つて私はペコリと頭を下げて、ワケが分からんとポカンとしている比企谷先輩に背を向けて歩きだした。

——こんな簡単なことだったんだ。

初めての恋、初めての気持ちで、私はなんにも見えなくなってた。

……ちゃんと気持ちを伝えられて、そしてちゃんと振られれば諦められる？忘れられる？

そんなわけ……無い。

そんな簡単に諦められるのなら、そんな簡単に忘れられるのなら、あんなに苦しんだりあんなに悩んだりなんかしないもん。

そんな程度の気持ちだったのなら………そんなの、本物じゃない。

泣いちやうかもしれないけど、ううん？たぶん泣いちやうだろうけど、でも私はようやく気付けたこの心からの気持ちを、いろはちゃんに伝えにこう………！

待ってろお！いろはちゃん！

その時校内にチャイムが鳴り響いた。

……あ、いろはちゃんの所に行くのは、一時間目の休み時間かなっ……

× × ×

「……今日は、私の……とてもとても大切な日になりました。私は、このバレンタインを、ずっとずっと、忘れることは無いだろう……っと。……うん！これでよし」

運命のバレンタインデーの夜、集中して机に向かつていた私はぱたんと日記を閉じてぐつとひと伸び。

「う……んっ！」

ふああ、疲れたあ……今日はホントに色々な事があつたなあ……！

今までのなんの変哲も無い私の人生からしたら、今日だけで一体何年分のイベントをこなしちゃったんだろ？

えへへ。でも、とつても充足感でいっぱい疲れだなあ。

昨夜は一睡も出来なかったから、もう今すぐにでも瞼の思うがままに自由にさせてあげたいくらいだよ。

でもっ！私にはあと一仕事残ってるんだよね。

そして私はごそごそと鞆の中から二枚の用紙を取り出した。

生徒指導室で平塚先生に怒られて、それからいろはちゃんと少しだけお話しして、別れてからコツソリ職員室に戻って先生に用意してもらった、まったく真逆の意味を為す二枚の用紙。

「愛川愛……つと」

私はその二枚の用紙に必要な事項を記入して、それぞれ別の封筒に入れた。

明日学校に持っていくのを絶対に忘れないようしっかりと鞆にしまったのを確認して、本日のお仕事はようやく完了です！

「ふわああ……」

よし、今夜は良く眠れそうぞつ！

続く



## 愛川愛が今日踏み出すのは明日への第一歩

バレンタインの翌日、私は普段となんら変わりのない1日を過ごしていた。そう、放課後までは。

HRが終わると、普段の私であれば即座に部室へと急ぐところなただけど、今日は別段急ぐ必要も無い。だって、更衣室でジャージに着替える必要がないのだから。

「あれ？愛ちゃん今日は珍しく急がないの？」

私はいつも、他の部員たちが揃う前には色々と準備しておきたい事があるから誰よりも早く部室に駆けていくんだけど、HRが終わってからも全く急ぐ様子の無い私に、友人たちが心配して声を掛けてきてくれた。

ちなみに昨日は平塚先生に呼び出しされちゃってたから、普段よりもさらに急いでたんだよね。

「うん。今日は急がなくても平気なんだよ」

「へー、珍しいこともあるもんだねえ」

「えっへへえ、でも明日からはまたダツシユで教室飛び出してくからよろしくねっ！」  
そうなのだ。今日はまず葉山先輩待ちになつちやうから無理に急いでも仕方がない  
んだけど、明日からは今まで以上に早く部室に辿り着きたいんだあ。無駄な時間はもう  
1分1秒だつてないんだから。

明日からの自分……んーん？今日これからの自分に思いを馳せていると、友人たちが  
ほかーんとした表情で私を見つめていることに気が付いた。

「ど、どうかした？」

「……あ、いや、愛ちゃん……なんかあつた……？」

「……ね、愛川さんて、そんな顔したっけ……？」

「へ？そんな顔……？」

なんだろう？私、変な顔してたかな……？

「いやね？『またダツシユで飛び出してくから』って言った時、なんかすごい楽しそう  
だつたっていうか……」

「そうそう！楽しそうっていうか……なんかちよつと小悪魔？みたいな？いたずらっ子  
？みたいな？」

へ？小悪魔？いたずらっ子？

……私、そんな顔してたんだ。

「やっぱ最近愛ちゃんてちよつと変わったよね。特に今日はまたさらに輪をかけてって感じ」

「ねー！なんつーの？なんかすつこい生き生きしてる感じっつーの？」

「わかるー！なんか、愛ちゃんイイ表情するようになったよね！前ほどいい子って感じはなくなってきたけど、逆に今の方がいいかも」

……そつかあ。私って、そんなにも変わってきたのかあ。

ふふつ、ホント恋つてすごいんだな。物心ついた頃からずっと変わりたいって思いながらも変われなかった。『引つ込み思案の癖にお節焼きのいい子ちゃん』が、ただほんの少し勇気を出せただけで、一步前に踏み出せただけで、こんなにいと容易く変われるんだ。

——変わる——

正確には違うんだろうな。元々私はこうだったんだろう。

だからこれは変わったんじゃないやなくて、自分を曝せる勇気が持ただけ。もしくは、本当の自分を見て欲しくなっちゃったのかもね。あの人に私を……愛川愛そのものを見て欲しいから……

「……………えへへ、なにかあったといえばあったかなあ」

だから私は、曝け出せるようになった自分をイイ感じになったって言ってくれる素敵な友人たちに、今自分に出来る最っ高の笑顔を向けてこう言っただけだ！

「やっぱりね？……………女の子には、素敵な恋が必要なんだね♪」

私は、「ええええっ!？」と驚く友人たちにじゃあねと背を向けて教室をあとにする。

もうそろそろ葉山先輩も来るころだね。よし！まずは本日ひとつめの大仕事だぞお！

……………あ……………。明日ちゃんと友人たちに「振られちゃったんだけど」って訂正しとかなきゃね！

× × ×

教室でお話していたぶん遅れてグラウンドに到着すると、すでに部活は始まっている。た。

いつもなら真っ先にあのグラウンドの中に居るはずの私がこうして外から眺めてるだけだなんて、なんだかすごく新鮮だな。

おっと、感傷に浸つてゐる場合じゃないんだ。私はグラウンドでストレッチを始め  
ている選手たちへと歩み寄りながら、部長である葉山先輩の姿を探した。

背が高く明る茶髪の葉山先輩を見つけだすことなんて、一年近くマネージャーを  
続けていた私にはお手のもので、程なくして選手たちの中心に居る先輩を見つけだ  
した。

「葉山先輩、お疲れさまです」

「……ああ、お疲れ」

制服のまま、髪もおろしたままの私に何事かとみんなの視線が集まる中、葉山先輩は  
笑顔で応えてくれた。でもその笑顔はどことなくぎこちない。

それはそうだよ。こんなの、異常事態だもん。

「どうかしたのか？愛」

いつもよりもずっと遅く顔を出した。制服のままに居ること。

異常事態であることを表す私の状況には一切触れないで、ただ私からの言葉を待つて  
くれている葉山先輩。

渴く喉。小刻みに震える体。ここにきて……ここまできて、ようやく私は自分が緊張  
しているのだということに自覚する。

今から私がする事は、本当に身勝手極まりない行動だ。間違いなく部活にも迷惑が掛

かるし、もしかしたら今まで共に汗をかいてきたみんなにも嫌われちゃうかもしれない。

——それでも……ここ数日間に味わった色んな緊張に比べたらなんてことないし、それに……、もういい子だなんて思われなくなつていいでしょ？嫌われたつていいでしょ？愛。

あなたはようやく本当に自分がやりたいことを見つけたんだから。

そして私は上手く声が出せるように、カラカラになつた喉をこくりと潤す。

「……………葉山先輩。お話があります。少しだけお時間よろしいでしょうか……………」

× × ×

グラウンドから離れ、校庭の端に佇む私と葉山先輩。

他の部員たちはストレッチを終えて練習を始めてるけど、やっぱり気になるのかこちらにチラチラと視線を向けてくる。

「……………愛、ホントにここでもいいのか？言いづらい事なら、別に部室に戻つてもいいんだぞ」

「はい、大丈夫です。お話が終わったら皆さんにもちゃんとご挨拶したいので、部室まで

戻ってたら二度手間になっちゃいますしねっ」

「……そうか」

皆さんにもちゃんとご挨拶がしたい——私のそのセリフに疑問も持たずに「そうかと返してくるくらいだ。私の目的には気が付いているんだろうな。」

私はごそごそと鞆からひとつの封筒を取り出すと、失礼の無いよう封筒に両手を添えて葉山先輩へと向けた。封筒に書かれた文字が一目で分かるように。

「……誠に勝手ながら、本日をもつてサッカー部を退部させていただきます。……今まで、大変お世話になりました」

深く頭を下げて封筒を差し出すと、葉山先輩はそつと封筒を受け取ってくれた。

「だろうな、とは思っていたよ。……最近の愛の様子を見ていたらな」

……あ、あれ？私って、そんなに辞めそうに見えてたのかな。

まあ昨日の朝練はサボっちゃったし、午後練は先生からの呼び出しで遅刻しちゃったけど。

「……理由を聞いてもいいかな。まあ部活に所属するかどうかは個人の自由だし、言いたくなければ言わなくてもいいんだけどね」

そう優しく問い掛けてきてくれる言葉とは裏腹に、どうしても気になるって気持ちですごく流れ込んでくる。

「…………えっと、ですわね」

急な退部で迷惑を掛けてしまう以上、理由を聞かれるならちやんと答えなきやと思つてた私は、ふうくと息を吐いて、一拍開けてから語りだす。

「私は…………大好きな兄が楽しそうにサッカーをしてるのを見るのが大好きでした。……でも私は兄と一緒にプレイすることは出来ない。だから、そんな大好きな兄の姿を傍で見ているにはどうしたらいいのかな？つて考えた時、思い浮かんだのが応援でした」

「…………ああ」

「そしてその応援という手段は、次第に兄だけでなくサッカーが好きな人たち全てに向くようになって、一生懸命サッカーをしてる人たちの役に立てられれば、それは直接では無いにしても兄の役にも立てるってことにもなるのかな？つて思い始めて、そして私はサッカー部のマネージャーになることを選びました」

「…………そうか」

「そんな思いから始めたマネージャーというお仕事ですけど…………、本当に…………本っ当に楽しかったんですよ？色々大変なこともあったけど、でも本当に楽しかったし本当に充足感がありました。サッカーが好きな人たちの近くで、一緒に汗かいて、一緒に喜んで、一緒に悔しがって…………。始めはただ兄の背中を見ていたかっただけのはずなのに、気が付いたらホントに大好きになってました。このお仕事が」



「はは、そんな愛のおかげで、俺たちは本当に助けられていたよ。実務面でも、そして精神面でも」

「……えへへ、そう言つて頂けるとホント嬉しいですつ………。でも……」

そこまで言つて、私は一旦顔を伏せる。

これから言うことは、そんな頑張つてる人たちを冒瀆することにならないだろうか？つて。

たかが一時の迷いで、そこまで大好きだと断言したマネージャーというお仕事を、私は捨ててしまうんだから。

でも……むしろこんな気持ちのまま続けたら、それこそ冒瀆になつちやう気がする。頑張つてる人たちと、そして応援したいつて気持ちに。

私は、一旦伏せてしまった顔を上げて葉山先輩をしつかりと見る。もう迷いはない！「好きだったけど、本当に楽しかったけど、でもつ……！ 私はそんなのよりもずっとずっと大好きなものを見つけちゃったんです！ 自分が今一番したいこと。自分が、今一番大切なものを。その為には、このマネージャーというお仕事なんかしてる時間が勿体ないと思うくらいに！」

その大好きで大切なものつてなんだ？……そんな風に聞かれると思つていた私なん

だけど、葉山先輩の口から出た音は、とてもとても予想外……というか、予想の範疇を遥かに超えていたのだった。

「……………チツ」

× × ×

……………えつとお……………今、舌打ち聞こえた、よね……………？

私は、葉山先輩から聞こえるはずもない音に、つい体が固まってしまふ。

「あ、あの……………」

恐る恐る視線を向けると、そこには頭をがしがしと掻きながら深く溜め息を吐いている葉山先輩の姿が……………

「はあああく……………また、かあ……………」

「……………また？」

「ああ。また、だ」

……………こんな葉山先輩は初めて見る。一体どういふことなんだろうか。

ワケが分からなくて、私は葉山先輩の次の言葉をただ待つばかり。

「愛の大好きで大切なもの……それは、あいつのことだろ？」

「へ!?!……あ、あいつ……?」

「ああ、あのどうしようもない捻くれ者のことだよ」

その瞬間、私は顔も身体もカアアツと熱くなる。

「なななん?!?な、なんでですか!?!」

葉山先輩は捻くれ者としか言っていない。言つてはいないけど、でも葉山先輩には全てが見えている、全てが分かつているんだつてすぐ分かつた。

あまりの予想外の展開に、色々と覚悟を決めていたはずの私はわちゃわちゃと慌てふためいてしまった。

「……愛は文実に居たからね。確かにあいつはあそこで酷く嫌われていたが、愛みたいな子なら、もしかしたらあいつの真意に気付くかも知れないと思つて、たまに様子を伺つていたんだ」

「そうなん……ですか?」

「ああ。そして文化祭が終わつてからしばらくの落ち込み具合や体育祭を経ての気持ちの回復、そして極め付けはクリスマス前にあいつがいろはを訪ねてきた時の、普段の愛ではあり得ないような慌てた姿を見ていればさすがにね」

う、嘘……私の恋心、そんなに前からバレバレだったなんて……

その事実には、私の頬が真っ赤に燃え上がる。

「そこへ来てのバレンタイン当日の朝練を休んで、翌日には退部届けの提出。ははっ、こんな誰にだつて分かるさ」

「~~~~~」

あまりの恥ずかしさに顔を上げられないでいる私に、葉山先輩が自身の意見を即座に否定した。

「いや……誰にだつては言い過ぎか。……俺だから、俺だからこそ分かったのかもな」

——葉山先輩だからこそ……？

まだまだ火照り続ける顔を上げて葉山先輩へと向けるのは恥ずかしくて堪らなかつたんだけど、葉山先輩だからこそ……その意味がどうしても気になってしまい、なるべく顔を見られないようにチラリと上目遣いで覗き込んでみる。すると葉山先輩は何かを思い出しているかのように少し遠くを見ていた。

「俺は………あいつが嫌いだ」

葉山先輩の口から出た衝撃的な言葉。この人が、誰かを嫌いだと明言することがあるだなんて……。でもなんでだろう？ はつきりと嫌いと言っているのに、その表情は

……

「本当に忌々しい奴だよあいつは。俺のやり方とは全然違うやり方で、俺には出来ないことをいとも容易くやってのける。……あいつを見てみると、俺はどうしようもなく劣等感に苛まれるんだ。悔しくて堪らない……だから俺はあいつから目を逸らしたくなる。でも逸らしたくなればなるほど、気が付いたらあいつを意識して、対抗しようとして掻いている自分に気が付いて、そしてまた劣等感に苛まれる」

「……」

「あいつは、雪ノ下さんも結衣も変えた。優美子や姫菜、戸部も少なからず影響を受けている。……そして気が付いたらいろはの目にもあいつしか映らなくなっていて、そしてとうとう愛までこんなにも強く変えてしまった。……まったく、本当に忌々しい。だから俺はあいつが大嫌いだ」

……葉山先輩がこんな風に自分の弱くて醜い部分を他人に曝す事があるだなんて……でも、でも私はそんな風に弱さを曝している葉山先輩の表情を見て、つつい微笑んでしまう。

「ぷっ……ふふ、突然舌打ちしたり悪態吐いてるわりに、葉山先輩の顔はなんでそんなにも楽しそうなんですかつ？」

そう。葉山先輩は、舌打ちしてから比企谷先輩の悪口を吐き出して、最中まで、悔しそうに苦笑しそうにしながらも、その表情はなぜだかとても楽しそうな笑顔だったのだ。

× × ×

「酷いな、愛。こんなにも情けない胸の内を吐露している先輩を見て吹き出すなんて」  
そう苦笑しながら嘆く葉山先輩だけど、そんな表情見たらどうしたって笑いこぼれちゃいますよ？

「ふふ、だってとても人の陰口を叩いてるようには見えないくらい笑顔なんですもん」  
「俺、そんなに笑ってたか？……いや、笑っていたのかも知れないな」

「嫌い嫌い言うわりに、なぜそんなに嬉しそうに笑ってるんですか？」

私の質問に、腕を組んで少し考える素振りを見せる葉山先輩。でもすぐにでも答えが出たのだろう。また苦笑いに戻りこう答えた。

「……そう、だな。確かに悔しくて忌々しくて大嫌いな奴だけど、だからこそ楽しいのかもしれない。……ただの敵じゃなくて好敵手ってやつなのかもな。もつともあいつはライバルだなんて思ってもいいだろう。腹が立つことに眼中にないんじゃないかな」

そう悔しげな苦笑いを浮かべる葉山先輩を見て思う。

……葉山先輩みたいな人にはライバルなんていない。いつだって相手は敵対しようだなんて思わないから。

だからこそ……この人は悔しくてもそれがどこか嬉しいのかも。

「ああ、あと愛。ひとつ誤解を解いておきたいな。言っておくが俺はあいつの陰口なんて叩いてないぞ？俺はちゃんとかいっつに直接嫌いだと伝えてあるんだ。だからこれは断じて陰口なんかじゃやないんだからな？」

「ぶつ、そんなのどっちでもいいじゃないですか」

「そうはいかない。俺の沽券に関わるくらいだ」

あはは、なんか今日の葉山先輩はちよつと子供みたいだな。比企谷先輩が関わりとうなつちやうのかな？でも……

「……正直言いますと、私は今まで葉山先輩のことは特になんとも思ってませんでしたけど、もし始めからずつと今の葉山先輩だったら、出会う順番が違つてたらもしかしたら好きになつちやつてたかもしれないです。……えへへ、まあ比企谷先輩には全つ然敵いませんけどねっ」

「あ、あはは……、それは俺は喜んでいいのか？」

「はい。よつぽごのことですよっ？」

× × ×

最初は緊張して、次に恥ずかしくて俯きっぱなしになっちゃったこの退部願ひも、いつの間にか和やかな空気に包まれている。それもこれも、葉山先輩がホントは言いたくも無いであろう胸の内を打ち明けてくれたからなんだろうな。

「あれですね。私と葉山先輩は、比企谷先輩被害者の会の同士みたいなものですね」

「……被害者？……いや、でも愛は比企谷に告白したんじゃないのか？」

……うっ……痛いところを……

それに、気持ちはずっと前からバレバレだったと言っても、直接そんな風に言われちゃうとさすがに恥ずかしいですよ……。意外とデリカシー無いのかな、この人。

「……うー、……そ、そこら辺は……その、察してください」

「……え？そ、そうなのか……？」

「だ、だから察してくださいってば……」

やっぱりちよつとデリカシー足りないかも！

「す、すまない！俺はてつきり……あ、いや、これ以上は藪蛇だな」

「へび突つき過ぎですよ、もうっ……」



「……すまん。そ、それにしても」

ホントに申し訳なきように頬をポリポリと搔きながらも、まださらに追及してくる葉山先輩は、デリカシーが足りないんじゃないやなくて中々の意地悪さんなんじゃないのだろうか？

「……愛を振るだなんて、ホントあいつは身の程知らずな奴だな」

ふふつ、それともようやく被害者の会の仲間を見つけて本音で愚痴を溢せる嬉しさから、つつい口が滑らかなになっちゃってるのかもね。

「……それどころか、他の誰かさんに取りられちゃいましたしねっ！」

「……え？ そうなの……か？……それはまた、なんというか」

もうなんとも言わなくてもいいですってば！

「ていうか……それなのに、なのか……？ そんな状況なのに、愛は自分からあいつの所に？」

——葉山先輩の口から漏れた言葉、それは当然の疑問だろう。私ももしも他人事だったら、同じように驚いちやったり呆れちやったりすると思う。

でもね？ 本当の恋を知っちゃったら、居ても立ってもいられなくなっちゃうんですよ？ 恋する乙女は。

「……それでも、です」

だから私は、そんなのもう覚悟済みだよ？って決意の笑顔を向ける。

「……そうか、本当に強いな、君は。……その、なんて言ったらいいか俺には良く分からないんだけど、愛も大変なんだな」

「そうですよ。強くもなるし、すつごく大変なんですよ？本物の恋心を知っちゃった女の子は。……理屈じゃないんです。……それに」

そして私は、取って置き決めゼリフを葉山先輩にぶつけてやる。

昔、お兄ちゃんの部屋で読ませてもらった漫画に出てきた、とても素敵な監督さんのとても素敵なゼリフを。

「……諦めたらそこで試合終了ですよ？」

「ふっ、それバスケだろ」

むっ！……どうやら葉山先輩も知ってたみたいです……ちよつと恥ずかしいかも。

私がサッカー部に所属してから、あと一ヶ月とちよつともすれば、一年という中々に長い月日が経つ。

残念ながらその一年は迎えられなかったけれど、それでもこの決して短くはない時間の中で、こんなにも葉山先輩とお話したのって初めてだよね。

マネージャーの代表みたいな存在の私と、選手の代表な存在の葉山先輩は、言わばお

仕事上の関係？みたいに部活動に関するやり取りはしてたけど、こうやって真正面から向き合ったのは初めてな気がする。

初めて向き合った葉山先輩との会合は、私が思っていたよりもずつと心地の良いものだった。今日の葉山先輩をいつも出してれば、この人はもつともつと人を惹き付けちゃうのかも。ふふつ、そういう良さがちゃんと分かる人には、ねっ。

そんな葉山先輩との最初で最後の向き合いも、そろそろ終わりを告げようとしていく。

「……葉山先輩」

さつきまでの弛緩した空気を少しだけ引き締めて、私はこの素敵な先輩へと深々と頭を下げた。

「短い間ではありましたが、本当に本当にお世話になりました。……この度は私のどうしようもない私情による突然の退部願いで部活に多大なご迷惑をお掛けしてしまい、誠に申し訳ありません。……にも関わらず、こうして気持ち良く退部を認めて頂けて、私は本当に幸せ者です」

私は心からの感謝とお礼を述べて満足気に頭をあげる。すると葉山先輩はとても優しい笑顔でこう答えてくれた。

「いや、それは全然構わないんだ。俺たちサッカー部員は、多かれ少なかれ愛に助けられてきた。だから愛が本当にやりたいことを見つけたっていうんなら、本心から快く送り出してやりたいよ。……やりたい気持ちは山々なんだけど……」

「？」

「なんだけど？」と小首を傾げていると、

「……はあ……正直なところ、やつぱり愛が抜けるつてのは痛いなあ……。最近はいろはもたまにしか顔を出さないし、これからちよつと不安だよ……」

「なんて、頬を掻きながら苦笑する葉山先輩。せつかくいいところだったのに……」

「もうっ……そこは「あとのことは心配するな。俺たちに任せておけ」つて胸を張って背中を押してくれるところですよ？……それに……」

「本当に申し訳ないけれど、私はさらに追い打ちをかけなければならぬ。」

「……非つ常に申し上げにくいんですけど……その……いい、いろはちゃんも、たぶん近いうちに退部届けを持つてくるんじゃないかな？……と」

「……え……。そ、そうなのか!? そ、それはさらにキツイ……つていうか……いろはも退部つて、もしかして比企谷とつて……えつと……そ、そういうことなのか……?」

「……だからもお……察してください……つてば……」

「すまん!」

うー、せつかくの気持ちのいい去りぎわが台無しになっちゃったじゃないですかもー。

「……大体ですよ?」

だから、今度は私がずっとと言いたかったことを言つて葉山先輩を責め立ててやるんだー! えへへ。

「そもそもひとつの運動部に4人も女子マネが居る時点で恵まれ過ぎてるのに、その状況に胡坐をかいて真面目に部活動してる私というはちゃんにだけ頼りきつて、真面目にやってない子たちを怒りもしないで教育を怠つていたのは部長である葉山先輩の責任なんですからねっ? 私たち真面目組ばかり、今までどれだけ大変だったと思つてるんですか!? そんなに皆にいい顔ばかりしてたらあとで皺寄せきちやうのなんて当然なんですから、真面目組の退部を嘆く前に不真面目組にきつちり仕事をさせてくださいねっ!」

左手を腰にあてて、びしいっ!と右手の人差し指を葉山先輩に突き付け、ふんすつと頬つぺたを膨らませた。

「め、面目ない……申し開きも無いよ。……ははっ、ホントに変わったな、愛」

「……ま、まあそこはあの子たちに不満があつても、恐くて言いだせずにいた私の責任でもありますし……? これから皆さんに退部報告するんで、この際だから最後までいいは

あの子たちにもびしつと言っていつてあげますけどもっ……」

「はは、宜しく頼むよ」

「もう！だからそこは俺に任せとけじゃないんですか!?!……ぷっ」

「ははっ」

こうして私 愛川愛は、1ヶ月という長いようで短かったサッカー部マネージャー生活に幕を閉じたのでした。

× × ×

私は校内に戻り、特別棟へと伸びる渡り廊下を迷わず進む。ブレザーのポケットから取り出したシュシユで髪をまとめながら。

今までサイドに髪をまとめるのは、部活動に邪魔になるからまとめただけだ、これからの私は常にこれで居ようと思う。

あの人の印象の中の私は常にサイドポニーなんだってことが昨日判明したから、こんな些細な印象でも、あの人に私の印象を強く持つて貰えるんならなんだって利用したいし、何よりも髪を結ぶって行為が私の気持ちを引き締めてくれる気がする。

今から私が向かう場所は、生半可な気持ちのままじゃ一瞬で心が折れちゃう戦場。これからは毎日が戦いみたいなものだから。

……こんこん、と、とある教室の扉を叩く。

その教室のプレートには何も書かれておらず、一見しただけでは何の為の教室なのか分からないし、ここが私の目的地で合っているのかどうかさえとても分かりづらい。それでもそのプレートに貼られた何枚かの可愛い可愛いシールが、ここが目的地で合っているのだということを教えてくれている。

「……………」

そして私は昨夜用意したもう一通の封筒を握り締めてその扉に手をかけた。私の最終決戦の、そして戦いの始まりの地へと続くその扉へ。

続く

## 愛心

胸の前で封筒を握り締めた私は、これから始まる新しい世界と私を繋ぐその扉を開けた。

……扉を開けたその先ではいろはちゃんから聞いていた、特別な空気に包まれた穏やかな雰囲気と温かい紅茶が優しく香る、そんな心安らぐ空間は……そこには無かった。

そこは、かつんかつんと今にも活動を止めてしまいそうな音を立てているとはいえず、ちゃんとヒーターは点いているはずなのに、まるで寒空の下に放り出されてしまったのかと錯覚してしまうくらいに、とてもとても冷え冷えした何かに支配されていた。

——そっか……やっぱりこつち側に転がっちゃったんだ……

扉をノックした時に室内から聞こえてきた覇気の無い返事を聞いた時に、ホントは気付いていたのかもしれないけれど。



「……し、失礼します」

室内に入ると、当然のことながら比企谷先輩が驚愕の表情を浮かべて私を見てる。

あ、あはは……昨日振ったばかりの女の子が突然部室に入ってきたら、それは驚くよね。

……ど、どうしよう。今日の私の意識は“奉仕部”にだけ向いてたから平気でいられるつもりだったんだけど、いざ比企谷先輩の顔を見たら顔も身体も火照ってきちゃったっ……

「……貴女は確か一年の愛川さん、ね。……どういったご用件かしら」

決めたはずの覚悟が、一目見ただけの比企谷先輩の姿によって脆くも崩れ去ろうと足が竦んでいる情けない私に、冷水でも浴びせかけられたのような冷たい声が掛けられた。

——はっ！いけないいけない！

たぶん常時であればさらに竦んじやいそうなその冷たい声が、怖じ気付いて靄がかかってしまった私の頭の中を一発でクリアにしてくれた。

「……あ、えっと……わ、私のこと……知ってるんでしょうか……？」

本当はそんなこと今はどうでもいいことなんだけど、“あの雪ノ下先輩”が私なんか

のことを知っていたという事実が少し気になって思わず聞いてしまう。

「ええ、貴女とは文化祭実行委員で共に仕事をした仲だもの。……正確には知っている、ではなくて憶えている……かしらね」

「そ、そうですね……。その、とても光栄です。ありがとうございます……」

直接的にはほとんどお話ししたこと無かったけど、まさか憶えてくださっているだなんて思わなかった。しかも名前まで。

「……それで、その愛川さんがどのような用件なのかしら」

謎の昂揚感にほけくつとしちやつてた私を、雪ノ下先輩はたぶん依頼人席なのであるう長机の前に置かれた椅子へと促す。

「あ、はいっ……その、失礼します……」

戦いに赴いたはずなのに、比企谷先輩と雪ノ下先輩に出鼻を挫かれてしまった恥ずかしいさに、私は慌てて椅子に腰掛ける。

腰を掛けて、私は改めて室内の……奉仕部の様子を窺う。

も、もちろん比企谷先輩は視界からシャットアウトっ……！とりあえず今は目に入れないようにしよう！

『奉仕部ってさ、すごい居心地いいんだよねー。全つ然依頼者なんて来ないんだけど、みんななんとなく好きなように自分の時間を過ごしてさ、なんか暖かくて安心できる空間って言うのかな。……でね？たまりに依頼者が来ちゃった時なんかは、結衣先輩が筆頭になって目をキラキラさせちゃってさつ、んで、それ見てる雪ノ下先輩が溜息吐いて頭押えてたりするんだけど、すぐ結衣先輩に抱き付かれて万更でもなさそうに顔赤くして、結局は結衣先輩のお願い聞いちゃうんだよねー。で、先輩は超めんどくさそうに目を腐らせるまでがいつもの流れなの。そんないつものお決まりの流れもなんだか微笑ましくってさ、なんか超疎外感つ……』

——初めていろはちゃんに比企谷先輩の、比企谷先輩達のお話を聞かせて貰った時の事を思い出す。

でも、私の向かいに座って黙ってこちらを見つめてる由比ヶ浜先輩の目は、ひとつとしてキラキラなんてしてない。

心ここに在らずという感じで、悲しそうに、苦しそうに。

そして私の斜め右側に座ってる雪ノ下先輩も、由比ヶ浜先輩に頭を押さえるわけでも顔を赤くするわけでもなく、まるで生気を感じられずにただ事務的に依頼者である私の出方を窺っているだけ。

たぶん奉仕部の関係性を全く知らない人ならば、この空気を特になんとも思わないだろうけど、私は知っている。いろはちゃんから聞いている。この広い教室に、たったの三人で毎日を通りかかっているこの人たちの特別な関係を。だからこそピリピリと感じてしまう。

——崩壊——

この二文字を……

原因はもちろん昨日の出来事。比企谷先輩は、たぶん昨日の内に打ち明けたんだろうね。

そしてその事実を心が許容出来ずにいるお二方が、比企谷先輩と上手く接することが出来ずにいるんだろう。

そしてその先に待ってるのはあの二文字……

今日私はこの場所に戦いに来たのに、どうやらその戦いは全く別のものになってしま  
いそうだ。

私は、色んな覚悟を決めて、ようやく初めて突撃できたこの部室内のこの今にも壊れてしまいそうな空気を目の当たりにして、なんだかとても悲しくなった。

ずっと一人ぼっちだったという比企谷先輩が、初めて安らぎを感じられた特別な場所。

一生懸命に恋してたいろはちゃん、苦悩し躊躇いそれでも怯まず戦っていた特別な場所。

そんな二人に憧れて、ずっと弱くて消極的だった自分から一步を踏み出して、ようやく私が次の私になる為に辿り着いた特別な場所。

そんな特別な場所が、いま目の前で壊れようとしている。

私はこの重く息苦しい現状に、

「……突然お伺いしてしまい、誠に申し訳ありません。……本日は奉仕部さんにとっても重要なご相談があり、こうしてお伺いさせて頂きました」

とても悲しくて……

「……私 愛川愛は」

とても悔しくて……

「……本日っ！この奉仕部に入部願いに参りました……！」

……そして、とてもとても……とつてもとつても怒っていますっ!!

× × ×

「ちよ、ちよつと待て愛川……お前なに言ってるの……?」

「……っ!」

……ううつ、比企谷先輩が動揺するであろうことはもちろん分かってたけど、とりあえず今だけは私に話し掛けないで欲しいです……気持ち揺らいでしまいます……

「……え?……なんでヒツキーがこの子知ってるの……?」

「……そう、ね。……いくら同じ文実とはいえ、あなたがほぼ関わりの無い一年生、しかも女子生徒を知っているというのはいささか不自然ね……」

つい今しがたまで生気を感じられなかったお二人が、比企谷先輩が私の名前を出したことで途端に食い付くように問い詰める。

「あ、や、その……なんつーか……」

言葉に詰まった先輩は、一瞬だけ気まずそうにチラリと私に視線を寄越す。

極力見ないようにしていた私も、この流れではさすがに目が勝手に比企谷先輩を追っ

てしまっていて、そのタイミングで視線を寄越してくるものだから、バツチリと目が合ってしまった。

「……」

「……」

すぐさまお互いに視線を逸らすと、比企谷先輩は照れくさそうに頭をひと掻きしてから雪ノ下先輩達の質問に答える。

「……あー、なんだ……。い、一色の友達だ」

一言そう告げると、また気まずそうに視線を宙に漂わせた。

「……そう……」

「……あ、なんだ、いろはちゃん繋がりが……」

最初は食いつくように比企谷先輩を問い詰めたお二人も、いろはちゃんの名前が出たことで、また元に戻ってしまう。

「……愛川さん。貴女がどういった経緯で奉仕部に入部したのかは分からないわ。……ただ、いずれにせよその申し出は受けられないわね……」

「……どうしてでしょうか……? 昨日、こちらの顧問でもある平塚先生には先に許可はとつてあります」

「そうなの。……でもそれは関係ないの。そういう問題では無いのだから……」

雪ノ下先輩は、今にも消え入りそうな弱々しい声で、呟くようにそう言った。

「じゃあ、どういう問題なんでしょうか」

……そんなこと、わざわざ聞かなくなつてホントは分かつてる。

「……その、申し訳ないのだけれど……奉仕部は、もう……」

そこまで言うとは、雪ノ下先輩は苦しそうに言葉を詰まらせた。

……もう、終わりだから……。そう言葉を繋げようとしたのかな。

「もう……なんでしょうか」

ここまで苦しそうに言葉を詰まらせた雪ノ下先輩を見たら、本当ならその先なんて問いたださない方がいいのかもしれない。

でもダメです。私はその苦しそうなあなたの表情さえも頭にきてるんですから。

「生徒は部活を選ぶのも部活に入るのも自由なはずです。……でも、それでもダメだとおっしゃられるのであれば、その理由をちゃんと聞かせて頂きたいです」

うん。どうやら私は自分が思っているよりもずっと怒ってるみたい。

「……えつと……愛川さん、だよね……? その、なんで愛川さんは奉仕部に入りたい

のかな……。あたしが言うのも変だけど、うちって凄く特殊な部活だし、今まで一度もうちに関わった事の無い愛川さんが、そうまでして入りたい部活とは思えないんだよね」



俯く雪ノ下先輩をフォローするかのようになり、由比ヶ浜先輩が私に質問をしてきた。

「……今まで関わった事が無かったら、入部したいと思つてはいけないでしょうか」

私はそんな由比ヶ浜先輩にももちろん嘸み付いてしまう。

だつて、私が怒つてるのは、あなた方お二人なんですから。

「そ、そういうワケじゃないんだけど……」

そして由比ヶ浜先輩も言葉を詰まらせてしまう。

……あはは、なんだろ。すつごいおかしい状況だよ。入部希望に来た一年生が、不機嫌そうに先輩方に食つて掛かつてるんだもん。

普通に考えたら有り得ない状況だし、今の私が雪ノ下先輩達にととても失礼な事をしているのは重々承知している。

でも、失礼は重々承知の上で、それでも私は言わせて頂きます！

「分かりました。なぜ私が奉仕部に入部したいのか、全てお話ししますっ……！」

その時、「まさかっ……」つて比企谷先輩の顔が蒼白になったけれど、私はもうそんなの気にしない！

……や、ホントは物凄く気にするけどもっ……

恥ずかしくて死んじやいそうだけど！熱を持ちすぎた頭がぐらくらくと夢見心地だけ

ど！

……それでも私は言わなくちやいけない。

——申し訳ありません。雪ノ下先輩、由比ヶ浜先輩。

今から私はお二人に対して、本当に本っ当に失礼な暴言を吐いちゃうかもしれない。  
ん。

あとで土下座でもなんでもしますので、どうか許してくださいっ……！

——ごめんなさい！比企谷先輩！

たぶん今から先輩は公開処刑みたいになっちゃいます！

でも私も死ぬほど恥ずかしいんで、先輩も私と一緒に死んでください……！

——そしてごめんなさい！いろはちゃん！

もしかしたら、いろはちゃん的にはこのままの状況の方が安心出来るのかもしれない。  
い。

今から私がする事で、たぶんいろはちゃんにはすっごい迷惑が掛かると思う。

でも……やっぱりこんなのダメだっと思うから、今から私がしちゃう事を許してねっ

……!

本日奉仕部に赴くにあたって、ゆうべからずっと想定してた戦いとは全然違う戦いになっちゃったけど、どちらにしたって負けられない戦いがあるんです!

ふううう……と深く息を吐き出して、「んっ……!」と気合いを入れた私は、今まで極力見ないようにしていた比企谷先輩を真っ直ぐに見つめてこう切り出すのだった。

「私は……比企谷先輩の事が好きなんですっ……!」

× × ×

突然の乱心とも言えるような私のセリフに、部室内は完全に凍り付いた。

「……はっ」

「……なあっ!?!」

「……マジかよ……」

こ、これは思ってたよりもずっと死んじやいそう……

私が放った言葉をイマイチ理解出来てないのか、心底呆然と私を見つめる雪ノ下先輩

と由比ヶ浜先輩。

真つ赤な顔でわなわなと悶えている比企谷先輩。

……あう……は、恥ずかしいっ……

でも私の戦いは今まさに始まったばかりなんです……! だから私は羞恥に燃え上がる顔も身体も心臓も、とりあえず今だけは横に置いて、さらに自らを死地へと赴かせなくちゃならない。

比企谷先輩っ……あなたと一緒に、です!

「……わ、私は昨日! そちらの比企谷しえん輩にチョコ渡してばっちやり振られちゃいましゅたっ……!」

って全然ダメでした。また嘔み嘔み病が再発しちゃってるよ……!

燃え上がるほどに真つ赤になってるであろう顔に両手をあてて覆い隠したいけれど、今はまだ我慢しなくちゃ!

「ん! んん! ……わ、私は、雪ノ下先輩もご存知の通り、比企谷先輩と一緒に文実で働いてて、あの時の比企谷先輩の姿が、そのっ……か、格好いいって思っちゃって……!」  
それから、ずっと密かに想い続けてきたんでしゅ……す!」

未だあんぐりと口を開けているお二人。でも私はさらなる告白を続ける。

「……でもそんな気持ちを表に出すことが出来ずにいた私は、ある日いろはちゃんと比

企谷先輩が仲良しだつて事を知ることになって、そして……つい先日いろはちゃんに頼み込んで比企谷先輩を紹介してもらいました」

わちやわちやとパニックを起こしていた頭がようやく落ち着いてきた私は、必死だった口調を落ち着かせて、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「でも……いろはちゃんに紹介してもらつて三人でお話してる内に、私はすぐに分かつてしまいました。……いろはちゃんは、比企谷先輩の事が好きなんだ……つて。……そして、比企谷先輩もまた、いろはちゃんを特別な眼差しで見てるんだ……つて」

その言葉に、ずっと呆然としていたお二人がビクリと肩を震わせた。

「……それでも私は、そこまで理解した上で……玉砕承知で告白しちゃいました……だつて……」

そして私は、弱々しく不安げに私を見つめる雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩の目をしっかりと見つめた。

「……だつて、振られちゃつたつて構わないくらい、自分の気持ちを押さえ付けておけないほどに、本当に好きになつてしまったから……。だから、覚悟を決めて一步を踏み出したんです」

……もうダメ。もう比企谷先輩のことは一ミリも見られない……

昨日頑張つて告白した時よりも遥かに恥ずかしい。

たぶん先輩も真つ赤になつて死にたいくらい恥ずかしいんだろうな……本当にすみません……

だから私の視界には、今はもうお二人しか映つていない。正確には比企谷先輩は視界から削除しちやいました。

そして私の視界の中心にいるこの二人は、先ほどまでの生気の無い顔でも呆然とした顔でもない、真剣な眼差しで私の話に耳を傾けてくれている。

でも私が言いたいことはこんなことじゃないんです。むしろ本題を語る為の……本題をぶつける為の前座に過ぎません。

前座にしては自分を投げ出しすぎた気がしないでもないですけど……

真剣に聞いてくれてるって確信出来たからこそ、これから本題に入らせて頂きますね。

「でもそれは、いろはちゃんだつて同じなんですよ……いえ、同じだなんて言つたらいろはちゃんに失礼です。それくらいに、いろはちゃんは色んな覚悟を持つて戦つてたんだと思います。……雪ノ下先輩、由比ヶ浜先輩、あなた達と」

× × ×

——あなた達と——

私のその言葉に、お二人は口々に「どういう意味……？」と漏らす。

やっぱり、いろはちゃんがどんな気持ちでこの場所に居たのかなんて、この場所の中心たるお二人には見えてないですよ。

「雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩は、いろはちゃんがどういう気持ちで奉仕部に来ていたか分かってますか……？」

「……それは、ヒ、ヒツキーに会いたかったからじゃないの……？」

「目的はそこだと思えます。……でも私が聞いているのは、目的じゃなくて気持ちです」  
「気持……ちゅ……ごめんなさい。私には分からないわ」

「……いろはちゃんは、たぶんここに来る度に物凄く恐かったんじゃないかな、って思います。直接は教えてくれませんでしたけど。……初めて比企谷先輩のお話を聞かせて貰った時に、この奉仕部の絆とかも色々教えてくれたんです。……とても楽しそうに。とても羨ましそうに。そしてとても悔しそうに……。まるで、あの三人の関係が特別すぎて、あの場所には自分の居場所なんてない……って言ってるみたいに悔しそうに」

「そう……なの？」

「……いろはちゃんか？」

ずっと葉山先輩が好きだと誤魔化してたいろはちゃんの本当の気持ちに私が気付いたのは、いろはちゃんが比企谷先輩のことを楽しそうに話してる時の笑顔を見たからじゃなくて、むしろその悔しそうな表情を見てしまったから。

だから私はいろはちゃんの本当の気持ちに気付けたんだけど、同時にとても苦しんでたんだな……つてことも分かってしまった。

「……それでもいろはちゃんは、逃げずに真っ直ぐに立ち向かいました、雪ノ下先輩たちに。……不安な気持ちを押し殺して、全力で」

「……」

「そして頑張りに頑張りぬいて、ついに昨日その想いが報われたんです。……でもいろはちゃんだって、私と同じように振られることを覚悟した上での告白だったんです。特別な絆のお二人が居るんですもん、当然です。……それでも、それでもやっぱり想いを伝えたんです。自分と比企谷先輩の絆が壊れちゃうかもしれないことから逃げずに」

正直、私と比企谷先輩の間には壊れてしまうような絆とか全然ない。

だからこそ恐れずに告白出来たのかもしれない。もしも私にもいろはちゃんと比企谷先輩くらいの絆があったのだとしたら、それが壊れてしまうことを恐れて、もしかし



たら告白なんて恐くて出来なかったかもしれない。

でもいろはちゃんはそれでも想いを伝えた。そして新しい絆を手に入れられた。

「……正直凄いです。特別な絆を嫌というほど目の前で見せ付けられても逃げずに立ち向かって、自分の絆が壊れちゃうかもしれない事からも逃げずに立ち向かって、そして想いを告げて手に入れた。……悔しいけど、ホント憧れちゃいます」

「一色さんが……」

「……いろはちゃん」

「だからこそ……だからこそです！ だからこそ私も飛び込んでみたいなって思いました！ 奉仕部に、この特別な場所に」

そう。私が奉仕部に入部したいって思ったのは、いろはちゃんの強さが羨ましかったから。負けられない、負けたくないって思ったから。

「……言っておきますが、私は別に諦めたわけじゃないんです！ だって……す、好きなんですもん！ たかだか一度振られちゃったくらいで、彼女が出来ちゃったくらいで簡単に諦められるくらいなら、そんなの本物じゃないっ！」

私のこの一言……本物というその一言で、お二人の目に力が宿った気がした。

なぜだかは分からないけど、これは畳み掛けるチャンスかもしれない！

「だから、私の今の目標は、とにかく私を先輩に知ってもらうことなんです！ 別にいろ

はちゃんから先輩を奪つちやおうとか、そんな大それた事は今はまだ考えてません。ただ私を知ってもらいたい。せめてスタートラインに立ちたい。そしてスタートラインに立てたときに、もう一度本気で想いをぶつきたい！……それが今の私の目標です。だから出来る限り近くに居たい。それが、私の入部希望理由です。……………でも、」

そしてここからが本当の勝負です。

私が高なでこんなにも怒ってしまったのか。なんでお二人を責めるような真似をしたのか。

「……そんないろはちゃんや私の想いに比べて……お二人の想いは………どうなんでしょうか……」

私の低い声から発せられたその言葉に、空気がしん……と張り詰める。

雪ノ下先輩からの冷たいプレッシャーが凄い。由比ヶ浜先輩からの不安感が凄い。

でもすみません、私は止まれないんです。いろはちゃんの為に。お二人の為に。そして何より、私の大好きな比企谷先輩の為に。

「……ほとんど初対面みたいな先輩方にこんな言い方をするのは大変失礼だと分かっています。でも言わずにはいられません……」

すつと目を閉じて深く深呼吸をする。

膝の上で握った手のひらがじんわりと汗をかいてるけど、気にせずにさらにギュツと握る。

「……お二人は、いま自分達が抱えている想いに、そんな覚悟で臨みましたか……？ 臨めましたか……？」

× × ×

「……どういふことかしら」

凍り付いてしまいそうな雪ノ下先輩の問い掛け。

物凄く恐くて仕方ないけど、私は強気なフリをしてそれに答える。

「お二人は、このとても大切な場所が壊れてしまう事を恐れるあまりに、自分の本心から逃げていませんでしたか？ つて事です」

「私が……私たちが逃げた……？」

「はい。むしろ今まさに逃げてる真つ最中のようにも見えます」

……こんな偉そうなこと言ってる癖に声が震えそう……

でも今だけは弱気になっちゃいけない。強く厳しく、この人達に勝たなくちゃいけな

い。

「あのさ、愛川さんになにが分かるのかな……？　あたし達の何が分かるの……？」  
「分かりますよ……だって、今の先輩たちは全然恐くないですもん……。いろはちゃんに聞いてたのと全然違う。なんであのいろはちゃんがこの程度の人たちにあんなに臆病になってたのか全然分かりません……。だって……」

——ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……！

ホントは分かっています。お二人がどれほど苦しいのかを……私なんかこんなこと言う資格なんて無いってことくらい。

関係性が深くなれば深くなるほど、絆が強くなれば強くなるほど、その関係を……その絆を壊してしまうことはどれほど恐ろしいことだろう。どれだけ臆病になってしまおうことだろう。

私はその絆がまだないから平気で告白できた。

いろはちゃんには絆が壊れるかもしれない覚悟で果敢に告白出来たけど、いろはちゃんには申し訳ないけど、たぶんこの三人の特別な絆ほどの絆では無いと思う。

でもこの三人は……んーん？三人だからこそ、この特別な絆を壊してしまう勇氣を持たなかったんだと思う。

そもそもスタートが私やいろはちゃんとは違う。三人の距離が特別すぎて近すぎたからからこそ、壊す覚悟が出来なくなってしまうんだ。

それは誰にも責められない。確かに意気地なしな心の弱さかもしれないけど。

でもたぶん……もし私というはちゃんが雪ノ下先輩たちと同じくらい比企谷先輩との絆を持つてしまつてたら、たぶん告白なんて出来なかつたと思う。

それでも私は言わなくちゃ。この先の言葉を……

「……お二人は、自分達の特別な絆にあぐらをかいて、比企谷先輩が自分達以外の誰かを……いろはちゃんを選ぶわけないって、勝手に信頼を押し付けて勝手に安心して、大事な一歩を踏み出さなかつただけじゃないんですか……？」　そして、残酷な現実を目の当たりにしてしまつたから、その現実から目を背けて、この関係を終わらせようと逃げてるだけじゃないんですか……？」

……苦しいよ……、私なんかの言葉で、この素敵なお二人がこんなに苦しそうに顔を歪めてしまうことが。

でもあと少し。あと少しだけ……！

「……正直、ガツカリしました。私はいろはちゃんに負けたくないから、いろはちゃんと同じようにこの奉仕部って部活に飛び込んで、いろはちゃんみたいに強くなれたらな

……つて覚悟を決めてここまで来たのに、その肝心のお二人が、たかだか比企谷先輩にちよつと彼女が出来ちやつたくらいでうじうじして、自分の想いを伝えもせずに逃げるだけの人たちだったなんて。……はつきり言つてこんなんじや「勝負」にもなりません。やつぱり私の勝負相手はいろはちゃんだけです！」

私がそう言い切つた瞬間、室内がピシィツと氷に包まれた感覚に陥つた。

ひ、ひいい……！やりすぎだったかなつ……

『雪ノ下先輩つてさー、超美人だけど超クールなイメージじゃない？ でもねー、あの人つて勝負事となると実は超負けず嫌いなんだよねー。それはもう尋常じゃないくらいいの』

『結衣先輩つてすつごく優しいし空気を読むのとか超得意なんだけど、こと先輩の事となるとムキキツつて空気を讀まなくなつちゃうトコあるんだよねー。どんだけ好きなの？つて呆れちゃうくらいに』

これは比企谷先輩の……奉仕部のお話を聞かせて貰つた時のいろはちゃんのセリフ。

……今は比企谷先輩をいろはちゃんに取られちやつた直後だから、もう頭のなかが

いっぱいいっぱいになって冷静な判断なんて出来ないですよね。

でも、今の混乱した一時の感情だけでこの絆を壊してしまったら、たぶん雪ノ下先輩たちは凄く後悔してしまうと思う。

でも後悔して冷静になった時にはもう手遅れだと思うんです。こんなに不器用で特殊な関係の先輩たちは、一度完全に壊れてしまった関係を元通りに戻せるほど器用な人たちじゃないと思うんです。

だったら私が焚き付けて挑発してでも何してでも、このお二人の比企谷先輩を想う気持ちに賭けてみるしかない。

いろはちゃんが苦しみながらも憧れたこの素敵な関係。

そんないろはちゃんを見て私も憧れてしまった素敵な関係。

そして何よりも比企谷先輩がとても大切にしている素敵な関係。

そんな、本来なら太陽みたいにほかほか暖かいであろうこの場所が、こんな一時の感情なんかで壊れて欲しくない！だから私はこんなにも怒ってるんです！

「……………ふふふ……………」

!?

その時、とても小さくとても低い笑い声が室内いっぱいに広がった。

とても小さいから普通なら教室中に響き渡るはずは無いんだけど、これは間違いなく室内全体に響き渡ったと思う。それほどまでの重圧を感じる。

「……愛川さん。あなた、随分と素晴らしい度胸をお持ちのようね。……ええ、とても感服するわ」

「……ひっ」

どどどどうしようっ……！身体がガタガタと震えちやう……！

私、皆さんの……というか本人の前で比企谷先輩への想いを熱く語っちゃったりして、すでに精神的にはもう何度も死んじやつてるくらいなのに、これからさらに酷い目に合っちゃやうのかな……!?

そんな覚悟を密かに決めていた私をよそに、雪ノ下先輩は俯いてこんな独り言を始めた。

「……まったく……私としたことが、みつともなく一体なにをこんなにも悩んでいたのかしら……本当に人生で最大級の汚点になりそうね」

「……えへへ、そうだねゆきのん！こんなものって全然ゆきのんらしく無かったってゆーか、こんなのあたしも全然らしくなかったし……！」



「ええ……駄目ね、私たち」

「うんつ。本当にね」

雪ノ下先輩の独り言は由比ヶ浜先輩とのふたり言へと広がり、そしてそのふたり言が私を含めての三人言へとさらなる広がりを見せる。

「愛川さん」

「は、はいっ」

「あなたがなぜ私達に……までの事をしてくれるのかは分からない。私達を焚き付けても、あなたには不利益にしかならないと思うのだけれど。……でも、誠に遺憾だけれど、今回はあなたのその安い挑発に乗らせてもらうことにするわ。……見ていなさい」

……あ、挑発だってバレバレだったんだ……

すると雪ノ下先輩はすつと立ち上がり、比企谷先輩へと真っ直ぐに向き直る。

ただ立ち上がってくるりと向き直っただけだというのに、その姿は信じられないくらいに美しい。

「……比企谷くん」

「……え？あ、な、なんででしょうか……」

あ、比企谷先輩居たんでしたよねっ……

恥ずかしすぎて私も完全にシャットアウトしちゃってたし、たぶん私以上の公開処刑を居たたまれない気持ちで味わっていた先輩自身が、自らを空気と化してたのかもしれないけど……

雪ノ下先輩は比企谷先輩と目が合うと、その美しい佇まいから一転、耳まで真っ赤になってもじもじし始める。

前髪を弄つてみたりスカートの裾を弄つてみたりと、その姿は総武高校の氷の女王とは思えないほどに、ただの乙女そのもの。

瞳を閉じて、はあ……と深く息を吐ききると、キッと比企谷先輩を睨み付ける。真っ赤なままで。

「……昨日はあまりにも突然な出来事に心が乱れてしまつて、ちゃんと言えなくてごめんなさい。……その……おめでどう。あなたに彼女が出来てしまうだなんて、明日雪が降るところか、これはもう世界の終末も近いのかもしれないわね」

「や、その、なんだ……あ、ありがとう？」

「……で、でもっ、この際だから言わせてもらおうわ……。本当に屈辱的過ぎて、この私が今夜は血の涙を流しかねない程の苦痛を味わう覚悟であなたごときに言つてあげるのだということをお忘れないで頂戴……絶対によ」

「…………へ？お、おい、ちよつと待て雪ノし…」

「比企谷くん…………私はどうやらあなたに惹かれてるみたいだわ……………クツ、本当に屈辱ね…………本来であれば、あなたから土下座で告白されたのならば、ギリギリで交際してあげなくもない程度のちつぽけな気持ちだというのに……………」

「…………いやちよつと待ってね？…………お前いきなりなに言つてんの？」

「今回はたまたま先に一色さんに譲る形となつてしまつた訳だけど、よくよく考えたらたかだか高校生同士の浅い恋愛など、人生の中で起こりうる出来事でいえば取るに足らないものよね。どうせ長続きなどするわけが無いのだから、今のうちにせいぜい一瞬の輝きを楽しんでおくことね」

「なにそれ酷くない？」

「で、でもその内、あなたも結局は本物の魅力に気付くことになるでしょう。その為ならば私はその労力を惜しむことはないのだから。…………だ、だから……………！覚悟して首を洗つて待つておくといいわ……………」

ゆ、雪ノ下先輩…………

その告白はどうかと思いますが…………

そして、涙目でなんとかそこまで言い切つた雪ノ下先輩は、両手で顔を覆い隠して椅子に座り込んでしまった。

「ゆきのんズルい！あたしだつてっ……い！」

すると次は由比ヶ浜先輩が元気に立ち上がると、雪ノ下先輩と同じく顔を真っ赤に染め上げて比企谷先輩へと向き直る。

「ちよつと待て由比ヶ浜……お、お前までまさかつ……」

「ヒツキーごめんね！あたし悔しくて悲しくて、ちゃんとおめでどうつて言つてあげられなかった……ホントならあたしが一番に祝福してあげなくちゃいけないのに……」

「いや、そんな……」

「でも！やつぱり悔しいよ！　だつて、あたしだつてヒツキーのこと大好きなんだもん！　てゆうか、いろはちゃんよりゆきのんより愛川さんよりも、誰よりも先にあたしがヒツキーのこと好きになつたんだしっ！」

「……ぐうっ」

「だからあたしだつて負けない！　とりあえずはおめでどうかも知んないけど……！

でもあたしも諦めないから！　ヒツキーにはまだハニトーの約束だつて守つてもらつてないんだから、いろはちゃんには悪いけどー日だけは絶対に付き合つてもらおうし！　約束通り二人でシー遊びに行つて、んで、あたしの魅力だつてちゃんと知つてもらうんだかんね！」

由比ヶ浜先輩もなんとかそこまで言い切ると、うがーつと頭を抱えて机にダイブしてしまった。

お、お疲れさまですつ……。

……でも二人でシーに行くことは決定事項なんだあ……いい、いいな……

——ごめんねいろはちゃん……！まさかこんなことになるなんて……

私、ここまでの事は想定してなかったよお……もしかしたら私、とんでもないことしでかしちゃったのかもっ……！

「……愛川さん」

「は、はいっ……！」

お二人のあまりのパワーに押されてしまい、ぼけくつとしちやっていた所に、早くも回復したらしい雪ノ下先輩から声が掛かった。

あ……まだプルプルと震えてるから、どうやらまだ回復しきつてはいないみたいだけど。

「……いいでしょう。あなたの入部を認めます。明日から来るといいわ」

「ほ、ホントですか!? ありがとうございます！ ……え？でも明日から、ですか……

? 今日もまだ下校時刻まで時間ありますけど……」

「今日のあなたはまだ部員ではないの。用は済んだのだから、もうお帰り願えるかしら」  
すると雪ノ下先輩は居心地が悪そうにすっと目を逸らすと、こほんと咳払いをひとつ。

「……………今日は……………三人での奉仕部が最後の日になってしまったの。私も由比ヶ浜さんも、まだ比企谷くんと話したいことが山ほどあるのよ。お、主に私が聞いていないシーの約束とやらについて……………。なので申し訳ないのだけれど、今日だけは、三人で居させてもらえないかしら……………」

——そっか……………お邪魔な私を明日から迎え入れて頂けるんだもんね。

だったら今日だけは邪魔者は退散しておこう。そのセリフで机にうずくまったままの由比ヶ浜先輩の肩がビクウツと震えたし。

「はい。それでは今日は帰らせて頂きます」

そして私は立ち上がり、雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩に深々とこうべを垂れた。

「今日は分も弁えずに生意気なことを言ってしまった、誠に申し訳ありませんでした。……………それなのに、こんな失礼な私を明日から受け入れて頂けるなんて、本当に感謝以外の言葉が思い浮かびません。……………明日から、どうぞよろしく願います!」

「ふふっ、いいのよ。これでもあなたにはとても感謝しているの。……………ありがとう、愛川さん。あなたのおかげで、とても大切な物を失わずに済んだわ」

「そ、そんなことないですっ……」

「そんなことあるのよ。黙って謝意を受け取ってくれると有り難いのだけれど」

「……はいっ」

まだ告白の熱が冷めやらないのか、瞳は潤んだまま頬も赤いままだけど、そう言つて雪ノ下先輩は優しく微笑む。

「……ただ」

「っ!？」

「私が本気になった以上は、二度とあのような生意気なセリフは吐けないと理解しておきなさい。あんな真似をしてまで私を焼き付けた事を後悔させてあげるわ。……」

もう、一色さんにもあなたにも、決して遅れは取らないから」

……ふっ! やっぱりの人は負けず嫌いなんだな。

でも、そんな強気な微笑を浮かべる雪ノ下先輩は、今日一番の美しさだった。

「……えへへ、望むところですよ!」

もう一度ペコリと頭を下げた扉へと向かう私。

その際、うづくまつた由比ヶ浜先輩がちよこつとだけ起き上がって、たははくと赤面したまま苦笑いを浮かべながらだけど、胸元でちよこちよこ手を振ってくれた。

ちなみに悶えまくっている比企谷先輩には恥ずかしさと申し訳なさで、とてもじゃないけど顔を向けられませんでしたっ……!!

——こうして私 愛川愛は、ついに念願の奉仕部への入部をはたしたのです!

× × ×

「……あ、ひ、比企谷先輩……! その……お、お疲れさまでひゅっ……」

「……」

その日の最終下校時刻間際、私は駐輪場にて比企谷先輩を待ち受けていた。

部活は先に帰らされちゃったけど、別に家に帰れとまでは言われて無かったし、どうしても比企谷先輩とお話したかったから、部室をあとにしてから比企谷先輩の自転車の前で待っていたのだ。

「……あ、あの……今日はあんなことになってしまっ……ホントにすみませんでしたっ……」

「……」

ううっ……やっぱり怒ってますよねっ……



「……お前……なんつーことしてくれんだよ……」

「す、すみませ〜ん……」

比企谷先輩は頭を抱えながらも、なかなか私のことは見てくれない。

そこまで怒ってるのかなと不安になったんだけど、そっぽを向いてる先輩の耳が赤く染まつてるし、どうやら先ほどの私の暴走による熱烈な想いの打ち明けに照れてるみたい。

うう……重ね重ねすみません……

でも私だって先輩を待っている間、ここですつと悶えてたので許してください……！

「マジでどうすんだよアレ……」

う、うーん……私が退出させられてから、一体どんな風だったんだろ、あの教室内

……。想像しただけでも怖い……

でも未だ深い溜め息を吐き続ける比企谷先輩を見ていたら、ついついちよつとだけムツとしてきちゃった。

なんか最近ちよつと短気になってきちゃったのかな？

「そ、それは確かに私がやらかしちゃったのは事実ですけど！　で、でも結局一番悪いのは比企谷先輩なんですよ!?!　あんなに素敵な人たちに囲まれてるくせに、ずつと気持ちに気付かないフリして一番逃げてたのは比企谷先輩なんですから……!　い、今の現状

は今までのツケです！こんなにも女の子たちの心を弄ぶ比企谷先輩なんてバチが当たっちゃえばいいんですっ……………！」

「……………弄んでねえよ……………」

むっ……………それをちゃんと理解して改めなきや、先輩はこの先ずっと地獄を見ることになりませんからね!?

「……………まあ、なんだ」

すると、ずつと溜め息ばかり吐いてた比企谷先輩が、とても恥ずかしそうに……………でもちよつとだけ嬉しそうに頭をがしがし搔くと、ポツリとこんなことを言うのだった。

「……………愛川のおかげでひでえ目にはあつたが、その……………助かつたわ……………あんがとな」

「……………っ！」

……………やつぱりこの人はズルい……………こんなだから誰彼構わず惹かれていつちゃうんですよ……………

「……………べ、別に私はお礼を言われるようなことはホントなにもしてないです。……………たぶん雪ノ下先輩も由比ヶ浜先輩も、初めて体験する事態に、ただただどうしたらいいのかわからずに混乱してただけだと思います。そして、その事態をちゃんと認められるきっかけが欲しかっただけだと思うんです。だから私は単なるきつかけのひとつですよ」

「……そうか。……でも、あんがとな」

「くくく」

もお！……ホントにズルい……！

熱くて顔が上げられない私は、こんな何気ない程度のことでも照れてしまった自分を先輩に悟られないように、ころつと話題を変えることにした。

「……そつ、そんなことよりもっ！……な、なんで先輩は一人で居るんですか!?」

「うお！いきなりだな。いや、なんでつてもう帰るからだけど」

「はああ……なんで昨日から付き合い始めたばかりの彼女と一緒に帰らないんですかねって意味なんですけどどっ……」

「は？付き合つてたら一緒に帰んなきゃなんないの……？恥ずかしくて嫌なんだけど」

「……」

いろはちゃん……前途多難だね……

「もお！いろはちゃんはたぶんしばらくは恐くて奉仕部に近寄れないんですよ!? 彼氏の比企谷先輩だつてそれを理解してくれてるはずだつて思つて、今ごろ絶対に生徒会室でポツンと来てくれるの待つてるはずですよ!? まったく！そんなことじゃホントにすぐに愛想尽かされちゃいますからね！……まあ愛想尽かされたらそっちの方が好都合ですけど……」

……さ、最後にぼしよりと付け足した心の呟きは聞こえてないハズ！

「ほらほら、早く迎えに行つてあげてください〜い」

そして私は比企谷先輩をくるりと回転させて、背中をグイグイと押し上げる。

ふふつ、今日は……んーん？明日からは、雪ノ下先輩たちのこと込み込みでずうっといろはちゃんに物凄い迷惑をかけちゃうだろうから、せめて今日くらいは大人しく先輩を譲つてあげるね？いろはちゃん！

「……行くから押すなつーの……つーかさっきの部室での事といい今といい、愛川つて……こんなキャラだったっけ……？」

グイグイと押されながら、比企谷先輩が困惑した様子で尋ねてきた。

ふふふ、もう昨日のこと忘れちゃったんですか？だつたらもう一度言つてあげますね？

「だから昨日言つたじゃないですか。なにかに目覚めちゃったかもつて♪」  
私の最大級の笑顔で！

「……目覚めちゃつたモノが強烈すぎんだろ……」

そんな最大級の笑顔に対して呆れた顔を返してくる先輩。

でも私は今の私、結構好きですよ？いつも周りの目を気にして、いい子でいなきやい

けないって自分を誤魔化して、自分に正直になれなかった昔の私なんかよりもずっと！

——相変わらず頭をがしがし掻きながら、渋々校舎へと戻っていく比企谷先輩の背中を優しく見守りながら、私 愛川愛は思うのです。

私の初恋は綺麗さっぱり終わってしまったけれど、初恋は叶わないのが定説の恋愛事情においては、これで良かったのかもしれない。

だって初恋は終わっちゃったけど、今私が比企谷先輩に抱いてる想いは、もう恋じゃなくて愛なんでもん。

ふふっ、そんなの単なる屁理屈かもしれないけど、でも今はそれでいい。良く言われる言葉だけど、漢字で書けば恋は下心、愛は真心ってね。

だからあながち屁理屈でも間違いでもない、私の初めての愛心。

恋心から愛心へとパワーアップした私の想い、届かせるのはあまりにも壁が高過ぎるけど、人を愛する気持ちを持つのは自由なのだ！

だからもうちよとだけ頑張ってみよう。

少なくとも私の前に、比企谷先輩よりも素敵な人が現れるまでは、二番目の恋が始まるその時まで、私はこの愛心の思うままに、正直に自分の想いに身を委ねていたいと

了

思うのです！